
新説御伽草子桃ねーちゃん

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新説御伽草子桃ねーちゃん

【コード】

N9809D

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

爆乳ねーちゃんが目指すは鬼ヶ島！旅のお供は馬鹿猿、シヨタ犬、メガネ雉！

たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

序幕

むかし、むかし、あるところにお爺さんとお婆さんがいました。

お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

洗濯をしていると、川を流れてどんぶらこ、どんぶらこ。

と、大きな桃が流れてきました。

そして。

「ビビってんじゃないよ野郎ども！」

ほぼ半裸の爆乳ねーちゃんが大声を張り上げた。

「あつちが『海の魔女』なら、こつちはジパングーの絶世の美女桃ねーちゃんだっつーの！」

若侍風に頭の上で、一本に結わいた白銀の髪が風になびく。

桃は鋭い瞳で鬼ヶ島を睨みつけ、鼻梁の下で艶めかしく誘う桃色の唇で、小生意気な微笑を浮かべた。

ノースリーブの着物のサイズが合っていないのか、それとも単純に爆乳だからなのか、着物の前は大きく開かれ、そこから覗く褐色の谷間には何でも挟めちゃいそうだ。

さらにふんどし一丁のケツも、谷間がスゴイ。

桃のふんどしTバックに目を奪われているのは、悪ガキっぽい顔つきの少年。ツーツと鼻血が流れた。

キラリーンと桃の眼が光る。

「どこ見てんだいサル！」

「ぶはっ！」

桃の怒りの鉄拳を顔面にごちそうさまして、サルと呼ばれた少年が荒波の海に……あ、落ちた。

そう、ここは海の上なのだ。

小舟に乗っているのは四人……じゃなかった。一人脱落したので三人。

顔面蒼白でブルブル震えている童顔の少年。いたいけに頑張っつて、自分の身長よりも大きなオールを使って船を漕いでいる。その少年は子犬のような瞳で、溺れているサルを横目で見ている。

「あのおく、猿助たんが海に落ちたみたいですけど、助けなくていいんですかあ？」

すると拳銃のメンテナンスをしていた眼鏡の青年が優しく答えた。

「大丈夫、ポチは心配しなくていいんだよ」

青年はポチの頭を静かに撫でながら言葉を続ける。

「……サルはゴキブリ以上に生命力があるから殺しても死なないよ」
毒が吐かれた。ポチと猿助に対する扱いに差があるようだ。

桃もサルのことなんか気にも留めていないようである。

「雉丸、そろそろ一発かましてやりな」

名前を呼ばれた眼鏡の青年　雉丸は銃の手入れを休めて、ロケ

ツトランチャーを肩に担いだ。

「桃さん、もう弾数が一発しかありませんが、本当に撃ちますか？」

「景気づけの一発だよ、ドーンと撃ち込んでやりな」

「承知しました」

眼鏡の奥で光る切れ長の瞳。

狙いは鬼ヶ島の断崖絶壁にそびえ立つ難攻不落の要塞　鬼ヶ城。

荒々しい海に浮かぶ小舟が激しく揺れる。風が強く、今にも転覆してしまいそうだ。

雉丸の長く伸ばされた後ろ髪が風になびく。それはまるで雉の尾のように美しい。

狙いが定まった。

ポチが叫ぶ。

「待ってダメえ！」

遅かった。

ランチャーから発射されたロケット弾が、鬼ヶ城に掲げられたドクロマークの旗を目掛けて飛んだ。

だが、ロケット弾は鬼ヶ島に近づいた瞬間、なぜか空中で爆発して硝煙の中に消えてしまったのだ。

それを見た桃の目尻がきつく吊り上がる。

「どういうことだいポチ！」

「だからダメって言ったのにい」

「撃つ前に言え、撃つ前に！」

「そんな怒らないでくださいよお」

潤んだ瞳のポチは今にも泣きそうだ。そんな愛らしいポチまったく動じない桃。けれど、そこに雉丸が間に入ってかばう。

「ポチはこんなに良い子なんだから、苛めないでくださいよ……ねえ、桃さん？」

「雉丸はどうしてポチをそんなにかばうんだい？」

「だって……可愛いじゃないですか？」

雉丸は静かに微笑んだ。ちよつとその笑い方が妖しい。

桃はどつと疲れたようにため息を吐き捨てた。

「こんなガキのどこがいいんだか、アタイはイケメンにしか興味ないね。で、どーゆーことがさっさと説明しな」

促されてポチは慌ててしゃべりはじめる。

「島全体を温羅（ひんら）の姐御さんが結界で包み込んでるんでしゅ。だからね、外からの攻撃を防いじゃうんだよ」

温羅とは今から退治に行く海賊の頭だ。近隣の村々では『海の魔女』として大変恐れられているらしい。

そして、ポチは温羅のところへ働かされていた海賊の下っ端だったのだ。で、どーにか海賊団を逃げ出した方がいいが、逃げた先で出遭ったしまったのが桃だった。それからというもの、ポチは下僕として桃に飼われ、雑用から船漕ぎまでやらされているのだ。

温羅海賊団の内部事情に詳しいポチの手引きで、どうにか鬼ヶ島の近くまで来たか、ミサイル攻撃失敗で出鼻をくじかれてしまった。

しかも、実はポチがまだ話し忘れていたことが。 。
「ブハーツ、マジ死ぬかと思った！」

口から噴水しながら猿助が海の底から這い上がってきた。肩で息を切る猿助は船に乗り込んで濡れた体を震わせた。

「ここの海マジ怖えーよ、海の底にでつけえ怪物が棲んでてさ、海藻をオレの体に巻き付けて引きずろうとすんだよ。それでオレはじいちゃんの形見のこのクナイで……クナイがねえっ！」

さよならじいちゃんの形見、海の底で成仏してください。

慌てふためく猿助の頭を桃が引っぱたいた。

「ガタガタ言ってるんじゃないよサル！」

さらに追い打ちをかけるように、遠くから飛来してきた燃える石が猿助のおでこに直撃。

「アチーッ！」

ドボンッと猿助は再び海に落ちた。

ポチが慌てた。

「ええっと、鬼ヶ島は外から攻撃されるとセキュリティシステムが発動して、反撃してくるですう！」

「早く言え！」

桃はポチの頭をぶつ叩いた。

すぐに雉丸がポチを抱きしめてかばう。

「こんな可愛い子に暴力を振るわないでくださいよ。それにポチは記憶喪失なんだから、言い忘れたからって責めないでくださいよ」

「記憶喪失になったのは温羅に拾われる前の話だろ！」

桃は爆乳を揺らして怒った。さっきから怒ってばかりだ。

すっかりポチは脅えて震えてしまっている。

そんなポチの頭を撫でて雉丸がなだめる。

「ポチは何も悪くないからね。それに桃さんは怒ってなんかないんだ。今の常態がデフォルトだから、本当に怒ったら俺たち皆殺しだよ」

話を聞いていた桃がギロリと雉丸を睨んだ。

「何か言ったかい？」

「いいえ、何も」

雉丸はさらりと受け流した。桃とのやりとりに慣れているらしい。でも、桃の眼が怖い。相手を睨み殺す勢いです。これのどこが怒ってないんでしょうか、十分怒ってるように見えますが？

小舟の上でそんなやりとりがされている間にも、鬼ヶ島のセキュリティシステムは張り切って頑張っていた。

次から次へと天から降り注いでくる燃えた石。まるで拳ぐらいの大きさの隕石だ。

死相を浮かべて猿助が海から這い上がってきた。

「じいちゃんのクナイ見つけたぜ。でも、海の底には恐ろしい怪物が……ぐわっ！」

再び小型隕石が猿助のおでこに直撃。また海に沈んだ。さよなら。そんな猿助のことなんてやっぱり気にも留めないで、桃はポチと雉丸に命じる。

「全速力で船を漕ぎな、雉丸はわかってるね？」

真剣な眼差しで雉丸はうなずき、口径の大ききなりボルバーを構えた。

雉丸が撃つ銃弾が次々と小型隕石を打ち落とす。

そして、桃も動き出した。

小舟をはみ出して置かれていた竹の棒を拾い上げ構える。その竹の長さは女にしては長身である桃の身長を優に超していた。

ポチが思わず尋ねる。

「姐御さんの武器って竹槍なんですかあ？」

「竹槍じゃないよ、ウチから持ってきた物干し竿だよ」

なんと桃の武器は愛刀じゃなくて愛棒だったのだ。しかも、物干し竿なので正確には武器でもない。雑貨用品だ。

が、桃の手にかかれれば物干し竿ですら凶器になる。

打席に立った桃が第一球、振りかぶった！

カキーン！

見事なホームランです！！

次から次へと小型隕石を打ち返していく桃。そんな桃もスゴイが、燃えた石を打ち返せる物干し竿もただの竹とは思えない。

鬼ヶ島はもうすぐそこだ。

セキュリティも負けてられないので、隕石の大きさが一回りも二回りも大きくなった。今度はサッカーボールくらい大きさだ。これは当たったら死ぬるぞお！

桃が大きく物干し竿を振り回した。そこへ海から這い上がってきた猿助が現れ。

「ぐわっ！」

物干し竿が顔面に直撃して猿助はまたまた海の底へ。

もういい加減、海の底で成仏しちゃえ

降り注ぐ隕石も大変だが、さらなる困難が起ころうとしていた。

ポチが船底を見てプルプル震えている。

「あ、あのおゝ……浸水してるよお？」

思わず桃は顔をしかめた。

「はっ？」

雉丸も少し難しい顔をして船底を見た。

「……本当に浸水してるな」

船に空いた小さな穴から、水が温水洗浄便座のように噴き出ている。

よく見ると、穴から尖った刃先が顔を覗かせていた。

シン、キング、タイム！

この尖った刃は何でしょっつか？

答えを出したのは雉丸だった。

「サルの鎖鎌の刃だな」

つまりこういうことだ。

海の底へ沈んだ猿助。桃たちを乗せた船はドンドン先へ進んでいる。そこで猿助は置いてけぼりにならないように、船に鎖鎌を刺して引きずられることを思いついたのだ。

そのことを理解した桃は怒り心頭。

「あのアホザル、こういうのを猿知恵っていうんだよ。船に穴開けたらどうなるかわかるだろう！」

すぐに桃は鎖鎌を抜こうとしたが、それを雉丸が止める。

「待ってください、抜いたら一気に水が！」

遅かった。

何が遅かったって、桃は鎖鎌の刃を抜かなかったが、代わりに飛来してきた隕石が船に穴を開けた。

嗚呼、浸水。

船底から噴き上げる海水。

桃の怒号が飛ぶ。

「さっさと漕ぎな！」

「いっぱい頑張ってるよお」

涙目で訴えるポチのオールを桃が奪い取って、自ら船を全速力で漕ぎはじめた。

「うおりや~~~~っ!!」

物干し竿をブンブン振り回すだけのことはあって、ものスッゴイ怪力で船を漕いでいる。

ポチが海から繋がる巨大洞窟を指差した。

「あそこが入り口でしゅっ！」

でも、やっぱり浸水。

島にたどり着く前に荒波にもまれ、ついに船は転覆してしまった。涙の進水式。ここでこの船とはお別れだ。何の思い入れもないけどな！

そして、ちよっぴり塩辛い涙。

てゆーか、大泣きしながらポチが溺れていた。

「助けてえ！」

溺れる姿、犬かきのごとし。

溺れるポチを桃は完全スルー。泣き叫ぶ声なんて右耳から入って左に抜けている。

ポチの服を掴んだ雉丸。

「大丈夫かつポチ！」

「兄さま！」

この人だけが自分の味方だ。だからこそポチは雉丸を兄のように慕っていた。

が、雉丸の次の言葉で辺りは凍り付いた。

「実は俺も泳げないんだ」

「えっ？」

二人して沈没。

義兄弟の愛は見事に海の藻屑となったのだった
完。

どうにか荒波の海を泳ぎ切った桃は、船着き場までやってきた。近くに停泊しているのは巨大な海賊船だ。

「クソツ、下僕とはぐれるなんて。サルとポチはいいとして、ウチで唯一役に立つ雉丸が……」

まるで自分は悪くないような言い方。三人を見捨てたのは誰ですか？

桃は慌てて物陰に隠れた。

人の気配がした。

そーっと辺りのようすを探ってみる。

すると、何やら話し声がこちらに近づいてくる。

「温羅の姐御も人使いが荒いよな、侵入者なんかいるわけねーよ」

「そう言うなよ。船は沈んだが、生きて島まで渡ってきてるかもしれないだろ」

「そんなわけあるか、島の周りは波が高くて、海の底には怪物はわんさかいるんだぜ？」

会話の内容を聞いてみると、どうやら桃たちを探して見回りをしているらしい。

桃は隠れながら声の主に目を凝らした。

頭から虎のような耳を生やし、お尻からも黄色と黒の縞模様の尻尾が生えている。それ以外はどこにでもいるオッサン二人組だ。まさしくあれは鬼人族。

鬼人族の特徴は虎のような耳と尻尾、それ以外は普通の人間と変わらない容姿をしているのだ。

鬼の一人が何やら見つけたようだ。

「おい、あそこに何かあるぞ？」

「竹みたいだな」

竹みたいじゃなくて竹です。正確にいうと物干し竿です。つまり

見つかってしまいました。

ぐつと息を呑む桃。

緊張の糸が張り巡らされる。

徐々に近づいてくる足音。

そして、突然の大声。

「会いたかったぜ姉貴！」

両手を広げて駆け寄ってきたのは猿助だった。

「アホ、大声出すなサル！」

桃の蹴りが猿助の顔面にヒット。それは蹴るといふより『踏む』だ。

「おい、誰かいるぞ！」

鬼が声を荒げた。もう完全に見つかってしまった。

こうなったら出て行くしかない。

桃は物干し竿を振り回しながら物陰から飛び出した。

「おりゃーッ！」

剣は剣術、棒は棒術、武器には武術が存在するが、桃の戦いにそんなものはない。

力任せに物干し竿を振り回しているだけ。でも強い。

豪快にして華麗。

爆乳を激しく揺らしながら、優美な白銀の髪をなびかせ、しなやかな脚で地面を蹴り上げる。

猿助は桃の戦いに見惚れていた。主に揺れる乳とTバックのケツを熱心に見ている。

デカパイなのに決して垂れていない乳。ぷりぷりで脂が乗った吊り上がったケツ。どちらも甲乙つけがたい。

「どこ見てんだいサル！」

鬼たちと一緒に猿助も物干し竿でぶん殴られた。

気絶する鬼たち。

猿助も殴られたが、打たれ強いのか、ぜんぜんへーき。

「なんでオレのことまで殴るんだよ！」

「はあ？ 身に覚えがないって言うのかい？」

「オレが何したんだよ」

「そーゆーこと言ってるで眼ん玉めぐり出して、一生お前の好きなケツとおっぱい見えなくしてやっていいんだよ？」

「はい、ごめんなさい。オレが全面的に悪かったです、はい」

猿助は急におとなしくなって頭を下げて謝った。威勢はいいが、相手に強く出られると弱いのだ。特に桃は怖いらしい。

桃が猿助に気を取られていると、気絶していたハズの鬼が何やら通信機を懐から出していた。

「侵入者だ……船着き……ぐげっ！」

桃の蹴りが這い蹲っていた鬼の顔面にお見舞いされた。

すぐに通信機を踏み潰して壊したが、もうきつと遅いだらう。

たちまちサイレンが鳴り響いた。

桃は猿助の胸倉を掴んだ。

「全部でめえのせいだからな！」

「オレは何も……」

「アタイが隠れてたのに、バカな声あげて駆け寄ってきたのはどのどいつだよ！」

「……ごめんなさい」

「わかればいんだよ。ほら、何ぼさつとしてんのさ、さつさと鬼どもをぶっ倒しに行くよ！」

言いたいことだけ言って、自分の気が済んだらさつさと次の行動。自分勝手だ。

どうして猿助はこんな桃のお供なんかしているのだらうか？

猿助は前を走る桃のお尻だけを追っかけていた。

きつとそれが理由だらう。

自他共に認める絶世の美女　その名は桃ねーちゃん。

一方そのころ、海の藻屑になったと思われた雉丸とポチだったが、どーにか生き延びていたらしい。よかつたね

だが、雉丸の背中に担がれたポチの脈が細い。気も失っているように、顔は青白く冷たい汗をかいている。苦しそうな顔をしているが、きつと夢の中ではお花畑にいるに違いない。

ポチを担いで疾走する雉丸の前に次々と現れる鬼ども。

「早くポチの手当をしたいのに、こざかしい鬼どもだ」

ここは敵の本拠地、一人ずつ相手にしていたら切りがない。

銃はリボルバーとショットガンを装備しているが、銃弾の数には限りがある。さらにポチを背負うために片手の自由を奪われ、いつもは背負っているショットガンを残った手で持つハメになってしまっている。

雉丸のショットガンはポンプアクションなので、フォアエンドと呼ばれる部分を引いて戻して排莖・装填の作業を行う必要がある。これは片手では大変難しい作業なのだ。

そして、銃身の長いショットガンは懐に攻め込まれた終わりだ。

雉丸に残された武器は頭突きか蹴りだけになってしまふ。

戦うことは不利と見て、雉丸は鬼を巻きながら逃げた。

入り組んだ道が続く巨大洞窟。元は自然洞窟だったのかもしれない。そこを掘削して電灯などが取り付けられているが、道が一本ではないため、方向感覚が失われ出口がどこにあるかわからない。

広い空洞の脇に小さな穴蔵を見つけた。その穴に身を隠すべきか、それとも別の道を探すべきか。もしも行き止まりだったら。

雉丸たちを探す鬼どもの声が洞窟内に響いている。

耳を澄ませた雉丸は意を決したように穴蔵に飛び込んだ。

狭い穴蔵には電灯などの設備はなかった。そのことから、ここが普段から使われている道とは考えづらい。

雉丸はシヨットガンを杖代わりにして、辺りのようすを探りながら先に進んだ。

静かな声で雉丸がつぶやく。

「行き止まりか……」

ポチを地面に寝かせ、自分も座って壁にもたれ掛かった。

少し息をついて、雉丸はポケットから出したライターに火を点けた。

灯った光でポチの顔を照らす。

汗をかいているが安らかな顔になっている。少しは体調が良くなつたのかもしれない。

ポチの口がもごもごと動いている。何か訴えているように見え、雉丸は耳を傾けることにした。

「……わあゝい、お菓子の家だ……でも、こんなに食べきれないよ……」

「ふふっ」

寝言を聞いた雉丸は思わず笑ってしまった。とても安らかな笑いだ。

外は敵だらけだと言つのに、今だけは落ちついた刻が流れていた。雉丸は煙草の箱の中身を調べ、海水で湿気てしまっていることを確かめると、握りつぶして放り投げた。

「これから禁煙でもするか」

同じく海水に浸かってしまった銃器も調べはじめようとしたとき、急に雉丸の目つきが鋭くなって耳をそばだてた。

闇の奥に気配がする。

近づいてくる二つの足音。

視界を奪う常闇に向かって雉丸はリボルバーの銃口を向けた。

引き金にかかった指からふつと力が抜ける。

「雉丸じゃんか！」

嬉しそうに声をあげたのは猿助だった。その傍らには桃もいる。

「ポチはおねんねかい？」

「違いますよ、溺れたせいで体調を崩してしまっただけです」
答えた雉丸はポチのおでこに手を乗せた。燃えるように熱く、汗も大量にかいている。

それなのに寝言は 。
「もう……食べられないよお……」
幸せそうだ。

桃は横目で猿助を見て顎をしゃくつた。

「あんたが背負ってやりな」

「えーっ！　なんでオレが背負わなきゃいけないんだよお？」

「あんただけが戦力外だからに決まってるだろう」

「オレのどこが戦力外なんだよ！」

「だったらここで誰が一番『弱い』か決めるかい？」

桃の鋭い眼光が猿助の胸を射貫いている。戦う前から敗北。

さらに猿助が振り向くと、眉間に銃口が当てられた。やっぱり戦う前から敗北。

「べ、別にオレが一番弱いんじゃないからな。病人をほっとけないだけだから！」

結局、猿助が背負うことで決定。

いつまでもここで身を潜めているわけにもいかない。

ポチの体調も気になるところだが、薬もなければ火にくべる薪もない。外では鬼が今も桃たちを探していることだろう。あまり長居をしていて、穴蔵に攻め込まれたらまさに袋の鼠だ。

雉丸が先陣を切って行くこうとしたのを桃が押さえて前に出た。

「無理すんじゃないよ。あんたも体壊してんだろ、顔つきを見ればわかるよ」

「俺のことなら心配しないでください。桃さんのためならいつでも死ねますよ」

「言ってくれんじゃないか。でもね、アタイのために命捨てんなら、もつとでっかいことするときにな」

二カッと白い歯を見せて笑った桃は暗い穴蔵を飛び出した。

すでに穴蔵の外は鬼どもで溢れかえっていた。
桃は物干し竿を振り回し、それは竜巻のごとし烈風で鬼どもを薙ぎ払う。

雉丸はショットガンを構え鬼の腹に風穴を開ける。

そして、猿助はとにかく逃げ回る！

「ちょ、お前らオレとポチのこと守れよ！」

猿助の腕力ではポチを背負うのに両手を奪われる。蹴りなんかし
ようものなら、バランスを崩すのが落ちだろう。

「おりゃ！」

蹴りをしようとした猿助がコケた。ポチと一緒に山崩れだ。こいつアホだ。

そこへ鬼の蛮刀が振り下ろされる！

コーンつと風流な庭園の音が響き渡る。

猿助に振り下ろされた蛮刀を桃の物干し竿が受けていた。
思わず鬼は眼を剥いた。

「どうして斬れない!？」

「気合いに決まってるんだろ！」

桃は物干し竿で鬼をぶん殴ってノックアウトさせた。

鬼は次から次へと沸いてくる。

雉丸が鬼を倒して逃げ道を作った。

「桃さん、あっちへ！」

「あいよ！ サルも急ぎな！」

「わかつてるっーの！」

桃たちは鬼の追っ手を振り切りながら洞窟の中を突き進んだ。
やがて見えてくる一筋の光。出口だ。

まばゆい光が桃たちを包み込む。

長い坂道の向こうにそびえ立つ鬼ヶ城。すぐ後ろの洞窟からは鬼
たちの雄叫びが響いてくる。後戻りはできない。

桃が先陣を切って坂道を駆け上がった。

「いくよ野郎ども！」

急な坂道を突き進む。

坂道の左右は絶壁に挟まれ、一本道が鬼ヶ城まで続いている。挟み撃ちをされたら逃げ場がない。

ポチを背負っている猿助は肩で息を切らせている。その横を走る雉丸の顔色も、陽にさらされ悪さを際立たせている。

鬼ヶ城はすぐそこだ。だが、坂の上から雪崩のように降りてくる鬼の軍勢。

猿助が懐に手を入れて何かを探った。

「オレに任せろ！」

猿助はまきびしを地面に撒き散らした。

坂を下りてきた鬼どもの足が急に止まった。それを見て勝ち誇る猿助。

「ウキキツ、見たか猿飛猿助サマのまきびし戦法を！」

地面に撒かれたトゲトゲのまきびしが鬼の行く手を阻む。

が、桃は猿助の頭を思いつき引っぱたいた。

「バカか！」

「いてえ、何すんだよ！」

「あっちに行かなきゃいけないのに、進行方向にまきびしを投げる奴があるか！」

「……しまった！」

スゴイ、今やっと気づいたようだ。

雉丸は辺りを見回す。

「身軽なサルなら登れるかもしれないが、あとが続かないな」

すでに坂の下からも鬼たちが駆け上ってくるのが見える。グズグズしている時間はどこにもない。

桃が物干し竿を肩に担いだ。

「乗りな！」

と、桃に視線を向けられた猿助は口をポカンと開けた。

「は？」

「乗れって言うてんだよ、ポチを雉丸に預けて竿の先っちょに乗れ

ばいいんだよ！」

意味がわからないまま猿助は言われたとおり行動した。

すると、猿助が乗ったことを確認した桃は力任せに投げた。これはまさに投擲だ。

物干し竿が大きくしなり半月を描くと、バネみたいに猿助がぶっ飛ばされた。

そして、敵のど真ん中に落ちた。

鬼どもに寄って集ってタコ殴りにされる猿助。悲痛な叫び声は痛々しい。

桃はさらに雉丸に目を向けた。

「次はあんただよ」

雉丸はポチを背負ったまま、片腕で物干し竿に抱きついた。

再び桃は物干し竿を力任せに大きく振る。

小柄とはいえポチの体重と、自分の体重を支える腕力が、その細身の体のどこにあるのか？

雉丸はポチを担いだまま華麗に地面に降り立った。

鬼は先に囷になった猿助を取り囲んでいたが、すぐに雉丸にも襲いかかる。

雉丸は片手に持ったショットガンを大きく縦に振り装填した。常人の腕力ではできない芸当だ。

谷間に反響する銃声。次々と倒れる鬼が山道を築き上げる。

そして、最後に残された桃は棒高跳びの要領でまきびしを超えた。

桃の落下点で待ち構えている鬼の眼前に迫ってくる　ふんどしっ！

「うげっ！」

桃の足の裏が鬼の顔面にヒット。踏んづけられた鬼は鼻血を噴いて転倒した。

まきびしを超えた桃たちは雑魚どもを無視して坂道を駆け上る。

鬼ヶ城の城門が行方を阻む。

木製だが巨大で壊すのは容易ではない。ロケットランチャーはす

でない。

すぐ後ろからは鬼どもが迫っている。

そのとき、急に城門が音を立てて開きはじめたと思った瞬間、すでに桃たちは呑み込まれていた。

なんと城門が開いたと同時に大量の水が押し寄せてきたのだ。

ウォーターライダーなんて生やさしいものじゃない。大海流の勢いで溺れながら坂道を流される。鬼どもまで巻き込まれているよ。うすを見ると、海賊団の頭はとんでもない薄情者だ。

しかし、ご丁寧なことについての間に地面に落とし穴が口を開けていた。

トイレの水のように、ジャーツと桃たちは排泄口に吸い込まれてしまった。

温羅編 4

川の岸辺で横たわっていた猿助の指先が微かに、動いた。

「う……う……」

目を覚ました猿助がゆっくりと立ち上がる。

「うっ！」

全身に走る激痛。

打ち身や切り傷、水に流されたことよりも、タコ殴りにされたことが響いている。

猿助は辺りを見回した。

「桃の姉貴！」

返事は返ってこない。

「雉丸、ポチ、若いねーちゃん！」

誰からも返事は返ってこない。

歩を進めようとすると、再び激痛が全身を走った。それでも仲間を捜さなくてはいけない。だって独りじゃ怖いから！

川の上流にいけば何かあるかもしれないと思い、川沿いに歩みを進めた。

途中で気絶している鬼を見つけた。

口元を意地悪に歪ませた猿助が鬼を蹴っ飛ばしまくった。

「この野郎、さっきはよくも！ てめえ、この、ふざけんな、どっちが強いかわからせてやる！」

気絶している相手によくもこんな非道なことをできるものだ。

だが、気絶していたハズの鬼がピクツと動いた瞬間、猿助は地面におでこを激突させて土下座をはじめた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、オレは何もしてません。そうだ、貴方様を蹴っ飛ばしていた野郎はオレが今追ひました……いや、ホント、マジで……」

猿助はそーっと顔を上げて鬼のようすを伺った。

動き出す様子はない。目を覚ます様子もないようだ。それを確認した猿助は再び強気になった。

「ビビったじゃねえか、ふざけんなよ、オレの強さにひれ伏してる！」

ガタダガつと石が崩れる音がした。すぐにビクツと体を縮めて猿助はすくんだ。

風の悪戯か、それとも近くに誰かがいるのか？

もしかしたら仲間かもしれない。

猿助は気配を殺しながら辺りの見回した。見通しのいい場所だったが、どこにも人影などはなかった。

静かに歩き出す猿助。

足場は小さな石ころや岩が敷き詰められている。

しばらくして、猿助の鼻に臭い香が届いた。

「硫黄の臭いか？」

猿助の視線に映る湯煙。

ピンと来た猿助は猛ダツシユした。

辺りが見えないほどに視界を覆い尽くす乳白色の湯煙。

猿助は身を屈めて岩場の影に隠れると、湯煙の中に目を凝らした。跳ねる水の音。

湯煙に浮かぶ人のシルエツト。

その先に温泉があるのだ。

猿助は鼻の下を伸ばしながらシルエツトをガン見した。

なめらかな曲線を描くシルエツト。

豊満そうなバスト、くびれたウエスト、ヒップは湯と同化している。

猿助は確信した 若い娘に違いない！

もっと見たい、間近で見たい、お近づきになりたい。今度の休日にはヒマですかと問いただしたい！

猿助は匍匐前進で湯船ギリギリのラインまで近づいた。

おお、なんとということか、若い娘が恥ずかしげもなく露天風呂。

しかも一人だと思っていたら、三人組の大盤振る舞い。

ハーレムだ！

興奮を抑えられなくなった猿助は服を着たまま湯船にジャンプした。

「オレと混浴しようぜ、ねーちゃんたち！」

三人娘が振り返って微笑んだ瞬間、娘がオッサンに変身した。

「騙されたなエロガキ！」

「えっ？」

怖そうなオッサンたちが腕を広げて待っている。厚い胸板に飛び込んでこい！

「ぎゃあああつ！」

湯煙に呑み込まれた断末魔。

温羅編 5

湯船に浸かりながら寛いでいた桃が首を傾げた。

「何か聞こえなかったかい？」

桃に背を向けて湯に浸かっている雉丸が答える。

「いえ、何も……ポチ、湯船で遊んではいけないよ」

すぐ近くでバシャバシャとポチが飛沫を上げている。

「遊んでるんじゃないよ、がんばって泳ぐ特訓してるんだもん！」

なんだかすつかり元気を取り戻しているようだった。

桃は全身の力を抜いて甘い吐息を漏らした。

「ふう、いい湯だね。これで酒があれば最高なんだけどね」

ポチが大きくうなずいた。

「うん、この魔法のお湯に浸かれば、みんな元気になっちゃうんだ。

海賊団の強さのヒミツなんだって、温羅の姐御さんが言ってたよお」

この温泉を見つけたのは運がよかった。ポチも意識を取り戻し、

無理を押ししていた雉丸も全快した。

濡れた服も備え付けの乾燥機で乾かし、今は物干し竿に干してあ

る。完璧だ。

敵の本拠地にいる緊張感はずゼロ。

すつかり温泉で寛いでいる。

そこへ何者かの気配が現れた。

湯船に近づいてくるトラ耳。

「お前ら誰だ！」

野太い鬼の声が響いた。

ポチが鬼の股間を指差す。

「女湯に男の人が入ってきちゃいけないんだよお！」

「マジか、ここ女湯だったのか。すまんすまん、すぐに出て行く…」

背を向けて歩き去ろうとしたが、首を傾げて鬼は振り返った。

「って、お前ポチじゃないか、姐御のところから逃げたって聞いたぞ。つーか、その二人何もんだよ、さては今噂の侵入者だな、ぐはっ！」

ゴン！」

鬼の顔面に桃の投げた桶が激突した。

湯船からすっぽんぽんで立ち上がる桃。

「グタグタ言っじゃないよ。女湯に女のアタイが入ってるんだ、痴漢呼ばわりされたくなきやさつさと出てお行き」

桃のナイスバディを見た鬼は股間を押さえて後ずさりをした。

「汚ねーぞ、おらを誘惑するつもりだな！」

「そんなに見たいなら見せてやるよ。ただし、代償はてめえの体で払ってもらうけどな！」

桃は指を鳴らしながらズカズカと鬼に近づく。

「そ、それ以上近づくなよ。別に女の裸なんか見たって嬉しくないんだからな。ウチの海賊団にいる女つつたら、頭の姐御だけが、ツルペタでまったく色気を感じないから、やっぱり女っ気のない男の集団……だ、だからって決して女に飢えているわけではないからな！」

と、言いつつ、鬼は桃の揺れる爆乳に合わせて首を上下させている。

ついに鬼は壁に背中をべったりつけて、逃げ場を失ってしまった。「なんだ、おらとやるうって言うのか。おらは強いんだぞ、なつつたつておらは鬼道戦隊鬼レンジャーのリーダー、赤フンのレッドなんだからな！」

「何が赤フンだよ、今はフルチンじゃないか」

「な、なんだとー！」

顔を真っ赤にしたレッドが桃に襲いかかるが 股間を蹴り上げられ一発KO。

泡を吐いて白目を剥いているレッドを尻目に、桃は干してあった着物に着替えはじめた。

「てめえらいくよ、あんまり浸かっていると湯冷めしちゃうからね」
「はぁーい！」

元気に返事をしてポチも湯船から上がった。
雉丸はいつの間にか完璧に着替えている。

準備を整えた三人は先を急ぐ。何かを忘れているような気がするが、誰もそれを口にしなかった。

ポチの話によると、この女湯は温羅の部屋まで隠し通路で直通らしい。というか、この女湯自体が温羅専用らしい。

「なんで隠し通路なんか知ってるんだい？」

桃が尋ねると、ポチは当然のように答えた。

「だっていつも一緒にお風呂に入ってたんだもん！」

恥ずかしげもない顔をしていた。

隠し通路は人が一人通れるほどの幅で、道も一本ではなくいくつに分かれていたが、ポチは迷うことなく案内役を勤めた。

「この先だよ」

ポチはレバーを引いて扉を開けた。

甘い香りがした。

部屋に入った三人が見た物は、海賊団の頭の部屋とは思えない部屋。

淡い花柄の壁紙、猫足のテーブルの上には食べかけのショートケーキ、薄い布で仕切られたベッドから小さな寝息が聞こえてきた。

ベッドの上でモゾモゾと小柄な影が動いた。

「誰かいるのぉー？」

犬のぬいぐるみを抱えた少女が目をこすりながら起き上がった。き

た。
思わず桃は訊いてしまった。

「これが恐ろしいって言われてる海賊団の頭かい？」

そこに立っているのはネグリジエを着たトラ耳少女。ブロンドの猫っ毛が寝癖でアホ毛になっている。

寝ぼけていた少女の目が急に見開かれた。

「ポチ！　ポチ、ポチ、ポチポチポチ、帰って来てくれたのねポチ！」
少女は持っていた犬のぬいぐるみを壁に投げつけてポチに抱きつこうとした。

その前に立ちほだかる桃。

「あんたが温羅かい？」

「……だ、誰！？　なに、どうやってここに入って来たのオバサン！」

スゴイ驚いたようすで少女は飛び退いて、ポンと煙に包まれたかと思うと黒いワンピースに鍔の広い三角帽子に着替えていた。

「そうよ、あたしが魔女っ娘海賊団の船長、大魔導士温羅だけど何か？」

ここに来て戦ってきた鬼どもとは大違いだ。紅一点の少女ということより、一人だけ魔女っ娘で浮いた存在だ。

オバサンと呼ばれた桃はちよつとムカツとしていた。
「誰がオバサンだって言うんだよ。こんな美人のおねーさまに向かって言う言葉じゃないね。あんたの眼、腐ってるんじゃないのかい？」

「えっ、美人のおねーさんなんてどこにもいないけどお？」

「クソガキがつ！」

女と女の熾烈な戦い。二人の視線の間で火花が散っている。

桃の怒りは飛び火して拡散した。

「あんたらも何ボサツとしてんだい、雉丸、ポチ！」

「俺はフェミニストじゃありませんが、少女の手を上げるのは……」

「ボ、ボクは……」

ポチは怯えて部屋の隅で丸くなってしまっている。

「どいつもこいつも！」

爆乳を揺らして怒る桃は物干し竿を振り回そうと　ガシャン、ガツン、ゴトン！

狭い部屋で物干し竿は振り回せなかった。致命的な弱点だ。

部屋をめちやくちやくにされた温羅はブンブンして、頬をふくらませて唇を尖らせた。

「もお、怒っちゃうんだからね！」

その言葉を聞いてポチが震え上がった。

どこから出したのか、温羅はデスサイズを握りしめていた。首切り鎌は温羅と同じくらいの大きさで、少女の腕力で振り回せる代物ではないが。

「ウラウラウラウラアッ！」

まるで鬼神に憑依されたように、温羅はデスサイズをブンブンブン回した。

テーブルやイスやタンスまで、木っ端微塵に破壊されていく。部屋を壊されて怒っていたのに、やってることは支離滅裂で本末転倒。暴れ回る温羅は桃たちを倒すというより、そこにあるものをすべて破壊する勢いだ。というか、理性のある行動にまったく見えない。

「ウラウラウラウラアッ！」

ガッン！

デスサイズが床に刺さった。

温羅が力を込めて抜こうとするが、ウンともスンともビクともしない。

この隙を突いて桃が声を張る。

「いったん引いて広い場所に出るよ！」

部屋を飛び出した桃。

雉丸も怯えたポチを抱きかかえて部屋を飛び出した。

温羅編 6

桃たちは城内を走り回り、次から次へと増える鬼に追われて外に出てしまった。

完全武装した鬼たちに囲まれて逃げ場はない。

蛮刀や銃を持った鬼どもが、下卑た笑みを浮かべてジリジリ迫ってくる。その間を割って小柄な少女が姿を表した。

「あたしのポチを返してよ、返してつてば返して！」

温羅は駄々をこねて地団駄を踏んだ。

ポチは雉丸に抱きかかえながらブルブル顔を横に振った。

雉丸が代わりに答える。

「ポチは帰りたくないと言っているが？」

「ポチはあたしのペットなんだから返してよ！ ちゃんと首輪だつてついているんだから！」

温羅の言うとおり、ポチの首にはペット用の首輪が巻かれている。雉丸はそれを外そうとするが、留め具もなく力を込めて壊れない。

仔悪魔チツクに温羅は笑った。

「ふふ〜ん、その首輪はあたし以外は外せないも〜んだ！」

「子供に手を上げるのは本意ではないが、仕方ないな」

雉丸はリボルバーの銃口を温羅に向けた。

桃も広い場所で物干し竿を構えられてヤル気満々。

「束になってかかっておいで、みんなアタイの足下にひれ伏させてやるよ。なんだつて、アタイはジパンゲーの美女だからね！」

血気盛んな鬼どもも今か今かと温羅の合図を待っている。

温羅が桃たちに指を向けて叫ぶ。

「みんなやつちやえ！」

合戦でもはじめたかのような、男たちの蛮声が轟いた。

自信に満ちあふれた表情を浮かべている桃。精神はどこまで気高く、負ける気などさらさらなさそうだが、敵の数はあまりに多く傍

目からは劣勢を感じる。

銃弾が桃の真横をすり抜ける。それでも桃は引きなど毛頭ない。烈風を起こす物干し竿が鬼を薙ぎ倒していく。

雉丸はショットガンとりボルバーの二丁拳銃で鬼に致命傷を与えていく。

だが、鬼の数はいつこうに減ることはない。

持久戦になりそうだが、その場合は数の多い向こうに分がある。

さらにポチがこんなことを言う。

「魔法の温泉がある限り、いくらでも復活してくるよ！」

桃は舌打ちをした。

「風呂の栓を抜くか、毒でも混ぜときゃよかつたね」

あの温泉がある限り、鬼どもの戦力は無限だ。

しかし、桃たちの知らないところで好機が訪れずれていた。

戦いを見守る温羅に鬼の一人が耳打ちをする。

「大変ですぞ姐御」

「どおしたの？」

「温泉の湯がからっぽになっちまって」

「何そんなに慌てるの、さっさとお湯入れたらいいじゃない？」

「それが……湯泉が何者かに破壊されて岩の下に埋まっちゃまって…

…」

さらに追い打ちをかける出来事が起きた。

謎の爆発が起きて鬼どもが砕けた地面と一緒に天高く吹っ飛んだ。

しかも、爆発は次々と起きるではないか！？

温羅は自分の居城を見上げて息を呑んだ。

「なっ……どうして仲間には砲撃してんのよお！」

大軍の鬼を蹴散らしていたのは砲台からの攻撃だったのだ。

桃も何事が起きたのかわからないまま城の上にある砲台を見上げ

た。なんと、そこには満面の笑みで手を振る猿助がいるではないか。

「姉貴ーっ、オレだってやればできるんだからな！」

「よくやったサル、ドンドンかましてやりな！」

「おう！」

砲台を乗っ取った猿助はやりた放題ドンドン撃ちまくった。温羅に耳打ちしていた鬼が猿助を指差して叫ぶ。

「あいつですぜ、温泉をぶっ壊したのはサルみてえなガキだって聞いてます！」

砲撃によつて鬼は全滅の危機に晒されてしまった。

唇を噛んだ温羅はホウキに跨つて空を飛んだ。向かうは砲台だ。

「そのこのサル、今すぐやめないと又ツコロス！」

「やめねーよ！」

強大な武器を手に入れた猿助は強気だ。

が、猿助はなぜか悪寒を感じて身震いしてしまった。

ホウキを降りて上空から猿助に飛びかかった温羅の手には、あのデスサイズがしっかりと握られていた。

「ウラウラウラウラアッ！」

殺される、殺される、絶対に殺される！

猿助は砲台を捨てて逃げた。全力疾走で逃げた。殺されないために死ぬ気で逃げた。

そして、逃げ道を失った猿助は鳥になった。

でも、やっぱり鳥にはなりきれなくて、両手を広げて地面にダイブ。

「死ぬーっ！」

ボヨン

猿助の顔面が柔らかなクッションに埋まった。顔を上げるとそこには怒ったようすの桃の顔。

「てめえ、人様の頭に振つてきやがって！」

猿助は桃に抱きかかえられる形で受け止められていたのだ。

地面には激突せずに済んだが、次の瞬間グーパンチが飛んできた。

「ぐわっ！」

鼻血ブーしながら猿助はぶっ飛んだ。でも、その表情はちよっぴり至福そう。

砲台を奪い返した温羅だったが、地上に目をやった彼女が見た物は仲間が誰一人立っていない惨劇。

思わずデスサイズを手から落とし、スーッと温羅の全身から力が抜けてしまった。

「ま、まさか海上最強と謳われたあたしの海賊団が……たった三人にやれるなんて……」

ちなみにポチはペット扱いなので数に入っていない。

桃が地上から温羅に向かって叫ぶ。

「そんなところにはいないで、こっちにおいで。たっぷり可愛がってやるよ！」

温羅はうつむいたまま動かない。戦意を喪失させてしまったのだろうか？

いや、温羅は笑っていた。

「きやははは、下っ端を全滅させたくらいでいい気になってるんじゃないわよ。魔女っ娘海賊団はあたし以外はみくんな甲板掃除係なんだから！」

温羅は顔を上げて仁王立ちした。風になびくワンピースのミニを下から見上げると……いちごパンツ。

猿助は笑いながら温羅を指差した。

「パンツ丸見えだぞバーカ！」

若い娘が大好きでも、少女にはまったく興味がないらしい。

「うっさいバーカ！ 今すぐ痛い目を見せてやるんだからね！」

それを見ていたポチは温羅が今から何をするか察したようだ。

「みんな逃げて、死んじやうよお！」

必死の訴えを桃は軽く受け流す。

「あんな小娘一人に何ができるっていうんだい」

血気盛んな鬼どもが、なぜこんな少女の手下に甘んじているのだろうか？

金や財宝の報酬か、それとも忠義忠誠か、理由はこれだ。

温羅が魔法を唱えた。

「メテオインパクト！」

遙かなる宇宙から真っ赤に燃えた隕石が飛来してきた。
桃が叫ぶ。

「反則だよ！」

次の瞬間、地面は大きく碎け飛び、衝撃と砂煙で辺りは騒然となった。

土砂の中から桃が豪快に飛び出した。

「あの小娘ッ！」

雉丸も土砂の中から姿を現し、その胸にはポチが抱かれかわれていた。

「大丈夫かいポチ？」

「うん、ありがとう兄さま！」

あと一人は。

「だれがだずげでくれ〜」

土砂の中から片腕だけ飛び出していた。

再び呪文を唱えようとしている温羅。

「メテオ、メテオ、メテオインパクト！」

いくつもの隕石が飛来してくる。

桃はすかさず土砂に埋まっていた猿助の腕を掴んだ。

「うおりゃあああっ！！！」

地面から引っこ抜いて砲丸投げの要領で天高く投げた！

猿助ロケットは一直線で温羅に向かって逝った。

が、温羅はすぐさま特大ハンマーで猿助を打ち返した。

「ウラァーッ！」

「ギャーッ！」

キラリーン

猿助は遠い空でお星になったとき。おしまい

しかし、温羅は大きく瞳を開いて驚いた表情をした。

眼前まで迫っていた桃の投げた物干し竿。

次の瞬間。

「きゃあああつ！」

突然、悲痛な叫びをあげて温羅が顔を押しさえてうずくまった。その傍らには血のついた物干し竿。

温羅が足下をふらつかせながら逃げていく。

桃は後を追おうと急いだ。

「てめえら、さっさと小娘を追うんだよ！」

でも、その前に隕石ドーン！

桃たちは大きく吹き飛ばされて土砂降りに埋もれた。

温羅編 7

桃は城内を一人で走っていた。

「ったくみんなどこいったんだよ！」

メテオインパクトの衝撃の爆発に巻き込まれて、みんなとはぐれてしまったのだ。

すぐに砲台があつた場所に来てみたが、すでに温羅の姿はどこにもない。

桃は落ちていた物干し竿を拾い上げた。そして、石の床に残る血痕が続いていることに気づいた。おそらく温羅が逃げながら流したものだ。

点々している血痕を頼りに温羅を追つた。だが、進むほどに血痕が少なくなり、ついには手がかりがどこにもなくなつてしまった。

背後から気配がした。鬼の残党か？

桃が振り向くとそこにいたのはポチだった。

「桃の姐御さあん、うわあ〜ん、独りぼっちで怖かったよあ」

「あんた温羅の隠れそうなところに心当たりあるだろ、さっさと案内しな！」

桃はポチの首根っこを掴んだ。

潤んだ瞳でポチは桃を見つめている。

「あんなに怖い目に遭わされて、まだ温羅の姐御さんを退治しようとしてるんでしゅかあ？」

「怖い……何が？」

「だって、お空からいっばいお星様が落ちてきたのにい」

「アタイに怖いものなんかありやしないよ。それよりもあの小娘を取っ捕まえて、隠してる財宝のありかを全部吐かせてやる」

「正義のために旅をしているんじゃないかなかつたんでしゅかあ？」

桃はその言葉を聞いて一笑した。

「誰が、んなことを……この世は金銀財宝とイケメン。それを求め

て自由気ままな漫遊さ」

もつともらしい答えだった。

ポチは正直、こんな人について行っても平気なのかと悩んだが、記憶喪失で行く当てもなく、桃はこんな人だけど雉丸は優しいので、今は現状維持ということになりそうだった。

温羅が隠れている場所、それと財宝のありかにポチは心当たりがあった。

「温羅の姐御さんの部屋には隠し通路のほかに隠し部屋もあるんでしゅ。そこには魔法の研究室と大きな金庫があるんだって、ボクも入らせてもらったことないけど」

「なるほどね、さっさと行くよ」

桃はポチを脇に抱えて長い廊下を走った。

巨大な城の中をポチの案内で難なく温羅の部屋までやってきた。中に入ると相変わらずの部屋だ。

手下の鬼どもからは想像もできない乙女チックなくつろぎ空間。と、言いたいところだが、数時間前に温羅が狂喜乱舞したせいでヒドイ有様だ。

「ここどこに隠し部屋があるんだい？」

桃が尋ねるとポチは首を横に振った。

「ボクも知らないんでしゅ。その部屋に入るところは見せてもらってないだもん」

「役立たず」

桃はポチをスプリングの壊れたベッドに投げた。

「うわぁん、投げないでよぉ」

「うるさい、あんたもさっさと隠し部屋の入り口探しな！」

「はぁ〜い」

少し泣きそうな顔をしてポチは返事をした。

ポチは桃が見落としそうな背の低い場所を重点的に探した。しばらくして、ポチが鼻をクンクン動かした。

「あ、血の痕みーっけ！」

桃もその場所を見た。

「よくやったポチ」

「へへ〜ん、ボク偉い？」

瞳を輝かせるポチは完全にシカト。桃はその血痕を調べはじめた。その血痕は不自然だった。床に落ちて円を描くハズの血がタンスの下になって途切れているのだ。つまり、血痕が落ちたあとにタンスが動いたことになる。

桃は剛力を込めてタンスを横に動かした。すると、その裏の壁に扉があった。迷わず桃は扉を開けて中に飛び込んだ。

薄暗い部屋には薬品の臭いが立ち込めていた。壁際には本棚に並べられた分厚い背表紙の本。部屋の中央には人を煮込めるほど大きな釜。

気配がした。

部屋の隅に立っていた長身の影。

桃は少し驚いたように口を開けた。

「雉丸……どうしてここに？」

そこに立っていたのは雉丸だった。

「温羅を追ってここまで来たんだけど、逃げられちゃった。えへっ

」

いい知れない悪寒が桃の背中を走った。

「おい、雉丸……しゃべり方がおかしくないかい？ 頭でも打ったんだろ？」

「うんうん、ちよつぴり頭打っちゃったかも、えへへ」

お茶目に笑う雉丸。

早く病院に連れて行かなければ大変だ！

ちよつと頭の壊れた雉丸を前に、桃もポチも戸惑いの表情を浮かべている。

そこへ温羅の部屋からやって来る気配。

桃はすぐさま振り向いて啞然とした。

「雉丸！？」

前にも雉丸、後ろにも雉丸。

「桃さん、大丈夫でしたか？ ポチも大丈夫だったかい？」

こっちの雉丸はいつもと同じしゃべり方だ。

ポチはあとから現れた雉丸に抱きついた。

「こっちが本物の兄さまだよ、だって煙草の匂いが微かにするもん！」

それ以前に、向こうの雉丸は最初からしゃべり方が怪しかった。

偽雉丸がポンと煙に包まれたかと思うと、その場所に温羅が姿を現した。

「さすがポチ、見破るなんてすごい。エライ、エライ」

だからポチじゃなくても、しゃべり方で……。

正体を現した温羅は三人に追い詰められた。

逃げ口は桃たちの背後。温羅は壁に背をつけて逃げ場を失ったかのように思われた。

でも、逃げ場がなければつくればいい！

温羅の手に握られたデスサイズ。

「ウラウラウラウラアッ！」

狂喜乱舞して襲い来る温羅。

まずポチが怖くて道を開けた。

次に桃は物干し竿で攻撃 ガツン。物に引っかかって動かない。

最後に出口の前に立ちふさがる雉丸が腰のホルスターからリボルバーを 抜かない。

「俺は桃さんと違って少女に手を上げるのは……」

素手で雉丸は温羅を押さえようとするが、巨大な刃が振り回され近づけない。

温羅は出口の光に向かって飛び込んだ。もう破壊伸と化してしまつた温羅を止められる者はいないのかっ！

次の瞬間、ゴツン！

ものスゴイ音がして、なぜか背中から転倒した温羅がついでに、後頭部をガツン！

床に倒れた温羅は頭の上に星を回しながら気を失ってしまった。
そして、遅れて聞こえてきた叫び声。

「いつでえ〜っ！」

出口のところで猿助がおでこを押さえてうずくまっていた。

桃は呆れてため息を漏らした。

「はあ、よくやったって誉めてやる気にもなれないねえ〜」

雉丸もおでこを押さえて沈痛な表情をしていた。

「なんだか俺も頭が痛くなってきた」

この中ではしゃいでいるのはポチだけだった。

「サルたんすご〜い、温羅の姐御さんを一発で倒しちゃったあ！」

言われてはじめて猿助は床で気絶する温羅に気づいた。

「マジ、オレが!? 姉貴、ご褒美に姉貴のパフパフを！」

「いっぺん死んでろ！」

「ぎゃっ！」

桃の美脚に金的された猿助は泡を吐いて気絶した。

「雉丸、小娘に縄でもかけて運びな。はい撤収！」

桃のかけ声で猿助を残して、はい撤収！

温羅編 8

飲めや歌えの大宴会。

夜が更けるにつれて、村人たちの煽る酒の量が増えていく。

台上には立てた丸太に縛り付けられ、祭り上げられている一人の少女。左目にアイパッチをしている温羅だ。

「早くあたしを自由にしないと痛い目見るんだからね。みんな地獄に堕ちちゃえばいいのよ、バーカ！」

この調子で何時間も喚き続けている。喉が哽れるようすもないので、まだまだ喚き続けることだろう。

その横では酒瓶を片手にあぐらを掻いている桃がいた。

「クソガキが、さつさと財宝の隠し場所を言わねえーか！」

「ふん、言っても言わなくても自由にしてくれないのはわかってるんだからね！」

「てめえ、減らず口が利けないように、喉を引っ張り出して結んでやろうか！」

ホントにやりそうな勢いだったので雉丸が止めに入る。

「まあまあ、そんなことをしたら財宝のありかもしゃべれなくなりますから、ね？」

「ったく」

ふてくされた桃は酒を煽った。

村は『海の魔女』と畏れられた温羅が捕らえられ、魔女つ娘海賊団も壊滅したことで大盛り上がり。桃たちは勇者さま御一行としてもてはやされたが、桃はそんなことより財宝だった。

どこかで若い娘の悲鳴が聞こえた。

お祭り騒ぎで酒を飲んだ変質者も出るだろう。

「サルがナンパでもしてんだらうよ」

桃はその一言で片付けてしまった。

村の若い娘がやってきて、雉丸の腕に腕を回してきた。

「かつこいい勇者さま、こっちで飲みましょう」

「俺は……だから……ああっ……」

若い娘に囲まれて強引に雉丸は引きずられていつてしまった。ポチの周りにも娘たちが集まっていた。

「きゃーかわいい！」

「こんなかわいい子が鬼退治をしたのお？」

「すごい！」

ペット扱いというより、もはや珍獣扱いだった。

ポチは少し頬を赤らめながら娘たちから逃げようとしている。

「ボクは……それよりも温羅の姐御さんに……うわあ、お尻さわったの誰？ だから、温羅の姐御さんに首輪を外してもらわないと、いやあつ、変なところ触られたよあ。だくかゝらゝ、首を外してもらわないと、ずっとポチって名前と呼ばれ……わあっ！」

「ボク、ポチくんっていうの？ かわいい〜！」

ポチは娘たちにハグされて拉致されていつてしまった。

鼻の下を伸ばした男たちが桃の近くにも寄ってくるが、桃の魔獣の眼で睨まれてちよっぴりチビって一目散に逃げてしまう。

モテないのは猿助だけなのだろうか？

「きゃ〜っ痴漢！」

またどこかで若い娘の悲鳴がした。

桃は呆れたように呟く。

「つたくサル野郎は女と見れば……」

今さつき叫んだ娘が髪の毛を振り乱して桃のところまで逃げてきた。

「勇者さま、助けてください。しつこい男の人がいるんです！」

「しょうがないサルだねえ」

仕方なく桃は立ち上がり、娘を追ってきたその男に目をやったのだが、拍子抜けしたように目を丸くした。

「おっ？ サルじゃないのかい？」

そこに立っていたのは白髭を蓄えたハゲ爺だった。見るからにエ

口そんな顔して、鼻の下なんか指三本入りそうなくらい伸ばしている。

「猿助ではなかったが、桃は構わずハゲ頭を引っぱたいた。」

「クソジジイ、いい年こいて女のケツばかり追ってるんじゃないよ」

「おおっ、こんなところにもナイスボディだねーちゃんがおったのか。よしよし、ワシが胸を揉んでやろう」

そう言っつて爆乳に手を伸ばそうとしたハゲ爺を桃はタコ殴りにした。

「気安く触るんじゃないよハゲ！」

殴る蹴るされたハゲ爺は、なんと自ら背負っていた亀の甲羅の中に隠れてしまった。

そして、甲羅の中からうめき声を発した。

「気の荒い娘じゃのお、ワシを誰だと思っておるんだ。胸は揉むほどデカくなることを知らんのか」

「出てこいハゲ！」

桃は甲羅を蹴り飛ばすがビクともしない。

「ふおおおお、この甲羅は核爆弾の衝撃にも耐えられる仕様じゃ。元はわしを汚い罠にハメた亀を殺して喰ってやって残った甲羅なのじゃが、それをジパングーの天才発明家のワシが改造して最強の防具にしたのじゃ！」

「聞いてないよ、んなこと！」

桃は再び甲羅を蹴っ飛ばしたが、やっぱりビクともしなかった。

「無理じゃと言っとうろっ」

「ひゃっ！」

桃らしからぬ声をあげてしまった。

甲羅からよきつと出た手が桃のふくらはぎを触っていた。

「クソハゲ！」

すぐに桃は手を捕まえようとしたが、さっと甲羅の中に隠れてしまった。

あのふくらはぎを触られた感触。全身に悪寒が走るテクニクだった。

どうにかして締め上げてやりたいが、甲羅の中に隠れられていては手が出せない。

そこで桃はこう叫んだ。

「酔った娘が裸踊りしてるぞ！」

「なぬっ!？」

ハゲ爺が甲羅から頭を出した瞬間、桃はその首根っこをへし折る勢いで掴んだ。

「捕まえたぞ、ハゲ。どう料理してやろうかねえ」

「離せ、首が折れる……やめっ、ワシを誰だと思っておるのだ！」

「誰でもかまいやしないよ！」

「ちまたで有名な亀仙人さまを知らんのか、またの名を浦島太郎じゃぞ！」

「知るかつ！」

桃はハゲ頭をグーで殴った。

「ぎゃっ」

亀仙人はそのまま甲羅から引きずり出された。

そんなことが行われている後ろでは、温羅がまだ喚いていた。

「ねえ、ちよつとお。あたしのこと放置プレイしないでよ、バーカ！」

桃は怖い顔して振り返った。

「うっさい！ 誰かそのクソガキに布でも噛ましておきな！」

すぐに温羅は口に布を噛まされたが、それをすぐに噛み千切ってしまった。

「汗臭い布なんか食わせないでよ！ 絶対仕返ししてやるんだからね！」

キーキー喚く声が頭にガンガン響く。

さっさと首を刎ねてやりたいと桃は思ったが、それは財宝のありかを吐かせてからだ。しかし今のままでは、いつまで経ってもしや

べりそうもない。

温羅の頭が冷えて反省するまでどこかに……。

「早く自由にしてよ、呪い殺すぞウラアツ！」

その前にこの口を縫ってやりたい。

困っている桃の表情に気づいたのか、亀仙人がこんなことを言うてきた。

「あの鬼娘に手を焼いておるようじゃのう。よし、ワシが手を貸してやってもよいぞ」

「ハゲに何ができるんだい？」

桃が尋ねると亀仙人は二カツと歯を見せて笑った。

「わしが発明した大釜に閉じこめておけばよい」

「はあ？ 大釜って……ボケてるのかい？」

「頭はハゲておるが、ボケてはない。こう見えてもピチピチの一八歳じゃぞ」

「ウソつくなハゲ！」

桃のグープパンチが再び亀仙人を襲った。

「ぎゃっ、ウソではない……とにかく、わしの作った大釜は罪人を閉じこめておくにはもってこいじゃ。どんな怪力の持ち主でも外に出ることは不可能じゃぞ。さらに今なら防音仕様のサービス付きじゃ！」

というわけで、亀仙人が用意した大釜に温羅を閉じこめたのだが。

「出しなさいよウラアツ！」

防音仕様の役立たず！

「出せ出せ出せーっ！」

大鎌の中で喚き続ける温羅。

桃は耳を塞ぎながら傍らにいた亀仙人の頭を引っぱたいた。

「ぜんぜん駄目じゃないか！」

「ワシのせいではない、鬼娘の声が馬鹿デカイのじゃ。じゃが、声は出せても体は出てくることはできんじやろう」

「本当だろっね？」

「この天才発明家の亀仙人さまが言っておるのだ、間違いない！」

「まあよしとするかね。仕方ないからその大釜は海の底に沈めておきな！」

これを聞いた温羅は焦る焦る。

「ちよつと、美少女にそんなことするなんて非人道的だと思わないわけ!？」

桃はまったく聞く耳持たず、村の者に命じて温羅の入った大釜を運び、海獣どもの巣くう荒波の海に沈めることにした。

さっそく桃たちは村人を引き連れて海までやってきた。

そして、波が打ち寄せる断崖絶壁から、村人が大釜を海に投げ入れた。

「いやあ〜ん、絶対呪い殺してやるう！」

ザッパ〜ン!

温羅は呪いの言葉を残して暗い海に沈んだ。

一方そのころ。

ナンパに惨敗した挙げ句の果ての猿助。

「うげえ〜っ飲み過ぎた。やべっ、しょんべん漏れる!」

トイレを探して歩き回っているうちに、なんだかいつの間にか竹藪に迷い込んでしまった。

ガサガサっつと笹が風に揺れる。

「わっ!」

短く叫んで猿助は身を縮めた。

「どこだよここ。早く外に出てーけど、道がわかんねーし、しょんべんもしてーし」

夜空に輝く満月。

月光は煌々と明るいが、竹藪に入ってしまったと、身の毛がよだつてしまうのは仕方あるまい。

近くに誰もいないし、それがまた怖いのだが、周りに人気がないことを確認して猿助は立ちしょんすることにした。

着物を下ろした猿助は、尻丸出しで仁王立ちをして、太い竹に向かってしょんべんをした。

じよぼじよぼ。

つと、黄金色の液体が放物線を描きはじめたそのとき!

夜空が瞬く間に昼空になり、閃光を放ちながら宇宙から何かが飛来してきた。

「うわっ、なんだあれ!？」

眼を丸くする猿助。

帚星が流れてきたかと思っただが、それがどンドン猿助に向かって落ちてくるではないか!

「マジかよっ、うわっしょんべんが、ぎゃっ!」

一度開いた蛇口は閉まらない。

黄金色の液体が右往左往。

慌てる猿助。

着物にしょんべんがかかる！

そして、空からは謎の光が落ちてくる！

「な、なななななっ！」

どうしていいかわからず叫ぶ。

謎の光はすぐそこまで迫っていた。

眼を潰すほどまばゆい光で猿助は目を開けていられなかった。

風が轟々と響き、竹藪が激しく叫んだ。

強烈な衝撃音が鳴り響き、地面が激しく揺れたと同時に猿助が吹

っ飛んだ。

「ぎゃっしょんべんが顔に！」

砕かれた地面と一緒に爆風に巻き込まれた猿助が 落ちた。

「ぎゃっ！」

踏んだり蹴ったりだ。

顔にかぶった土を払いながら猿助は立ち上がった。

今まで広がっていた竹藪が円を囲むように消失して、そこには超

巨大なスプーンでつくったようなクレーターが空けていた。

猿助はクレーターを覗き込み、その中心に何かを発見して驚いた。

「何だあれ？」

それは竹のような形をした『何か』だった。

大きさは大の大人が一人か二人、詰め込めば三人くらい入れそうなくらいか。『入る』というたとえをしたのは、それがあきらかに人工物だったからだ。

ミサイルにしては形が変だし、だとしたら乗り物だろうか？

猿助はすっかり着物を履くことを忘れて、フルチンで恐る恐る『

何か』に近づいた。

『何か』が突然音を立てた。

「ぎゃっ！」

思わず悲鳴を上げて猿助は地面に尻餅をついた。フルチンで。

蒸気を噴き出しながら『何か』の扉が開き、中から幼いうめき声
が聞こえてきた。

「うつつ……ん」

猿助は四つんばいになって、尻を突き上げながら『何か』の中を
覗き込んだ。

「……おい、生きてるか？」

猿助が見たものは、ぶかぶかの十二単にくるまった少女だった。

「うつつ……」

「おい、眼覚ませよ」

「うつつ……」

少女は静かにまん丸の瞳を開き、大声で叫んだ。

「きゃ~~~~っ！」

「なんだよ？」

バタンつと少女は気絶した。

何が何だかわからずそこに仁王立ちする猿助。
だってフルチン！

鈴鹿御前編 1

辺境の地を旅しながら、全国各地の怪物を退治している。と、噂される勇者さま御一行がいるらしい。

その噂は怪物に苦しめられている民たちのみならず、今や全土の怪物どもの耳にも入っていた。魔女つ娘海賊団が壊滅させられ、大魔導士温羅がやられたらしい。それも絶世の美女とたった三人の下僕に。

今はそこに下僕が一人プラスされていた。

「ねえー、なんで徒歩なわけー？」

一行の後ろをだらだら歩く黒髪の少女が愚痴をこぼした。顔だけ見れば類い希なる美少女なのだが、頭にはウサギのような長い耳が生えていた。明らかに人間ではない。

桃は振り返らずに少女を怒鳴りつける。

「うっさい、グダグダ抜かしてんじゃないよ！」

「かぐやもう歩けな〜い」

少女　かぐやは地面に尻をつけて座ってしまった。

桃はすぐに引き返してきてかぐやの胸倉を掴んで持ち上げた。

「てめえ、誰が拾ってやったと思ってるんだい！」

「かぐやもつと優しい人に拾われたかつたあ」

「頭にうさ耳なんか生やした気持ち悪いガキなんか、心優しいアタイ以外の誰が拾ってくれるっていうんだよ！」

子供にも容赦ない桃がマジギレする前に雉丸が止めに入る。

「まあまあ、桃さんムキにならないで。ポチだって同じ境遇の仲間が増えて喜んでるんですから」

ポチはうんうんとうなずいた。

「早くボクとかぐやさんの記憶喪失が治るといいなあ」

記憶喪失のガキが二人。

ポチは温羅に拾われる以前の記憶がない。ポチという名前も温羅

が勝手に名付けたものだ。

もう一人のかぐやは昨夜以前の記憶がない。しかも、もつとも古い記憶は『フルチン』だった。

そう、かぐやを一番はじめに見つけたのは猿助だった。あの空から降ってきた謎の乗り物に乗っていた幼女なのだ。

かぐやについてわかつていることは名前だけ。手がかりになりそうな謎の乗り物は村に預け、自称天才発明家の亀仙人が調べている。空から降ってきたかぐやを見た村人たちは、その美しさを見て天女さまかもしれないと言った。真珠のように輝く白い肌で、顔立ちが子供のくせに洗練された高貴されているが、頭にウサ耳の生えた天女なんか聞いたことがない。トラ耳を生やした鬼人族と同様、異形で怪物と見る者を村の中にはいた。そして、何よりも人々を畏れさせたのは、その紅い眼だった。

そういえば他にも手がかりがあった。なぜか大人用の十二単を着ていたかぐやを着替えさせるとき、首から 黄金の鍵 のついたネツクレスを下げていた。ちなみにその着替えのときに、パンツに『かぐや』と刺繍されていたことと、自ら『かぐや』と自称していることから名前が判明した。

この 黄金の鍵 は文字通り、記憶の鍵（、）となるのだろうか？
こうして旅は美女一人と四人の下僕となったわけだが、新メンバーのかぐやはまだまだ桃にたいして反抗期だった。他の三人は反抗期を過ぎている。

「誰がおんぶー」

かぐやはもう一步も歩く気ゼロ。

ただのワガママ娘を桃がおんぶするはずがない。

かぐやと同じくらい背丈のポチでは荷が重いだらう。

雉丸は誰かを背負うと武器の制限がでる。

残る一匹に桃は目を向けた。

「サル、あんたが役に立つときがきたよ」

「なんでオレが！」

「だってあんた若い子が好きだろう?」

「こんなガキなんか好きじゃねーよ!」

ガキと言われたかぐやも黙っちゃいない。

「かぐやガキじゃないしー、あなたのほうがガキじゃん!」

「オレのどかがガキなんだよ!」

猿助は顔を真っ赤にしてかぐやに掴みかかった。

二人が取っ組み合いをはじめてしまったのを見てポチがあたふたする。

「ケンカはよくないからやめようよお」

三匹のガキを見ていた桃の目尻が上がる。

「てめえら、ここは保育所じゃないんだよ!」

桃に恫喝された三匹はすくみ上がって身を凍らせた。これ以上やっていると殺される。

まったく動じていないのは雉丸くらいだ。

「そういうことだから、サル。お前が背負ってやれよ?」

「……わ、わかったよ!」

ちよっぴり強気に返してみたが、言葉は震えているし、絶対に桃のほうは見られない。

猿助がかぐやをおんぶすることで決着をしたが、これから旅はまだまだ先が長いことだろう。

雉丸は桃に視線を向けた。

「桃さん、そろそろ乗り物がないと、この先不便だと思いますが?」

「もうすぐ京の都だ。そこで何か探そうかね」

ポチが『はあくい』と手を挙げた。

「ボク、牛車がいいなあ。まったりしてて気持ちいいと思うよお」

「却下」

即答の桃。

次に猿助が提案する。

「オレは断然早馬がいいと思うぜ。だってカッコイイじゃん?」

「あんた馬に乗れるのかい?」

桃に突っ込まれて猿助は少し言葉を詰まらせる。

「の、乗れないけど悪いかよ。馬なら馬車だつてあるだろ！」

馬に乗れないのはきつと猿助だけじゃない。馬車というのは妥当なところかもしれない。

雉丸もそれに同意した。

「そうだな、俺たちが手に入れられる物で考えると馬車が一番かもしれないな。鬼たちの乗り物が手に入るなら話は別だが」

言葉のニュアンスからわかりそうなものなのに、かぐやはあっさり言い出した。

「だったら鬼とかいうのから買えばいいじゃん？」

かぐやを背負っている猿助はどつとため息を吐いた。

「お前なあ、簡単に言うんじゃねーよ。鬼がどんな奴らかお前だつて知ってるだろ？」

「かぐや知らな〜い。鬼つて何なの？」

記憶喪失だからなのか、それとも本当に知らないのか。

ジパングに住んでいるものなら、鬼を知らない者はしない。鬼と言えば恐ろしいものなのだ、幼いころから教え込まれて子は育つ。

かぐやが目を丸くして周りの者を見ながらキョロキョロして、目の合った雉丸が口を開いた。

「鬼というのは古来からこの世界にいる生き物のことだ。凶暴で野蛮な怪物だと人間からは忌み嫌われている。だが、鬼の文化は人間のそれよりも遥かに高く、科学、魔導などは人間なんて遠く及ばない。オレが持っているこの銃も鬼が作ったものだ」

そう言つて雉丸はリボルバーを見せた。

人間の技術では作れないとされている物。大きな都では鬼から盗んだ技術を模倣している物もあるが、応用するとまでは行かずに流用の域を脱し得ない。

そう考えると……。

桃は少し鋭い眼でかぐやを流し見た。

「あんたが乗つてたアレは誰が作ったもんなのかねえ？」

かぐやの謎は深まるばかりだった。

記憶喪失相手にその話題は深く追求されることはなかった。

先頭を歩いていた桃を抜かしてポチが前に駆けだした。

「ほら見て、おっきな都が見えるよお！」

ジパングーの大都会。

帝も住んでいるという京の都はすぐそこだった。

鈴鹿御前編 2

京の都の入り口で、うさ耳の生えたかぐやのことで守衛と一悶着あったが、桃がアレしてコレしたおかげで無事に都入りできた。

華の都でも桃の美しさをは目を惹く。貴族たちにはない野性的で勇ましい気高さを桃は持っている。

うさ耳のかぐやも当然、目を惹いてしまうことになったが、そこは桃がアレしてコレして、近づいていちゃもんをつけてくる者はいなかった。

京の都に入って一行は別行動を取ることになった。雉丸は物資の調達など、ポチはそれについて行き、猿助はたぶん美人のねーちゃんでも探しに行ったのだろう。

かぐやは桃に引きずられて歩いていた。

人の集まりそうな広場にやってきた桃は、かぐやの胸倉を掴んで自分の顔に引き寄せた。

「ここいらでやろうかね」

「えっ、何を？」

「とりあえずコレに着替えな」

「はっ？」

「いいからさっさと着替えればいいんだよ！」

「は、はい！」

衣装を受け取ったかぐやは怯えながらも、ちょっとうつむいてボソッと呟く。

「いつか絶対復讐したる」

今は怖いからできないけどな！

ところで謎の衣装を受け取ったのはいいが、これって何の衣装？

「桃のお姉さま、あのおく、これって網タイツと……」

「スク水だよ。本当は別の物が欲しかったんだけど、子供用がなくてねえ」

物陰で着替えさせられ、最後に桃が鎖の首輪をかぐやに巻いて完了。

そして、桃は大声で人を集めた。

「てめえら、寄ってらっしやい見てらっしやい。世にも珍しい天然物のバニーちゃんだよ、しかも幼女ときたまんだ！」

横にいたかぐやが眼を剥く。

「はっ？」

そんなかぐやのことなど構わず、桃は集まってきた聴衆に向かって話を続けた。

「今からこのバニーちゃんが火の輪をくぐってごらんに見せましよう！」

「はっ!?!」

意味がわからない。かぐやは完全に置いてけぼりだった。

いつの間にか曲芸でよく目にする火の輪が用意されていた。

そこをくぐれと言うのですか？

訴えかける目でかぐやは桃を見つめるが、まったく取り合ってくれる気ゼロ。

「このバニーちゃんが見事に火の輪をくぐりましたら、おひねりを投げてくださいな。よし、そら行けバニーちゃん！」

「はあっ!?!」

「早く行きな！」

「なんでかぐやがそんなこと！」

「自分の飯代くらい自分で稼ぎなよ！」

「火の輪なんかくぐったことないし、アホでしょ！」

「さっさとくぐりゃーいんだよ！」

桃はかぐやのケツを蹴っ飛ばした。

燃えさかる火の輪が眼前まで迫り、かぐやは冷や汗を垂らしながらストップした。

「できるかボケ！」

「できなくてもやれ！」

そんな無茶苦茶な。

でも、桃はやらせる気満々。かぐやを担いで人間ロケットを発射しようとした。

「うおりゃーっ！」

かぐやロケット発射！

「死にたくなーい！」

かぐやは劇画な形相で自らの首から伸びていた鎖を登った。火の輪をくぐるより、こっちのほうがスゴイ曲芸だ。

桃のところまで登ってきて力尽きたかぐやは、地面に両手両膝をつけて息をゼーハーゼーハー。

それを見た桃は態度を軟化させた。

「仕方ないねえ。あんたの根性に免じて火の輪くぐりはなしにしてやるよ」

「最初からやらせんなよ……ボケ」

「そういうわけだから、この天然物のバニーちゃんを買いたい奴はいないかい！」

競売だった。

鼻の下を伸ばした男が手を挙げた。

「金一〇枚！」

「俺は金二〇枚出すぞ！」

桃は首を横に振った。

「まだまだ安いね、もっと出す奴はいないのかい？」

平然と人身売買をしようとする桃の胸倉に、鬼の形相でかぐやが掴みかかった。

「おんどりゃー、マジで売る気がボケナス！」

「見てのとおり口は悪いが元気の証拠。この可愛い口が言ってるんだ、多少の罵詈雑言は許してやりな。というわけで、誰か買う奴はいないかい？」

もう売る気満々。

いつの間にかできていた群衆の中から、烏帽子をかぶった眼鏡の

少年が出てきて手を挙げた。

「金三〇〇枚で僕が買おう」

人々がざわついた。

誰かが畏怖を込めた声でこう呼んだ。

「安倍清明さまだ」

名を呼ばれた少年　清明はそちらを振り向くことなく、まっす

ぐかぐやに向かって歩いた。

「珍しい妖魔だ。おもしろい研究ができそうだね」

見た目は少年だが、その顔つきは妖しく大人びている。

が、次の瞬間！

「うわーマジで可愛いよこの妖魔。今から僕のペットになるなんて、ふふふっ」

清明はかぐやに抱きつこうとして、周りの白い視線を感じて咳払いを一つ。

「コホン、持ち合わせだけでは足りないので、前金で金一〇枚払おう」

真面目な顔つきになった清明が財布を出して、金を桃に渡そうとしたとき、誰かが叫んだのだ。

「あやかしだ！」

光り輝く毬のような球体　オーブが宙に浮かんでいる。

清明が声を荒げる。

「出たな鈴鹿御前！」

オーブは清明に向かつて飛んできたかと思うと、急に掃除機のように周りの空気を吸い込むはじめた。

「しまった！」

清明が叫んだと同時に、手に持っていた金がオーブに吸い込まれてしまった。

すぐにオーブは飛んで逃げようとする。

それを桃が逃がすわけがない！

「アタイの金！」

だって金がかかってますから！

オーブは風よりも早く飛ぶ。

桃は鎖を握ったまま（、、、、、、、、）都を爆走した。

ドン、ガン、ボン、ぎゃっ！

走る桃の真後ろから悲鳴が聞こえたが気にしなうい

足には自信のあるというか、全般的に自信のある桃だったが、オーブとの距離はどんどん開いていく。

オーブを追う桃の目に見慣れた顔を飛び込んできた。

「邪魔だ退け！」

「姉貴、そんなに慌てて……オレの胸に飛び込んで……ぐはっ！」

目の前に現れた猿助の顔を踏み切り台にして桃は高く跳躍したが、猿助と物体Kと鎖がこんがらがって、鎖を握ったままだった桃は大きくバランスを崩して地面に落下した。

「ぎゃっ！」

猿助が短く呻いた。

地面につぶれた猿助の背中には桃の尻が乗っていた。

「くそーっ、逃げられた！」

それどころではないのが約二名。

無罪なのに市中引き回しの刑の疑似体験したかぐやは全身ポロポロ。

座布団にされた猿助はちよっぴり幸せそう。

すぐに晴明がこの場に駆けつけた。

「あのオーブはどこに？」

「見失ったに決まってるだろう！」

オーブを完全に見失ってしまった桃は爆乳を揺らしてご立腹だ。だが、金づるはそこにいる。

「金三〇〇枚、払ってもらおうか？」

「ふむ、いいだろう。では僕の屋敷に案内しよう」

こうして桃たちは安倍晴明の屋敷に招かれた。

鈴鹿御前編 3

板の間にある祭壇に飾られた鏡。

鏡には六人が映り込んでいた。

あぐらを掻く桃と合流した下僕三人と売り物一匹、それと後から現れた清明だ。

「約束の金三〇〇枚だ」

清明は布袋を解き中身を見せた。

これで契約成立だ。

ポチが泣きそうな顔をして声をあげる。

「ひどいよお姉御さん！」

「アタイのやることに文句あるのかい。かぐやだって金持ちに貰われたら幸せだよ」

桃はかぐやに目を向けた。

「うーうーっ！」

かぐやは猿ぐつわを噛まされ、手足を縛られ呻いていた。イモムシのようにくにくにくにゅもがいている。

それを見た桃がかぐやの気持ちを代弁。

「かぐやだってあんなに喜んでるじゃないか」

絶対に違う。

猿助と雉丸も別に止めようとしてなかった。

「オレは最初からガキと一緒に旅なんかしたくないんだ。ついでにポチもここに置いて行っちゃえよ」

「ならガキのお前も置いていこう」

と、雉丸は猿助を睨みつけ、話を続ける。

「かぐやを置いていくのは俺も賛成だ。危険な旅に巻き込むわけにはいかないし、何より桃さんの判断が第一だ」

この会話を聞いていた清明の目つきが急に変わった。

「もしかして……怪物退治をしている絶世の美女とその下僕がいる

と噂を聞いていたが……君たちがそうなのかい？」

「アタイらも有名になったもんだね」

「噂で聞くほど美女じゃないな」

吐き捨てた晴明に桃が殴りかかろうとしたの雉丸が後ろから押さえ込んだ。

「桃さん、彼に喧嘩を売ったら王朝まで敵に回すことになりますよ」

「おうおう、やってやろうじゃないか！」

「別に桃さんがやるというなら俺はどこまででもついて行きますが、王朝を敵に回してもめんどくさいだけで、なんのメリットもありませんよ？」

メリットがない。この言葉は桃の胸の響いた。

すーっと力を抜いた桃は再びあぐらを掻いて座った。

晴明はあざ笑うように桃を見下した。

「辺境じゃ美女って言われてるのかもしれないけど、僕に言わせればただの野蛮人だね」

「なにをぉ！」

再び桃が殴りかかろうとしたとき、急に床が揺れた。

特に祀られていた祭壇の揺れは激しく、丸い鏡が床に落ちて転がり、桃の足音で止まって真つ二つに割れた。

あたふたする晴明が割れた鏡を拾おうと手を伸ばす。

「ああつ、大事な鏡がああつ！」

そのとき、鏡が急に激しい閃光を放ち一同は目をくらませた。

鏡に映し出される黒い影。それはだんだんと形をつくり、なんとそこに小袖に鮮やかな紅の袴を着た美少女が現れた。

鳥のくちばしのようにツンと天に伸びる黒塗りの立鳥帽子。遊女や盗賊が好んでかぶるこの帽子をトラ耳の間に乗せた黒髪の美少女。桃に負けず劣らずの美形だが、その顔は桃と違って清楚な貴族風、年の頃は一六歳くらいだろうか。

美少女の姿を確認した晴明が息を呑んだ。

「……つ、鈴鹿御前だ！」

桃も鏡の中をじつくりのぞき込んだ。

「ほう、これがかの有名な鬼女の鈴鹿ちゃんかい。綺麗な顔してるけど、アタイの足下にも及ばないねえ」

その横では猿助が鼻の下を伸ばしていた。

「綺麗な娘だなあ。マジでこの娘を退治するのかよ？」

相手が美少女と知って猿助は乗り気じゃないようだ。

しかし、この都に来た第一の理由は鈴鹿御前の情報を集めるためだった。

桃と別行動をしていた雉丸はすでに多くの情報を仕入れていた。

「旅人や貨物を運ぶ大切なルートになつている山に、鈴鹿御前という盗賊が隠れ住んでいるらしい。そのため、その山では昼夜を問わず謎の光が現れ、運んでいる物資や旅人の荷物、帝への貢ぎ物までも盗まれているらしい。それがすべて鈴鹿御前の仕業だと云われている」

謎の光とは桃たちが見たあの光球だろう。

晴明はうなずいた。

「君の云うとおりだ、そのことで大変困っている。そして、今まで僕が張った結界のおかげで大丈夫だったんだけど、ついに都の中にまでその光の球が……」

鏡の中い動きがあつた。

鈴鹿は畳の部屋で優雅にお茶とお菓子を摘みながら、自分に届いた手紙を読んでいるようだった。

新しい手紙を手にとった鈴鹿が急に嫌そうな顔をして、鏡の向こう側から歌うように綺麗な声が聞こえてきた。

《『親愛なる鈴鹿ちゃんへ、お願いだから早くおらのところへ嫁に来てくれ。天竺第四天の魔王の娘の鈴鹿ちゃんが嫁に来てくれたらジパングもおらたちのものになったも当然だべ。追伸、こないだ鈴鹿ちゃんが黙って持って行った妖刀を返してくれ、あれがねえと困っちゃうべ』……キモッ!》

手紙を読み終えて最後に感想を吐き捨てた。ついでに手紙をビリ

ビリに破って捨てた。差出人のことをだいぶ嫌っているらしい。

しかし、手紙の差出人はいつたい誰なのだろうか？

鏡の中の映像を見た晴明は青い顔をしていた。

「大変だ、あの噂は本当だったのか……。鈴鹿御前と大嶽丸が手を組んでジパング転覆を狙っているというのはい！」

桃が晴明に尋ねる。

「その大嶽丸って誰だい？」

「大嶽丸も知らないなんてバカだなあ。ジパングでも三本の指に数えられる凶悪な鬼に決まってるじゃないか」

「バカとはなんだいバカとは。鬼の名前なんて知らなくても退治しちゃえばいいんだらう」

再び桃の怒りが晴明に向かって手が出そうになる前に、雉丸は補足説明をくわえて気を引いた。

「三本の指に数えられているのは、海の魔女『温羅』、北東の魔王『大嶽丸』、そして最強の鬼神と云われている『酒吞童子』ですね」
その大嶽丸が鈴鹿と手を組もうとしているのだ。一方的な求婚だが。

三本の指に入ろうが入るまいが桃には関係ない。

「温羅だつて倒したんだ、他の二匹もそのうち倒してやるさ。鈴鹿のことも手を組まれる前に、さっさと倒しちまえばいいんだらう？」

強気な桃のことを晴明は気に入れないようだった。

「簡単に言ってくれるじゃないか。僕だつて手をこまねいてるわけじゃないんだ、それでもまだ敵の本拠地すら見つけれないんだからな。僕ができないことを君ができるわけないじゃないか」

「てめえこそ言ってくれるじゃないか。本当は見つけられないんじゃないやなくて、見つけられないんだらう？」

「どついつことだよ」

「相手が美少女じゃ鼻の下が伸びるのも無理はない。あの鏡でいつも盗撮してハアハアしてんだらう？」

挑戦的な目で桃は背の低い晴明を完全に上から見ていた。身長差

からしてすでに負けているが、清明も言われたままでは引き下がない。

「盗撮つて失礼だな、高等な術なんだぞ。それに鈴鹿御前が映ったのはこれをはじめでだし、僕はあんな女よりも……」

桃から視線を外し、別の場所に目をやった清明がハッと息を呑んだ。

「いない？」

と、呟いた清明。

そこにいたハズのかぐやがいない？

しかもポチまで消えていた。

拘束されていたハズのかぐやが自由の身になり、ポチを拉致して逃げようとしていた。

「売られてたまるかっコンチキショー！ 近づいたらこのガキをケチヨンケチヨンにするからなバカ！」

「うわあ〜ん、せつかく自由にしてあげたのにい、ひどいよあ〜ん！ かぐやを自由にしたのはポチだったらしい。

人質を取って部屋を出ようとするかぐや。

床に置いてあつた物干し竿を握った桃。

物干し竿が大きく薙ぎ払われた。

見事に足をすくわれてかぐやはコケた！

すぐに桃は床に這い蹲るかぐやの首に物干し竿を押しつけた。

まったく身動きできなくされたかぐやが喚く。

「バカバカバカ！」

「キーキー喚いてんじゃないよ。金持ちで仮にも都の陰陽師さまにもらわれるんだ、幸せだと思いな！」

「絶対イヤ！ ロリコン趣味のガキに何されるかわかんないじゃん！」

幼い年同士だったらロリコンではない。

だが、ロリコンと言われては黙ってはいられない。

「僕はロリコンなんかじゃないぞ！」

「それでも絶対イヤーッ！」

嫌がるかぐやと積まれた金。桃の眼中には金しかない。

ここでポチがまん丸の瞳で桃に訴えかけた。

「かぐやたんのこと売らないでよお」

「あんたかぐやに酷いことされたのに、どうしてかばうんだい？」

「だってかぐやたんが可哀想なんだもん」

潤んだ瞳で上目遣い。精神攻撃だ。

が、桃に人情なんてものがあるのだろうか？

桃には効かない様子の子の精神攻撃も、雉丸の胸にはグサグサきたよ
うだ。

「ポチ……大丈夫だよ、かぐやは決して売ったりしないからね。で
すよね、桃さん？」

「まあ雉丸が言うなら仕方ないねえ。その代わりに、雑用から何から
体を張って尽くすんだよ？」

桃の視線がかぐやに向けられた。

「そんなこと誰が……ぐあっ！」

物干し竿がかぐやの首を絞めた。

「わかりました、ごめんなさい……絶対復讐して……ぐわっ！」

かぐやは口から泡を吐いて気絶した。

金三〇〇枚を積んだというのに、晴明は少しご立腹だった。

「この妖魔を売ってくれないなんてヒドイじゃないか、詐欺だよ詐
欺！」

桃がキツと晴明を睨む。

「まだ金をもらったわけじゃないんだ、グダグダ言ってるじゃないよ
！」

「売れったら売れよ！」

「うるさいクソガキだねえ」

「僕はクソでもガキでもない。こう見えても二二歳なんだぞ！」
「やっぱりロリコンだ！」

一同は啞然としたまま沈黙。そのまま桃の視線は雉丸に向けられ

た。

「たしかあんたも二二だったねえ？」

訊かれた質問を雉丸はさらりと流した。

「そんなことよりも、俺たちが鈴鹿御前を退治するということがぐやをあきらめて欲しい」

晴明はうぐんと唸って腕を組んだ。

かくやをあきらめるのは不本意だが、人々を苦しめる女盗賊を退治できるなら。それに鈴鹿御前は帝の貢ぎ物にも手を出している。

京の都の陰陽師としては、帝に忠義を払わなければならないだろう。

「いいだろう。退治できるものならして来いよ」

晴明の言いくさに桃は自信満々の笑みで答えた。

「おう、やってやるよ」

しかも、桃はこんな注文までつけた。

「見事退治した暁には当然、報酬をもらえるんだろうね？」

「心配しなくても鈴鹿御前は賞金首だよ。朝廷から報酬が出る」

「そうと決まれば出発だ！」

「野郎ども行くよ！」

桃は下僕を連れて行こうとしたのだが、その中の一匹が動こうとしない。猿助はずーっと今まで鏡を覗いていた。

「ちよつと待つて、今いいとこなんだ」

その場を動こうとしない猿助の首根っこを桃が掴んだ。

「さつさと行くよ！」

「今から風呂に入るとこ……ふがつ！」

ゴン！

猿助の顔面が鏡ごと床に強打された。もちろんやったのは桃だ。

ゴナゴナになった鏡にはもう何も映っていない。

桃は鼻血ブーの猿助と気絶しているかくやを引きずって部屋を後にした。すぐに雉丸も何事もなかったように後を追う。

最後にポチがペコリと頭を下げた部屋を後にした。

鈴鹿御前編 4

桃たちが京の都を出立して三日三晩の時間が流れた。

「クソツタレ！」

桃の罵声が山々に木霊した。

鈴鹿のアジトがまったく見つからない。手がかりすら何もつかめない状況だった。

舗装されている参道から外れば、そこは険しい山道。山の中を歩き続けているメンバーも疲労の色が隠せない。

食料も底を付きそうだった。

猿助が腹をさすった。

「腹減ったーっ。そろそろ京の都に戻って食べもん調達しようぜー」
ポチとかぐやも身を寄せてぐったりしている。

「ボクもおなかすいたよお」

「かぐや歩けなあ〜い」

周りの状況を見かねた雉丸が桃に取り合おうとしたが、その前に桃が先に口を開いてしまった。

「てめえら、グダグダ言っつてんじゃないよ。絶対、京には戻らないからないよ。今戻ったら安倍の野郎に笑われるだけさ！」

プライドの問題だった。そのプライドを自ら曲げるなんてことを桃がするはずがない。

しかし、食料が残り少ないのも事実。

カエルの合唱のように三匹のガキが『おなかすいた』と喚き散らす。

桃が三匹を睨みつけた。

三匹がビクツと身をすくめて口を閉じたときは遅かった。

桃が猿助の胸倉を掴みんだ。

「てめえで魚でも捕ってこいー！」
投げた！

「ぎゃーっ！」

そのまま猿助は崖の下に転落して滝壺の中に吞まれてしまった。惨状を目の当たりにした残り二匹、魔の手が伸びてくるのも時間の問題だった。

桃がかぐやの胸倉を掴んだ。

「てめえも逝つて来い！」

やっぱり投げた！

「クソババア、覚えてろよ！」

捨て台詞を吐いて、やっぱり滝壺に呑み込まれた。

最後に残ったポチは子犬のように体を震わせている。

「ご、ごめんなさい。ボク泳げないから投げないですよ」

すぐに雉丸がポチを抱き寄せた。

「ちゃんと謝れば桃さんだって許してくれますよね？ だって桃さんはジパングーの美人で寛大な心の持ち主ですから、ね？」

「そうさ、アタイはジパングーの絶世の美女。心の広さだって誰にも負けやしないよ」

どうやら難を逃れた様子のポチ。瞳をキラキラさせている。

「ありがとお姉御さん。ボクこれからもいい子でいるね！」

桃はポンポンと優しくポチの頭を叩いた。

犠牲になった二匹は未だ滝壺から上がってこない。溺れ死んだ可能性も高いが、あの二匹は結構しぶとそうな感じがある。特に猿助はゴキブリよりもしぶとい。

桃は滝壺の下をのぞき込んで祈りを捧げた。

その祈りは無事を祈るでもなく、黙祷するでもなかった。

「あの二匹を捧げるから、どうか鈴鹿の居場所を教えておくれ」

生け贄だった。

すると、地獄の神が祈りを聞き届けたのか、滝壺がピカーンと光輝いた。

次の瞬間、水しぶきを上げて滝壺の中から珍獣がっ！

「呼ばれて飛び出てハメハメハー！」

ビキニ姿のハゲ爺が瀕死の猿助とかぐやを抱えて地面に降り立った。 亀仙人だった。

その姿を確認した瞬間、桃は亀仙人を滝壺に蹴落としていた。

「逝って来い！」

「ひぎやーっ！」

さよなら亀仙人、成仏しろよ！

滝壺に呑み込まれた亀仙人だったか、次の瞬間には滝壺の中から飛び上がってきた。なんと亀仙人の背負っている甲羅からジェット噴射しているではないか！？

再び桃の前に降り立った亀仙人の第一声は 。

「わしを誰だと思ってお」

「知ってるわ、クソハゲだろがっ！」

またハゲ仙人は滝壺に蹴落とされた。

しかし、三度滝壺から飛び上がって、蹴落とされた。

四度、蹴り、五度、蹴り、六度、蹴り……。

エンドレスも数えるのめんどくさくなったところ、全身ポロポロでヨボヨボの亀仙人は陸地に上げてついに力尽きた。

「わしは……もう駄目じゃ…… 最期にわしの一生の頼みを聞いて……」

……

桃は亀仙人を踏んづけながら望みを訊いた。

「なんだ言ってみな？」

「最期に……おぬしと一夜を過ごし……」

「逝って来い！」

「ぎゃー！」

再びエロ仙人は滝壺に落ちた。もう成仏してしまったのか、上がってくる様子はなかった。

亀仙人が最期にいた場所でポチが何かを見つけた。

「姉御さん、変な物が落ちてるよお？」

そう言いながらそれは桃に手渡された。

「なんだいこれ？」

それはまるで羅針盤のような形をしていたが、それよりも複雑な感じがする。

「いったいこのアイテムは？」

崖の下から老人の手が現れた。

「それは……わしが……ゲホゲホ……」

やっとの思いで崖を登ってきた亀仙人だった。その胸倉を桃が掴み、そのまま引き上げた。

「てめえ、まだ生きてたのかい！」

再び亀仙人が滝壺に落とされそうになったのを雉丸が制止する。

「ちよつと待つてください桃さん、そのアイテムのことを訊いてからでも遅くないかと」

「それもそうだね。ほら、命拾いしたんだ、さつさとお言い！」

桃に胸倉を掴まれ持ち上げられている亀仙人は、青ざめた顔で苦しそうに口を開く。

「そ……の前に、温かいお茶をくれんか？」

「てめえぶつ殺すぞ！」

桃が本気で怒る寸前だった。それを察知したメンバーは必死になった。

雉丸がすばやくフォロー。

「殺すのはいつでもできますから！」

ポチがまん丸の瞳をウルウルさせる。

「お爺さんを苛めちゃ可哀想だよお」

猿助が桃を後ろから羽交い締めにする。

「姉貴！ やっぱ好い体してんなあ……ぎゃ！」

便乗に失敗した猿助は、桃の肘打ちを喰らって地面に沈んだ。最後にかぐやが咳く。

「今度はちゃんと息の根を止めてから滝壺に落としたらー？」

フォローじゃなかった。

桃の両手が亀仙人の首を締め上げる。

「成仏しろよクソハゲ！」

「……す……すまん……わしぐあつ……わる、悪かった」

「今さら謝つても遅いんだよ！」

「……鈴鹿御前の……居場所を……教えてやる……」

「なに？」

すーつと桃の手から力が抜け、解放された亀仙人は地面に両手をついて咳き込んだ。

「うげつ……げほつ……うええつ……ナイスバディなねーちゃんたち、川の向こう岸で呼んどったわい」

臨死体験だった。

瀕死の亀仙人をいたぶるように桃はつま先で小突いた。

「生かしてやつたんだ、さっさとお言いよ！」

「そうせかすな……その前にお茶を……」

桃にギョつとした眼で睨まれ、亀仙人は言葉を呑み込んで、別の言葉を発する。

「おぬしが持つておる羅針盤はわしが発明したスーパー浦島スペシャル羅針盤（試作品）じゃ」

「で、この羅針盤と鈴鹿が何の関係があるんだい？」

「鈴鹿御前はおそらく特殊な結界の中に隠れておる。そこでそのミラクル羅針盤を使って時空の歪みを探知して、正しい道のりを教えてくれるのじゃ！」

桃の持つていた羅針盤を猿助が奪い取った。

「そんなにスゴイ羅針盤なんかよ。つーか、まさかこれをわざわざ届けに来てくれたのか？」

「そうじゃ、京の都でおぬしらが鈴鹿御前退治に向かったと聞いて追ってきたのじゃ」

だったらスゴイ功労者じゃないですか！

それを殴る蹴る滝壺に落とす。恩を仇で返しまくり。

亀仙人が京の都にやって来たのは、おそらく桃たちを追ってきたことだろう。

というこは。

少し声を弾ませながらかぐやが亀仙人に尋ねる。

「かぐやが乗ったあれがなんだかわかったの!？」
それはかぐやの記憶を探す大事な手がかりだった。

「あの乗り物は……わからんから村に放置してきたわ」

あっさり答えた亀仙人にかぐやのグーパンチ!

「くたばれ!」

「ぐはっ!」

殴られた亀仙人は後ずさりをして慌てた。

「ま、待て、今まで鬼人たちの技術も多く見てきたわしだが、あの乗り物に使われておる技術はわしにもよくわからんのじゃ。つまり、あの乗り物は鬼人の技術より、もーっと、もーっともっとスゴイ技術が使われておるのじゃ!」

つまりそれはどうということか?

一同の視線はかぐやに集まった。

このウサ耳の少女の正体は?

真面目モードな空気が流れている中、桃はゾワゾワっとする悪寒を感じて振り返った。すると亀仙人に尻をなでなでされていた。

「超スゴイ羅針盤を届けてやった礼じゃ、ケツくらい触らせい」

「あの世で女のケツでも追っかけてな!」

桃の回し蹴りが炸裂!

今度こそさよなら亀仙人。

「あゝれ〜!」

グルグル渦巻く滝壺に亀仙人は消えたのだった。

鈴鹿御前編 5

今は無き亀仙人の形見（？）の羅針盤を使い、その針が指し示す方角へ歩みを進めた。

すると、人気のない舗装された一本の道に出た。地図や人間の知らない行路だ。きっとこの先に鈴鹿のアジトがあるに違いない。

はやる気持ちを押さえて足を進めていると、やがて柏木原の彼方に絢爛豪華な御殿が姿を現した。

壮麗な御殿の敷地に足を踏み入れた桃たちは目を丸くした。

あんな鬱蒼とした山にこんな御殿があったとは驚きだ。

堀に掛かる紅い反り橋の前で、トラ耳の人影が桃たちを待ち受けていた。

影は三人。

赤フンの鬼が声を荒げた。

「貴様、いつかの凶暴女じゃねーか！」

凶暴女「桃。」

「あんた誰だい？」

桃はすっかり忘却していた。

雉丸が桃に耳打ちをする。

「温羅のところであつた奇人変態フルチンジャーですよ」

あれ、そんな名前だつたっけ？

ポチがすかさず訂正。

「違うよお、フルチン戦隊赤フンジャーだよ」

これが正解だつただろうか？

猿助とかぐやは初対面なので正解を知らない。二人はコソコソ話をした。

「フルンだつてよ、変態だな変態」

「ねー、フルチなんて恥ずかしくないのかしら」

「っーか、今はフルンじゃなくて横ンだけどな」

避難の眼差しで見られた赤フンの鬼が暴れ出した。

「フルチンじゃねー！ おらは鬼道戦隊鬼レンジャーのリーダー、赤フンの鬼レッドだ！」

さらに横にいた青フンの鬼が一步前に出た。

「そして、俺が鬼レンジャーのイケメン担当、青フンの鬼ブルーだ！」

クールに鬼ブルーは前髪を掻き上げた。見るからにナルシストだ。続いて最後に残った黄色いフンドシの巨漢が金棒を振り回しながら前に出た。

「おいどんは力自慢の大食漢、黄フンの鬼イエローじゃ！」

三人揃って鬼道戦隊鬼レンジャーと言いたいところだが、鬼レッドが頭を掻きながらすまなそうに口を開く。

「ちなみに鬼グリーンは家庭の事情でバイトが忙しくて、鬼ブラックは風邪で寝込んで病欠だ。メンバーが揃わんで悪いのお」

だからどうしたって話だ。

桃は背中に担いでいた物干し竿を抜いて、鬼レンジャーたちをタコ殴り。

一瞬にして鬼レンジャーは殲滅された。

虫の息で地面に這い蹲る鬼レッドが恨めしそうな眼で桃に手を伸ばす。

「卑怯者め……まだ我らは決めポーズもして……」

バタツ！

と、鬼レッドは力尽きた。

残る鬼ブルーは虫の息にもかかわらず、猿助に顔面を殴る蹴るされて、四谷怪談のお岩さん常態。

巨漢が自慢の鬼イエローは、桃にやられて地面に倒れたところで、かぐやに股間を蹴り連打。

鬼ブルーと鬼イエローも無惨に力尽きた。

猿助とかぐやは背中を合わせて息を吐いた。

「ふーっ、なかなか手強い野郎だったぜ！」

「まあかぐやの手に掛かれれば雑魚だけど！」

まるで二人で倒したみたいな言い方だった。

そんな二人を置いて桃はさっさと歩き出していた。

「てめえら、さっさと行くよ！」

無駄な手間を取らせてしまったが、鬼レンジャーは守っていた反り橋を渡ることにした。

堀池で錦鯉がぴよんと跳ねた。

それを見た猿助が一言。

「うまそう」

すぐに猿助の後頭部に桃の平手打ちが飛んできた。

「バカ言つてんじゃないよ！」

反り橋を渡りきると、そこには金銀で作られた塀と門があり、その奥に見えるは金銀七宝を散りばめた荘厳な屋敷。

この贅沢な御殿はすべて盗んだ財宝で造られているのだろうか？

屋敷の庭はこれまた美しい景色が広がっていた。

東西南北に分けられた庭には、各々に春夏秋冬の花々や景色が広がっており、春の息吹が心地よい風を運び、夏の力強い陽に輝く海の匂い、秋には色鮮やかな紅葉が心落ちつかせ、冬は白銀の雪が積もり化粧をしていた。

極楽浄土があるとすれば、まさにこんな場所なのではないだろうか？

桃は庭から土足で縁側に上がり、襖を力強く開けた。

青い畳が匂い立つ。その部屋の奥で机に寄りかかり、歌の本を読んでいた美少女が顔を上げた。

「……誰じゃおぬしら？」

紅の袴のしわを払いながら美少女　鈴鹿が立ち上がった。

鬼人族の黄色い瞳に見透かされているような気がして、猿助はドキツとした。

「こんな美少女を退治しなきゃいけないなんて、いつそ仲良くなつたほうがいいんじゃないかね……ちょっと待てオレ」

と、猿助は心の中で呟いたつもりだったが。

「全部、聞こえてるよ！」

桃に殴られた。

鈴鹿が静かに微笑んだ。

「うふふ、おもしろい方々だこと。でも妾を退治しに来たとなれば、お相手せねばなりませんわね」

鋭い眼をした鈴鹿が妖刀大通連を抜いた刹那、その刀は宙を飛んで桃たちの襲いかかった。

まるで自ら意志を持っているかのように飛ぶ大通連。

飛んできた大通連に向かって桃は猿助を盾にした。

「死ぬーっ！」

猿助の眼前まで迫る刃。

ガシッ！

なんと猿助が大通連を歯で受け止めた！

目を丸くする鈴鹿。

「まあ、なんとおもしろい曲芸！」

手を叩いて喜ぶ鈴鹿にすかさず雉丸がリボルバーを抜いた。

放たれた銃弾。

キンと金属音が鳴り響き銃弾が畳に落ちた。

銃弾を防いだのは鈴鹿の周りを飛ぶ新たな妖刀小通連。

大通連を歯で挟んだままの猿助を盾にしたまま、桃は物干し竿を

ガツン！

天井に引っかかった。

狭い部屋だとすげえ役立たず！

かぐやは机の下に隠れていた。

「お姉さま頑張って！」

桃に向かって親指を立ててグッドラック。

ポチは雉丸の後ろに隠れてブルブル震えている。

「みんな仲良くしようよお〜」

かぐやもポチも戦力外だった。

素早い身のこなしで鈴鹿は猿助から大通連を奪い取り、大きく後ろに飛び退いた。

「この大通連と小通連がある限り、妾を倒すことは不可能ですわよ」
鈴鹿の周りを飛ぶ二振りの刀はまるで盾でありながら、強力な武器でもあった。

桃の持っている盾が喚く。

「姉貴、相手も倒せないって言うてるんだから、ここは引こうぜ？」

「てめえ、相手が美少女だからって肩入れしてんじゃないよ！」

「オレは別にそんなこと……」

「もういい、てめえ一人で倒してきな！」

人間口ケツト発射！

桃に投げられた猿助は鈴鹿に向かってぶっ飛ぶ。

大通連が猿助の首を刎ねようと宙を舞う。

「ぎゃーっ死ぬ死ぬ！」

真剣白歯取り！

再び猿助は大通連を歯で防いだ。だが、さらに小通連までも襲ってきた。

真剣白刃取り！

今度こそ本当の真剣白刃取りで猿助は小通連を防いだ。

ぶっ飛んでいた猿助はそのまま鈴鹿と正面衝突ドーン！

鈴鹿を押し倒して上に乗った猿助。が、猿助の首元には鋭い鉄扇が突き付けられていた。

たらりと汗を流して力の抜けた猿助の口と手から妖刀がポロツと落ちた。

妖刀を取り返した鈴鹿は猿助の腹を蹴り上げた。

猿助の眼が大きく見開かれた。

紅の袴の間からトラ柄パンツが見えた！

隣の部屋の襖が自動的に開き、バク宙しながら鈴鹿は大広間に飛び込んだ。

幸せに浸っている猿助の後頭部に本が投げつけられた。

「さつさと追うんだよ！」

桃の怒声で我に返った猿助だったが、鈴鹿を追わずにちよつぴり放心。

猿助の視線の先で寛いでいる四人組。お菓子を食べながらお茶を飲んでいた。

「おまえら、オレだけに戦わせてなにやってんだよ！」

地団駄を踏みながら怒る猿助。

雉丸にあぐんしてもらってお菓子を口に運ぶポチは満足そうな顔をしている。

「こんなに美味しお菓子はじめてえ、サルたんも食べたらいのにい」

「食べたらいいじゃねーよ、食べてーよ！」

お菓子に飛びつこうとした猿助に桃が顔面に足蹴り。

「てめえはあの小娘を倒してからにしる！」

足蹴りされた猿助はぶつ飛んで隣の大部屋に落ちた。

「いててて、ちくしょう……ったく人使いが荒いよなあ」

猿助の様子を見ながら鈴鹿は口に手を当てて笑っていた。

「うふふ、本当におもしろい方。あんな凶暴な野蛮人とところにいないで、妾のところへいらっしやいな」

しばしのシンキングタイム。

猿助は隣の部屋であぐらを掻いて大笑いして談笑している桃と、目の前に佇んでいる背筋をピンと伸ばした正当派美少女を見比べた。

「……ちよつと待てオレ。相手はいくら可愛いつて言っても鬼だ。でも姉貴は中身が鬼だ」

真面目に考える猿助に鈴鹿はさらっと言う。

「何を本気で考えていらっしやるの？ ウソに決まっているじゃありませんか」

ウソかよっ！

大通連と小通連が放たれた。

猿助はエビ反りで大通連をかわし、ブリッジで小通連をかわした。

しかし、宙を舞う飛刀はかわしても追撃してくる。

大の字でジャンプした猿助の股下を大通連を抜けた。

残る小通連がケツに刺さって猿助は痛さで跳ねたら天井に頭をぶつけた。

「いてーよチクショー、ケツに穴が開く！」

「ケツには元から穴が開いてるだろうがバーカ」

片手間の桃がツツコミを入れた。

向こうの部屋ではおなかいっぱいでお昼の真っ最中。中でもポチは雉丸に膝枕されて幸せそうだ。

「むにやむにや……もう食べられないよお」

なんとも言えない疎外感を猿助は感じて落ち込んだ。

「オレって何のために戦ってるんだ？」

思い出せ猿助！

お前は何のために戦っているのだ！

正義か、名声か、それとも……？

猿助の目に飛び込んできたふんどしTバック。

横になった桃が無防備にも寝転がってケツをこっちに向けている。

「そうだ、オレはあれのために戦ってるんだ！」

瞳に炎を宿した猿助は闘志を燃やして鈴鹿に飛びかかった。

「くらえ、そっちが飛び道具ならこっちは手裏剣だ！」

振り上げられた猿助の手から手裏剣がスルツと抜けて、サクツと

畳の上に刺さった。その近くにはなんと桃が寛いでいたではありませんか！

「てめえクソザル！」

立ち上がった桃に鬼神が宿り、怒りの鉄拳が猿助の顔面にクリテ

イカルヒット！

やっぱり中身が鬼神だ。

鼻血の軌跡を描きながら猿助。

予測不可能な出来事に鈴鹿は目を丸くしたまま動けなかった。

ドシャン！

鈴鹿を押し倒して四つんばいで上に乗る猿助。
沈黙。

猿助と鈴鹿の目はバツチリ合う。

そして、猿助の唇に伝わるマシユマロの感触。

キッス！

猿助は眼を剥きながら飛び退いた。

一方の鈴鹿は頬を桜色に染めて恥じらっている。

「これが殿方との接吻……いいかも」

初めてのチューー！

鈴鹿は急に改まった態度で正座して、優雅につつましやかに頭を下げた。

「ふつつか者ですが、これから誠心誠意尽くしますゆえ、妾を妻として契りを結んでくださいませ」

「はっ？」

いきなりの求婚に戸惑う猿助。断るもなにも、首には大通連と小通連が刃を光らせ突き付けられていた。

イエスと答えなければ首が飛ぶ。

猿助は無言で小さくうなずいたのだった。

それを見た鈴鹿はニッコリ笑って、天井から伸びていた紐を引っ張った。

すると隣の部屋から悲鳴が！

寛いでいた桃たちの足下に落とし穴が開き、見事に不意を突かれて罠にハマった。

落とし穴に真つ逆さま。

残された猿助はガボンと顎を外した。

そして、鈴鹿はうっとりとした瞳で猿助を見つめていた。

鈴鹿御前編 6

桃たちがどうなったのかわからない。

ただ、今はこの状況を何とかしなければならなかった。

「待つてくださいますせ猿助さま！」

すっかり猿助にご執心の鈴鹿。

屋敷の中をグルグルと追いかけてこしながら、早三時間の時が流れようとしていた。

「待たねーよ、どうしてオレがお前と結婚しなきゃならねーんだよ！」

「だつて貴方様は妾の唇を奪つたのですよ、ちゃんと責任取つてくださいませ！」

「なんでそのくらいで結婚しなきゃいけねーんだよ！」

「それくらいとはなんですか、妾のことは遊びだったのですかっ！」

「そーゆーことじゃないだろー！」

ずっとこんな調子だった。

ただ言い寄ってくるだけならいいのだが、言葉の他に刀まで飛んでくる。

妖刀大通連と小通連が猿助を襲う。

猿助は『っ』で大通連を避け、『大』ジャンプで小通連をかわしたが、そこに両手を広げた鈴鹿が飛びかかってきた。

「猿助さま大好き！」

飛びつかれた猿助はそのまま固めて拘束された。

「あいたたたた……」

「猿助さま、一生一緒にこの屋敷で二人きりで過ごしましょうね」

「イヤだ、オレは生涯独身を貫き通すんだ。世界中のねーちゃんたちと遊んで暮らすのがオレの夢なんだーっ！」

「目の前に妾がいながら、他の女の子とを考えちゃダメですわよ。

猿助さまは妾だけを見てください」

と、猿助は強引に頭を掴まれ、首を回され目と目を合わされた。間近で見る鈴鹿はさらに綺麗だ。その熟れた唇を見ていると思わず奪いたくなる。

が！

「お前は鬼でオレはお前を退治にしにきたんだぞ、わかってんのか！」

「妾の何が不満なのですか!？」

「それは……」

よく考えてみるとないかもしれない。

こんな美少女に言い寄られるなんて初体験だ。もう一生こんな出来事ないかもしれない。

目の前の鈴鹿を取るか、それとも高嶺の花を追い続けるか……。

決して鈴鹿が劣っているわけではない。ただ、猿助が追われるより、若いねーちゃんおケツを追っかけるほうが好きだったのだ。

「やっぱりダメだ、結婚なんかできねーよ！」

腹を決めた猿助だったが、気づくと手錠で拘束されていた。

「なんじゃこりゃーっ！」

しかも、もう片一方の手錠は鈴鹿の腕に。

「ペアリングですわね！」

嬉しそうに鈴鹿はニツコリ笑った。

思わずその笑顔に負けそうになる猿助。

だが、どうにかして逃げ……るものにも、すでに妖刀二本が猿助の首を刎ね準備オツケーだった。

まさに絶体絶命！

観念した猿助は全身から力が抜けて畳にぺたんと尻をつけた。

「あははー」

もう笑うしなかった。

結婚は人生の墓場。そんな言葉が猿助の脳裏をよぎった。

表面上は仲むつまじい仮面夫婦。

腹の底で猿助はここから逃げ出すことだけを考えた。

まずはこの手錠をどうにかしなかなければならない。
でもどうにもなりません！

鈴鹿は猿助を引きずりながら歩きはじめた。

「屋敷の中を案内いたしますわ」

「……………」

猿助は岩のように無言のまま。そんなちっぽけな抵抗など虚しく、
やっぱリズルズル引きずられる。

鈴鹿が襖を力強く開けた。

その先に現れたのは紅白のふとん、しかもダブルサイズ。

「さあ、お布団の用意はできておりますわよ！」

「何する気だよ！」

「何って……………決まってるではありませんか」

顔を赤らめモジモジする鈴鹿。

猿助が叫ぶ。

「イヤだーっ！」

「今更嫌がることなど何も！」

畳の上で犬かきをする猿助の腕を鈴鹿がグイグイ引っ張る。

もしもこんな展開になってることが知れたら……………桃に八つ裂きに
される！

だって相手は退治する鬼。

でも、猿助は考えた。

「バレなきゃいいんじゃないか？」

呟いた猿助に鈴鹿は首をかしげた。

「何をバレなければいいのです？」

「いや……………それは……………でも……………」

いろいろな考えが渦巻く。

其の一、桃が怖い。

其の二、美少女が言い寄ってくるのに逃す手はない。

其の三、でも、一人の女に縛られるなんてまっぴらごめんだ。

「オレはどうすりゃいいんだーっ！」

「妾と結ばれればいいのです!」

「ちよ、寝るにはまだ早いだろ。その前に風呂……はヤバイから、飯だ。オレは腹が減ってるんだ、飯にしろ、飯ッ!」

「そうですね、まずは宴にいたしましょう」

まずはこれで一安心。

鈴鹿御前編 7

どこからか聴えてくる笛や太鼓のメロディーを耳にして、薄暗い牢屋にいる桃の不機嫌レベルがぐぐんと上がった。

「つたく、なんだいなんだい、どっかで宴会でもやってのかい？」

雉丸は銃のメンテナンスしながら桃に顔を向けた。

「俺たちを捕らえた宴ですかね」

「サルはどうしたい、サルは！」

「もしかしたら向こうに寝返ったのかもしれないですね」

半分冗談のつもりだったが、まさか向こうではあんな状況になつてゐるなんて、桃たちはまったく知らなかった。

だって、猿助と鈴鹿が戦っている最中、のんきに四人は寛いでいたから！

猿助が鈴鹿の唇を奪ったことや、責任を取らされて求婚されたことも知らない。

だつてのんきに寛いでたから！

そして、気づけば牢屋に落とされていた。

雉丸は縦横に線の入った格子に銃弾を撃ち込んだ。だが、金属音が響いただけで弾丸は床に落ちた。

「武器を取られなかったのは幸いでしたが、牢屋を壊せないのなら無意味ですね」

「つたく、アタイの物干し竿でもビクともしないよ」

というか、物干し竿で牢屋を壊そうと試したことがスゴイ。

床に這い蹲っていたかくやがゆっくり顔を上げた。

「おなかすいたんだけどー？」

雉丸に寄り添っていたポチもおなかをさすった。

「ボクもおなかすいたよお」

二人のガキを桃は睨みつけた。

「てめえら、さっき菓子食ってただろう！」

食べたには食べたが、あれからずいぶんと時間が経ったような気がする。

かぐやは格子に掴み掛かって、激しく揺さぶった。

「ひくらくけくっ！」

やっぱりまったくさっぱりビクともしない。

物干し竿がかぐやをぶん殴った。

「うっさい、兎鍋にして喰うぞ！」

「痛いし！ クソババアぶっ殺すぞ！」

かぐやの紅い眼がさらに紅く血走っている。

あぐらを掻いて座っていた桃の爆乳を揺らしながら力強く立ち上がった。

「おう、いつでも相手になってやるよ！」

女と女の激しい争い。血肉の雨が降りそうな予感だ。

が、その緊迫した空気の中、撃鉄を起こしたカツツという冷たい音が響いた。

「はいはい、そこまで。ポチが寝てるんだから、静かに」

雉丸の向けた銃口はもちろん桃じゃなくてかぐやに向けられている。

かぐやはシヨックで落ち込んで、床に四つんばいになった。

「ちくしょー、周りは敵ばかりだわ。でも、いつかきつと……王子様が迎えに！」

「来るわけないだろうポケット！」

かぐやは桃に物干し竿で頭を殴られた。

でも、今度はグツと怒りをこらえた。

「いつか……絶対に……復讐したる……」

頑張れかぐや、負けるかぐや！

牢屋という閉鎖空間。

遠くから樂しげな音が聞こえてくるし、今度は美味しそうな匂いまで漂ってきた。

腹が立つ！

桃は格子に回し蹴りを放った。

「飯くらい喰わせる！」

格子は激しく揺れるが、やっぱり壊すことは不可能だ。騒いでもおなかが空くだけだろう。

中からの脱出は不可能に思える。やはり外からの助けが……。

時間が流れ、桃たちがぐったりしていると、人影が壁に映るのが見えた。

響き渡る足音。

牢屋の前に現れたのは猿助と鈴鹿だった。しかも、鈴鹿は猿助に抱きついていて。どう見てもラブラブ。

それを見た桃は怒り狂って格子に飛びかかった。

「てめえ貴様！ 寝返ったな！！」

激しい怒号に猿助は怯えた。

「ひえ〜っ、ちが、違うつてば……成り行きで……」

尋常ではない怯え方をする猿助の顔を鈴鹿がのぞき込んだ。

「この女がそんなに怖いのですか？ だったら今すぐ殺してしまいましょう！」

殺すなんてとんでもない。そんなことしたら絶対に末代まで祟られる。

慌てて猿助は大通連を飛ばそうとしていた鈴鹿を止めた。

「ちよちよちよ、オレの大事な仲間を殺さないって約束したじゃないかよ」

格子から桃の手が伸び、猿助の頭をヘッドロックした。

「仲間じゃないだろ、てめえは下僕だろうが！」

「姉貴……くるじ……そこから出すから……オレを離して！」

そうしないと 睨みを効かせている鈴鹿の大通連と小通連が桃を殺す。

察した雉丸は桃を羽交い締めにした。

「まあまあ、桃さん。出してくれると言っているんですから、サルを離してあげてくださいよ」

「つたく」

舌打ちしながら桃は手から力を抜いた。

へなへなと崩れ落ちる猿助。すぐに鈴鹿が抱きかかえた。

「なんて野蛮な人なのでしょう。大丈夫ですか猿助さま？」

「ぜんぜん平気……」

でもなさそうな青い顔をしていた。しかし、ここで大丈夫と言っておかなければ、桃に危害が及ぶかも知れない。

鈴鹿は牢屋の鍵を握りながら猿助に最後の確認をする。

「本当にこの方々を出してよろしいのですか？」

「オレらの婚約を一緒に祝って欲しいんだよ。だからみんなも変なマネしないでくれるよな、な！」

お願いだから暴れないでくれ、という祈りを眼光に込めて猿助は桃たちを見た。

鈴鹿はあまり気が進まない顔をしながらも、ゆつくりと牢屋の鍵を開けた。

カチャッ！

次の瞬間、桃が牢屋の扉を蹴飛ばして外に飛び出し、猿助を置いて逃げた！

「オレを置いてく気かよ！」

叫ぶ猿助。

雉丸のリボルバーから銃弾が放たれた。

瞳を丸くする鈴鹿。

銃弾は猿助と鈴鹿をつないでいた手錠の鎖を断ち切った。

「ナイス雉丸！」

喜んで逃げる猿助に雉丸がポチを預けた。

「ポチを担いでさっさと行け！」

ポチは幸せそうな顔をしてスヤスヤ寝ている。

桃のあとを追ってかくやとポチを担いだ猿助が逃げ、背後を雉丸が守りながら走った。

まんまと婚約者に逃げられた鈴鹿はハツとし呟く。

「これが噂に聞くマリッジブルー!?」
違います。

桃たちは走り続け白石の敷かれた中庭に飛び出した。
すぐあとを追って鈴鹿が現れる。

「ダーリンを返してくださいませ!」

呼ばれたダーリンに視線が集中した。

「鬼となんか結婚したくねーよ!」

桃の詰めたい視線が猿助に向けられる。

「おいサル、いつあの小娘と婚約なんかしたんだい?」

「してないっつーの!」

否定する猿助。すかさず鈴鹿が叫ぶ。

「嘘八百ですわ! 妾たちは愛し合っていますもの!」

さらにすかさず猿助が反論。

「愛し合ってねーよ。そもそもオレはもう約束した人がいるんだい
!」

「どこのどなたですかそれは!」

瞳を丸くする鈴鹿に猿助が紹介した相手とは!

「ここにいる桃の姉貴だ!」

これこそ嘘八百だった。

桃のグーパンチが飛ぶ。

「てめえ、そんな約束してないだろうが!」

ぶっ飛ばされた猿助は大きく宙を舞って、池にドシャーンと落ち
た。

そんな約束なんてしてなくても、鈴鹿の敵意はすでに桃に向けら
れていた。

「ダーリンをその体で誘惑するなんて卑怯者! 妾が成敗してくれ
ますわ!」

「返り討ちにしてやるよ、あんたら手え出すんじゃないよ!」

桃は物干し竿を構えて鈴鹿に立ち向かった。

かぐやは物陰に隠れて小声で応援。

「頑張れ鈴鹿御前さまーっ」

雉丸は銃をしまつてポチを抱きかかえた。

「桃さん、気をつけてください」

下僕たちが見守る中、桃は物干し竿を大きく薙ぎ払った。

それを高く飛翔してかわす鈴鹿。

「そんな乱暴な武術では妾を倒すことなど到底敵いませんわよ」

「柔は剛を制すともいいたいのかい！」

豪快な桃の攻撃を風に舞う花びらのように、ひらりひらりと鈴鹿はかわし続ける。

そして、ついに放たれた二振りの妖刀！

烈風を起こしながら物干し竿が振り回され、左右から襲ってきた

二振りの妖刀を弾いた。

まさかという顔をする鈴鹿。

「たかが竹竿が妾の刀を！？」

「気合いが違うんだよ気合いが！」

気合い それはなんでも解決してくれる魔法の言葉

気合いを入れれば、寒くても風邪を引かない！

気合いを入れれば、焼け石の上を素足で歩ける！

気合いを入れれば、干し竿で刀を弾き返すのです！

鉄扇を両手に構えた鈴鹿が優雅に舞いながら桃に襲いかかる。

さらに二振りの妖刀までもが襲いかかって来るではないか！

風を切り裂く鉄扇の舞。

桃は紙一重で鉄扇をかわすが、背後からは小通連が心臓を狙っていた。

すぐに桃は地面に伏せた。

しかし、上空からは大通連が降ってくる。

見守り続けていたかぐやがこっそりガッツポーズ。

そして、雉丸が叫ぶ。

「桃さん！」

リボルバーが抜かれた瞬間、桃は飛び上がりながら叫んだ。

「手え出すんじゃないよ！」

上空から降ってきた大通連は桃の真横をすり抜け、地面に深く突き刺さった。

大通連はかわしたが、鈴鹿の追撃は怒濤のごとく続く。

「避けてばかりでは妾は倒せませんことよ！」

「うっさい！」

威勢良く叫んだ桃の服を鉄扇が切り裂いた。

ヤバイ、ポロリしそうだ！

ただでさえ前全快で谷間丸見えなのに、破れた服で激しい動きをしたら……。

構わず桃は激しい動きで猛攻撃を開始した。爆乳も大騒ぎだ。

こっそり池の中から爆乳を見守る猿助。

それに気づいた桃。

「どこ見てんだいサル！」

「オ、オレはどこも……」

慌てて否定するが、鼻からはツーツと鼻血が垂れている。

猿助に気を取られていた桃に鈴鹿が鉄扇が！

「よそ見は禁物ですわよ！」

「てめえなんてよそ見してても倒せるよ！」

桃は連撃された二枚の鉄扇をかわし、さらに飛んできた小通連を物干し竿ではじき返した。

しかし……鈴鹿は静かに微笑した。

桃は気づいた。

地面に刺さっていた大通連が消えた！？

刹那、桃の口から血の華が咲いた。

白い小石に飛び散った鮮血。

猿助も雉丸も啞然として口から声すら出なかった。

かぐやは両手でガッツポーズ。

「かぐやは今このとき悪魔から解放されました！」

すぐに立ち直った雉丸が猿助に向かって叫ぶ。

「さつさと桃さんを運べ！」

そう言つて雉丸はポチを脇に抱えて、さらにかぐやも脇に抱えて走り出した。

「なんでかぐやまで！」

かぐやは手足をばたつかせるが雉丸はまったく無視。

猿助は自分より大きな桃を背負つて雉丸の後を追つた。その背中
で桃は苦しそくに言葉を吐いた。

「あの野郎……まだアタイは戦え……」

そのまま桃の声は小さく消えた。意識を失ってしまったようだ。
まさかこんなことが起こるなんて……。

桃も人間だ。しかし、猿助と雉丸には信じられなかった。絶対に
負けないと信じていた。

猿助は歯を食いしばりながら走り続けた。

すぐ背後からは鈴鹿が追ってくる。

「逃がしませんわよ！」

真横をかすめる大通連と小通連の刃。

雉丸が前方に何かを見つけて叫ぶ。

「鬼の乗り物だ！」

流線型のフォルムをした乗り物。座席はあるが、車輪などはない。
タイヤのないオープンカーだ。

かぐやとポチを抱えた雉丸が前の座席に飛び乗る。続いて乗つた
猿助は後部座席に桃を寝かせた。

座席に流れる血の雫。

傷は深い。一刻を争う事態だ。

ずっと安らかに寝ていたポチが目を覚ました。

「ふわあゝ、よく寝たあ」

そして、ポチの眼前をかすめた大通連。

「わっ！」

一気に目が覚めた。

「なに、どうしたの！？ うわっ、姉御さん大けがしてるよー！」

慌てるポチの座席を猿助が後ろから蹴っ飛ばした。

「さっさとこの乗り物動かせよ！」

「……えっ？」

目を丸くするポチ。

ポチが乗っていたのが運転席だったのだ。

鈴鹿はすぐそこまで来ていた。

焦りまくるポチ。

「ボ、ボク運転なんてできないよ！」

弱音を吐くポチの後部座席を再び猿助が蹴っ飛ばした。

「気合いでやれ、姉貴が死んでもいいのかよっ！」

でました気合い！

ポチは破れかぶれでハンドルを握ってアクセルを踏んだ。

何も起こらない。

「ダーリンを返して！」

鈴鹿の投げた大通連がポチの首を刎ねんとする！

雉丸がポチの後頭部を掴んだ。

「危ないポチ！」

ゴッソ！

雉丸に無理矢理頭を押し込められたポチはおでこを強打した。

その瞬間、モーターの駆動する音が響き、なんとエンジンがかかった。

しかも、アクセル踏みっぱなしだったのでいきなりの急発進。

レッツ激突！

いきなり塀に大激突したが、そのまま壁を突き破って爆走。

どうにか鈴鹿から逃げ切ったかと思っただが、なんと鈴鹿は大通連をスノーボードのように使って追って来るではないか！？

「ダーリンばかりか、妾の愛車『光輪車』まで奪うとは許しがたき所業！」

宙を低く浮かびながら走る光輪車。

紅い反り橋を飛ぶように超えた。そのとき、赤青黄色のナマモノ

を撥ねたような気がするけど、気にしな〜い！

てゆーか、ポチはそれどころではなかった。

「わっ、ぎゃーっ、無理だよぉ！」

叫びながらもどうにか運転できていたのでオツケーさ！

雉丸のリボルバーが連続して火を噴いた。

小通連がすべての銃弾をはじき返す。あの妖刀がある限り、鈴鹿は鉄壁に守られているようなものだ。

猿助は懐から何かを取り出して投げた！

「くらえ火遁の術！」

目が眩む閃光が辺りを包んだ。

「しまった火遁じゃなくて、閃光だった！」

うっかりさん

しかし、その間違いが功を奏した。目を眩ませた鈴鹿がバランスを崩して大通連から落ちのた。

地面を激しく転がる鈴鹿を尻目に光輪車は全速力で走り続けた。

酒吞童子編 1

京の都にある宿屋に逗留して早三日。

深手を負った桃はまだ目を覚まさない。

医者の話では今こうして生きていることが奇跡なのだと云う。

高熱が続き、布団を濡らす大量の汗。表情は常に苦しそうにしている。

桃の世話はかぐやがした。理由は男に桃の着替えなどをやらせないということだったが、最初はかぐやが毒でも盛るんじゃないかと心配された。けれど、そんなことなどなく献身的にかぐやは看病を続けた。

別に優しさでやってるんじゃないんだからね。恩を売るためにやってるんだから！

それがかぐやの言葉だった。

この三日の間、雉丸だけが別行動を取っていた。桃の病を治すためらしいが、どこに行くのか告げずに旅に出た。

残された三人では頼りない。桃の看病をやっているかぐやはまだいいが、雉丸のいないポチは挙動不審、猿助は魂の抜け殻のように若い娘が目の前を通っても反応ゼロ。

病室に使っている個室から隣の部屋にかぐやが移動してきた。

「あのさー、大事な薬が切れちゃったんだけど誰かもらってきてくれない？」

『誰か』と言っても『どちらか』しかない。

猿助かポチ。

ちなみに今は真夜中だった。

魂の抜け殻の猿助は論外。

かぐやの目がポチに向けられた。

「ボ、ボクは無理ですっ」

すでにガクガクブルブル震えている。

猿助がゆらゆり立ち上がった。

「オレが行く」

今にも消え入りそうな声だった。

こんな奴に行かせて大丈夫なものかと思っただが、ポチもあんな常態ではどつちもどつちだろう。

なんだかんだで猿助が薬を取りに行くことになった。

宿屋の外はすでに真っ暗だった。

人はすでに寝静まっている時間だ。跋扈しているのは魑魅魍魎くらいなものだろう。

行灯を片手に猿助はゆらゆらりと歩いた。まるで幽霊だ。

月明かりと星が優しく照らす晩。それでいて月光は妖しくもある。堀川にかかる一条戻橋にさしかかると、橋の手前で腰を下ろしている女がいた。

腐っても猿助。それがすぐに二十歳前後の若い娘だとわかった。

けれど、今の猿助は両手を広げて駆け寄るようなマネはしなかった。若い娘は足をくじいたのか、足首を押さえている。無防備にも怪我をした脚は、はだけた着物から惜しげもなく覗いている。その美しい白い肌と脚線美の見事なこと。

紅梅のうちかけを身にまとう上には艶やかで色っぽい顔。その表情は少し眉尻を下げて苦しそうにしているが、その表情がまた男をそそのるのであった。

しかも、なぜか上着が少しはだけて片方の肩が夜風にさらされていた。

猿助は生唾をゴクンと呑み、体の底から生命力が沸き上がってくるのを感じた。

けが人を放っておくわけにはいかない。

いや、真夜中に美人のねーちゃんが苦しんでいるのに、放っておくのは男として間違っている！

「何かお困りですか美人のねーちゃん！」

猿助は鼻の下を伸ばして、さらに両手まで広げて娘に駆け寄った。

復活！

すっかり魂の抜け殻から復活した猿助。

娘はゆっくりと顔を上げた。目の前で見ると、さらに悩ましい顔だ。

「足首をくじいてしまつて……こんな夜更け、人も通らず困つていたところですよ」

少しハスキーな声だったが、それが猿助の体を痺れさせた。

「そんなことならオレに任せといてくれよ。ちよつど今から医者のところへ行くとこだかんよ、背負つていつてやるよ」

「それはそれはありますがとうございます、カツコイお兄さん」

「カツコイだなんて、そんな正直に言われると照れるぜ」

頭を掻きながら猿助は鼻の下伸ばしっぱなし。

さつそく猿助はその娘を背負つた。

少し猿助の表情が曇る。

「見た目よりガツチリしてる体つきだなあ」

「おほほほ、少し武道をたしなむもので……」

「へえ、そうなんだ。オレ強い女つて好きっスよ」

自分を売り込むことで必死。

橋を進んでいると、前方に人影が佇んでいるのが見えた。明かりも持っていないため、男か女かもわからない。

こんな夜更けに二人も人に会うなんて、珍しいこともあるものだ。そんなのんきに構えていた猿助だが、前方にいる人影は明らかにおかしい。

そう、まるで猿助を待ち構えているようだ。

「そこまですわよ」

凜とした女の声が響いた。

月明かりに照らされた女の顔、それは鈴鹿だった。

猿助を待ち構えていたのは鈴鹿だった。ここまで猿助を追ってきたのだ。なんともしつこい。

「うおっ、またお前かよ。お前とは結婚しねーつつんだろ」

猿助はあからさまに嫌そうな顔をした。

「今すぐ離れなさい！」

鈴鹿は強い口調で命じた。

猿助はあつかべーをして応じた。

「オレがどんな女といようとオレの勝手だろ！」

「今すぐ離れなさい。さもないと命無いものと思われよ」

「ま、まてよ……別に前と付き合ってるわけじゃないんだから、

殺すなんてヒドイじゃねーか！」

これじゃストーカーもいいところだ。勝手に嫉妬して、勝手に命を取られては死んでも死にきれない。

だが、少しようすは違うようだ。

鈴鹿の鋭い視線は猿助ではなく、その背中にいる娘に向けられていたのだ。

「耳や尻尾を隠していても、貴方からは鬼の臭いがぶんぶんする。

それも雄の臭い」

ぎよつと眼を剥いたのは猿助だった。

「雄？」

相手が鬼かどうか以前に、雄？

背負われていた娘は急に眼を紅く光らせ、鋭い鉤爪を猿助の首に突き付けた。

「おーほほほほつ、正体がバレてしまつては仕方ないわね。ただし、男というのは気にくわないわ。体は男でも心は乙女よおん！」

ガーン！

猿助痛恨のシヨック。

そーいえば、ケツの辺りに何か後ろから当たってますよ。それつてきつと男にしかついてないアレですよ。

ガッビーン！

燃え尽きたぜ猿助。

猿助は顔面を真っ白にして魂を離脱させた。

鈴鹿がゆつくりと前に歩き出す。

「ダーリンを早く解放なさい。死にたいのですか？」

「おほほほ、アタクシにこやつを解放するいわれはないわ。元々こやつは桃とかいう危険分子の情報を調べるために捕らえようとしたまで。さもなければ、殺してしまうつもりだったのだから」

オカマは鉤爪にたっぷりと生唾を落として舐めた。オカマだつて知らなければ、オカマだつて言われなければ、ものすごい肉欲的でエロイのに！

もはやオカマと知れた今は、なにをやられても精神的ショック。

鈴鹿はまた一歩前に出た。

それに合わせて鉤爪が猿助の首の皮を軽く突いた。

「殺しちゃつていいのかしらあん。アナタの大切な人みたいだけどお〜」

「ダーリンを殺したら貴方も死にますわよ？」

激しい殺気。

それは鈴鹿のみならず、左右からも感じた。

オカマは素早く左右に視線を配った。そこには大通連と小通連が、オカマを串刺しにせんと構えていた。

「なかなかやるじゃなあ〜い。でもお、この男が殺されたあとにアタクシを殺して何になるのかしら？」

これはどちらも手が出せない状態だった。

鈴鹿がが攻撃を仕掛ければ猿助が殺される。また、猿助が死ねば鈴鹿がオカマを殺す。

誰かが走つてくる音が聞こえた。

行灯を持った小柄な影。

「うわあ〜ん、暗いよお怖いよお〜！」
ポチだった。

その一瞬、オカマはポチに気を取られてしまった。
今しかない！

大通連と小通連が宙を舞う。

「ぎゃああああ〜！」

醜く悲痛な叫びが月夜に木霊した。

鉤爪の付いた腕が橋に落ちた。

血が噴き上げる腕を押さえてオカマがよろめく。

「おのれ、今日のところは退散してやるわ。でも覚えておきなさい、アタクシの名は酒呑童子さまの腹心　茨木童子よ。絶対に復讐してやるからね！」

捨て台詞を吐いて茨木童子は闇の中に姿を消した　片腕を残して。

ポチが瞳をウルウルさせながら猿助に抱きついた。

「うあ〜ん、怖かったよお。サルたんひとりじゃやっぱり心配だからって、かぐやたんに宿屋から放り出されたんだよつ。それでね、それでね、ここまで来てみたらなんかスゴイことになってたし。うあ〜っ、そういえばなんでここに鈴鹿たんまでいるのっ!？」

「ダーリンの命を救ったのは妾なのですよ」

「えっ、じゃあ鈴鹿たんって本当はいい人なんですかあ？」

「もとより無駄な戦いはしたくありませんことよ。最初に刃を向けたのはそちら、そのあとは妾からダーリンを奪おうとしたから仕方なく」

そのダーリンは真っ白な灰になっている。

鈴鹿は猿助を優しく抱き寄せ、頬に軽く口づけをした。

「ダーリン、起きてくださいまし」

「……………うわっ!」

猿助は驚いて飛び起きた。

「て、ててててめえ、オレに何するつもりだ」

「んもお、ダーリンまで。茨木童子とかいうオカマを追い払い、ダーリンの命をお救いいたしたのは妾なのですよ？」

「へっ?」

目を丸くして口をあんぐり開ける猿助。

ポチもうなずいた。

「うん、ボクも見てましたけど、鈴鹿たんが頑張ったんだよっ!」

「……そうなんか」

うつむいて考え込む猿助。
すぐに顔を上げた。

「けどよ、お前のせいで姉貴は今も死にそうなんだぞ。どう責任取
つてくれんだよ！」

「あの女……まだ生きてるのですか。なかなかしぶとい」

「まだつてなんだよ、絶対死なせるもんか！」

「妖刀大通連に受けた一撃。そうたやすく治るものではありません
わ。あの手応え、絶対に仕留めたと思ったのに、生きてるほうが不
思議ですわね」

「なんだよその言い方。お前なんか大っ嫌いだ！」

鈴鹿シヨック！

粗塩を塗った矢を乱れ打ちで心に喰らった。

明日にも世界は滅びますみたいなくらい絶望を背負う鈴鹿。あま
りのシヨックに四つんばいのまま立ち直れない。

ポチがしゃがみ込んで鈴鹿の顔をのぞき込む。

「元気だしてっ、ファイト！」

「……もう妾は生きていく希望もありませんわ」

鈴鹿はすっかり老け込んだ顔をゆつくりと上げて、憂いを含んだ
瞳で猿助をしつかりと見つめ、こう尋ねたのだった。

「あの女はダーリンにとって……そんなに大切な人なのですか？」

「そうだよ、大切に決まってるだろ！」

「妾よりもですか？」

「……………」

この返答には困った。答えは決まっていたが、それを言ったとき
に鈴鹿が何をしでかすかわからなかった。

鈴鹿はさらに口を開く。

「……それが答えですのね。仕方ありません、ダーリンがそこ
まで想う人なのであれば助けなければなりませんわね」

ビシッとシャキッと鈴鹿は立ち上がった。

「でも妾はあきらめたりしませんから、こつやっつて乙女は大人の階段を登っていくのですよ。たとえダーリンに好きな人がいようと、いつかは絶対に振り向かせてみせます！」

鈴鹿は涙を拭いて歩き出した。

「さあ、あの女のところへ案内してください」

すっかり立ち直った鈴鹿。

猿助はなんだか置いてけぼりだった。

酒吞童子編 2

病室に現れた鈴鹿を見たかぐやの第一声は。

「うわっ、なんでいるの？」

「ごく当たり前の反応だった。」

「その女を仕方なく治しに参りました」

鈴鹿はそう言ってふとんで寝込む桃の横に正座すると、両腰に下げている二振りの妖刀を鞘から抜いた。

それを見た猿助は驚いて飛びかかろうとした。

「やっぱり止めを刺す気だな！」

鈴鹿は哀しそうな顔をした。

「妾は情けない。いくら愛した人とはいえ、ここまで信用されていないとは」

殺気などどこにもない。それに気づいた猿助は飛びかかるのをやめた。

気を取り直して鈴鹿は抜いた大通連と小通連を、背中から胸まで貫通した桃の傷口にかざした。

「この妖刀は元々大嶽丸という鬼から奪ったものなのですが……あいつつたら、本当にキモイいしウザイし、ストーカーみたいで本当に困って……という話は置いておいて」

ストーカーなのはお前も同じだろ？

「この妖刀は生命の源、大嶽丸の命の分身と言っても良いものなのです。そして、生命漲るこの妖刀を使えば傷などたやすく治るのです」

二振りの妖刀が淡く輝きはじめ、蛍火のような光が桃の傷口に舞い落ちる。

すると、なんと傷口は見る見るうちに塞がってしまったではないか！？

鈴鹿の言うことに偽りはなかったようだ。

しかし、傷が消えても桃はいつこつに目を覚ます様子はない。

「おかしいですわね」

と、鈴鹿は呟いた。

見るからに酷かった外傷は消えた。そして、桃の表情は穏やかに戻り、大量に掻いていた汗も引いている。

それでも桃は目を覚まさないのだ。

猿助は鈴鹿につかみかかるのをグツと押さえて口を開いた。

「どういうことだよ？」

「外傷は完璧に治しましたのよ。けれど……妾にもわからない症状ですわ」

「てめえ！」

やっぱり感情を抑えられず猿助は鈴鹿に掴みかかってしまった。

しかし、軽くあしらわれ地面に叩きつけられてしまった。

「積極的なのは妾も嬉しいのですが、皆が見ている前で恥ずかしい」

「てめえなに勘違いしてんだよ！」

「わかってますわよ。約束はちゃんとお守りいたします」

鈴鹿は背を向けて部屋を出て行くこととした。

猿助が呼び止める。

「どこいくんだよ！」

「外に止めてあった光輪車は返してもらいます。次にお会いするときは治療法を見つけたとき」

部屋を出て行く寸前、鈴鹿は振り返って微笑んだ。

「妾がいなくても寂しがらないでねダーリン」

こうして鈴鹿は部屋を出て行った。

「寂しかなんかねーよ」

吐き捨てた猿助の脇腹をかぐやが小突いた。

「鈴鹿お姉様に惚れた？」

「惚れてねーよ、だってあいつ鬼なんだぜ！」

「ふ〜ん」

「ふ〜んじゃねーよ。オレはあんな奴より、この太ももが……」

そう言つて猿助は桃の太ももに頬をスリスリした。今だからできる暴挙だ。桃は起きてたら八つ裂きにされるだけではすまされまい。だが、そんな猿助に鉄槌が下った。

「エロザルはさっさと出てけっ！」

かぐやにケツを蹴っ飛ばされて、猿助は部屋を追い出されたのだ。つた。

酒呑童子編 3

山里からさらに山深い場所に、その隠れ屋は静かに佇んでいた。雉丸は玄関を静かに開け、深々とお辞儀をした。

「ただいま戻りました母上」

家の中では若い女が一人で茶を啜っていた。母と呼ばれた割には、その容貌は雉丸のような大きな子がいるようには見え、まだまだ若く美貌に溢れた母だった。

鬼女「紅葉」の名を聞き、この地方で震え上がらぬ者はいないだろう。多くの妖術を操り、多く配下を従え、多くの略奪や多くの人を殺した。

それも今は昔、現在では幼少期の名「呉葉」に名を戻し、ひっそりと山の奥で暮らし、時折里に降りては檜扇を使って人々の病を治していた。

呉葉は驚いた表情をして息子の帰りを喜んだ。

「まあ、よく返ってきたわね金ちゃん！」

「その名はとうの昔に捨てました。今は雉丸と名乗っています。あと、それは俺じゃなくて家の大黒柱ですよ」

「あらまあ！」

呉葉は抱きしめていた大黒柱から恥ずかしそうに離れた。

「母上……視力が悪くなられたのですか？」

「ちつとも、両目とも2・0よ。金ちゃんが帰ってきてくれたから、すっかり舞い上がってしまったってそれで」

「そーゆー問題か？」

今のところどー見ても激しくボケた母ですが？

呉葉は雉丸に座布団を勧め、囲炉裏で暖めていた茶釜から湯飲みに茶を注いだ。

「どうぞ、粗茶ですが」

「母上、それは客人にいう台詞では？」

「まあやだ、久しぶりの来訪者だから、すっかりそういう気分でお茶を出しちゃったわ!」

「オレは息子です」

大丈夫かこの母親?

呉葉は雉丸という息子がいる割には若い。けれど、美貌は保っていても、その物腰や背を丸めた姿は年寄りのようだった。

「母上……また老けましたか?」

「いやまあ、そんなこと言わないでよ。それでも若いころはブイブイ言わせてたんだからあ」

「その話、いつもなさるんですが本当ですか?」

呉葉は雉丸が物心ついたときからこんな感じだった。

「金ちゃんに嘘ついてどうするのよ。これでも母さんレディースの総長だったんだから、他にも盗賊団の頭も掛け持ちしていたし、悪いことをいつぱいしてきたのよ。あのころは若かったわ……若気の至りだったわね、特にあんな男に惚れたとことか」

話を聞いていた雉丸の顔つきが急に暗くなった。それを知ってから知らずか呉葉はフオーした。

「でもあんな男だったけど、あの男との間に金ちゃんが生まれてきてくれたことは、本当に心から嬉しいことなのよ」

「オレは生んで欲しいなんて頼んだ覚えありませんが」

「そんな悲しいこと言わないで金ちゃん」

「だからその名前で呼ぶのは……っ!?!」

急に雉丸は母の胸に抱き寄せられた。

呉葉は雉丸を強く抱きしめ、その頭を優しく撫でた。

「ごめんなさい……わたしのせいで……あなたはこんな……」

優しく温かいその指先は、髪の間に残る二つの傷跡を撫でていた。雉丸は抵抗せず、ただ深く息をつき、静かに静かにこう呟いた。

「けれど母上は、代わりに「人間」の耳をつけてくれました」

雉丸はゆっくりと呉葉の体を突き放し、静かに立ち上がってしっかりと呉葉の顔を見据えた。

「この力を必要としている人がいます。母上が鬼の元で学んだ魔導医学の知識が必要なんです！」

「その人は金ちゃんにとつて大切な人なの？」

雉丸は無言でうなずいた。

真面目な空気が一変、呉葉は両手を広げて喜んだ。

「まさかその人、金ちゃんの彼女！？ うっそー、まさか金ちゃんに彼女ができるなんて、大人になったのねえ。ママ嬉しいわあ！」

「……た、ただの命の恩人ですよ！ 今はその人に仕えています。女性なのは確かですけど」

「でも金ちゃんその人に気があるんでしょう？ 恋の相談ならいくらでも乗っちゃうわよ。けど、ママは男の人とうまくいったためしがないけどね」

笑顔爆発の呉葉。

どうやってたらかこの母から雉丸が生まれたのだろうか？

むしろ反面教師なのか。

呉葉は恋人のように雉丸の腕に自分の腕を回した。

「さっ、早く未来の花嫁さんのところへレッツゴー！」

「だから、オレと桃さんはそんな関係じゃなくてですね……」

「いいからいいから、恥ずかしがらないで金ちゃん」

「だから、その名前で呼ぶのもやめてくださいって言ってるじゃないですか！」

「あー、そういえば話は変わるんだけど」

変わるんかい！

ものすごいマイペースだ。

「なんででしょうか？」

ため息混じりに雉丸が尋ねると、急に呉葉は真剣な顔をした。

「わたし世の中のことにうといんだけど、ちよつと悪い噂を聞いたちよつたのよね」

「どんなでしょうか？」

「最近、酒吞童子というガキ大将が暴れてるって聞いたんだけど……」

…その酒呑童子って子、もしかして……」

酒呑童子編 4

四日目の朝、未だに桃は目を覚まさない。

雉丸も帰還せず、鈴鹿も姿を消してしまった。

居ても立つてもらえない猿助だったが、今の自分のできることなどなく歯痒い気持ちをしていた。

隣の部屋では今日もかぐやが桃の世話をしている。

猿助がぼーっと窓の外を眺めていると、後ろからポチが声をかけた。

「サルたんトランプしようよお」

「うっせえなあ、一人でやってろよー」

「一人じゃできないもん」

「何かできることあつだろ」

プイッとポチは顔を膨らませてそっぽを向いてしまった。そして、とりあえず神経衰弱をはじめた。

しばらくしてノックもせず誰かが部屋に入ってきた。

「この部屋から強い邪気を感じる……っってお前らかつ！」

烏帽子をかぶった見た目ガキなのに二二歳の清明だった。

猿助はあからさまに嫌そう顔をした。

「勝手に人様の部屋に入ってくんじゃねえよ」

「君たち僕より身分が下だろ。しかも、鈴鹿御前を取り逃がして、あの野蛮人は重傷を負わされて寝込んでるそうじゃないか。まったく口ほどにもないよね」

嫌みつたらしい言い方をされて、猿助は腹の底から怒りを吐き出す。

「だつたらてめえで鈴鹿を退治してくればいいだろ！」

「それができたら苦労しないよ。僕にはこの京の都を守るといふ義務があるからね、都の外に一步も出ることができないんだよ」

「出たくないのは、ただ怖いだけだろっが」

「耳も悪いのかい？ この都を守る義務があるんだよ。だからこうしてここに出向いてるんじゃないか、バカだなあ」

二人がいがみ合ってる中、神経衰弱をやっていたポチが両手を挙げて喜んだ。

「やったー、一回も間違えないでクリアできたよ！」
マイペースだった。

このマイペースさを見て猿助も晴明も気が抜けてしまった。
気を取り直して晴明は部屋を見渡しはじめた。

「この部屋から邪気を感じるんだ」
「てめえの腹ん中からだろ」

吐き捨てた猿助を無視して晴明はポチのほうに近づいていった。
「君の近くから邪気を感じるな」

どう見てもポチは邪気ではなく無邪気の塊だ。
ポチは瞳を丸くして首を傾げた。

「うん、もしかして鈴鹿さんに預かってるこれですかあ？」
と、ポチが取り出したのは唐櫃だった。

中を開けると、のぞき込んでいた猿助が嗚咽を漏らした。
「キモチわりい」

晴明も眉をひそめた。
「腕だな」

そう、唐櫃に入っていたのは切断された腕だった。しかも鉤爪の
オプシヨン付きだ。

ポチは大きくうなずいた。
「うん、鈴鹿たんが持ってたって言ったんのお。取り返しにくるか
もしれないからって」

さらに晴明は眉をひそめて難しい顔をした。

「先ほどから名を呼んでいるいる『鈴鹿たん』とは『鈴鹿御前』の
ことか？」

「うん、ボクたちのお友達になったんだよお」
「……………」

一瞬、清明は動きを止めて、すぐに猿助の首根っこ掴んで部屋の隅に拉致した。

「どういうことかな、オサルくん？」

「いや……その……なんていうか……そうだ、きつと鈴鹿は心を入れ替えて善人になったんだよ、うん！」

「……まあいい」

じとーつとした目で猿助を見ていた清明だったが、深く追求せず、に掴んでいた首根っこを突き放した。

今は鈴鹿の話は置いておいて、邪気を放っている鬼の腕をどうにかしなければならなかった。

「とりえずその腕は僕の屋敷に運ぼう」

この言葉のニュアンスは『お前らのどっちかが運べよ』といことだが、ポチは元々ヒマを持って余していたし、猿助も桃のことなどがあつて、じつとしていると気が滅入りそうだったので、三人で清明の屋敷に向かうことになった。

宿屋からの道は清明の乗ってきた牛車で進んだ。

清明の屋敷に来るのはこれで二度目。依然と同じ板の間に通された。

祭壇に祀られている鏡はすっかり新しい物に変わっていた。

床の上に鬼の腕が入った唐櫃が置かれた。

腕組みをした清明は少し考えた後、とりえず唐櫃に御札でも貼ってみた。

処理がテキトーだった。

「まあ、とりえずこれでいいんじゃないかな」

これで終わりかよ………みたいね目で猿助は見ていた。

「おめえやるのが雑じゃねーか？」

「雑じゃないよ、こうして置けば邪気は外に漏れないし、鬼だつて簡単には開けられないんだからな！」

感心しているのはポチだけだった。

「安倍たんすごーい！」

手を叩いてはしゃぐ姿は、やっぱり無邪気。

さてと、用事も済んだし二人が帰ろうとしていると、この部屋に紫色の着物を着た切れ長の目をした女が入ってきた。

思わず猿助が声をあげる。

「うほっ、美人のねーちゃん！」

すかさず清明が持っていた笏で猿助をぶん殴った。

「僕のママだよ！」

「清明の母の樟葉じゃ」

紅色の唇から紡ぎ出された艶っぽい声。どこか妖々とした女だった。

樟葉は床に置かれた唐櫃に近づいた。

「これは何じゃ？」

清明が答える。

「はい、鬼の腕を封じてございます」

「ほお、鬼の腕とな。ぜひに見てみたい」

「ダメです」

「見せてたもう」

「ダメったらダメです」

「見たい見たい見たい見たいいっっ！」

「ダメったらダメったらダメですよ！」

子供が二匹いる。

駄々をこねる樟葉と同じように言い返す清明。

やっぱり親子なんだなあと猿助は感心した。

どうしても中身を見たい樟葉は強硬手段に打って出た。

なんと、自分の首に短刀を突き付けたのだ。

「見せてくれないなら死んでやる！」

慌てる清明。

「うわっ、ストップストップ！ 見せますから見せますっつてば！」

「本当？」

愛くるしい瞳で樟葉は見つめた。

仕方なさそうに清明は御札を剥がして封を解いた。

そして、唐櫃のふたを取った瞬間、樟葉が鬼の腕を奪って飛び退いた。

「この腕、返してもらったわよおん！」

その声は！？

樟葉はバツと着物を脱ぎ捨てると同時に変化を解いて正体を現した。そこに現れたのは、なんと茨木童子だったのだ。

茨木童子は奪い返した腕を元の場所に戻し、包帯をグルグル巻きにして固定した。

この場で大シヨックを受けている清明。

「ぜんぜん気づけなかった……だって性格もママそっくりだったんだ」

落ち込む清明は放置プレイで、茨木童子は両手に嵌めた鉤爪を鳴らした。

「あの憎つたらしいはいないみたいだけど、仕返しはちゃ〜んとさせてもらうわよあ〜ん。ついでに安倍清明の首も貰っていくわ！」

落ち込む清明、震えるポチ、仕方なく猿助が受けて立った。

「忍法隠れ身の術！」

すでに戦うこと拒否。

周りの背景に溶け込む布をかぶった猿助はじつと身を潜めた。が、いきなり蹴っ飛ばされた。

「なんでフローリングに石壁があんのよ！」

「ぎゃっ！」

猿助はケツを押さえながら飛び上がった。どーしょーもなく役立たず。

隠れ身の術に失敗した猿助は懐に手を突っ込んだ。

「こつなつたら鎖鎌……がねえ！ しまった宿屋に置いてきちまつた。だつたらじつちちゃんの形見のクナイ……もねえ！」

さらにどーしょーもなく役立たず。

あまりの猿助のダメっぷりに茨木童子は攻撃を仕掛けることすら

忘れてしまった。

「こんなのがいる一行に温羅が倒されたなんて……アレって誤報だったのかしらあん？」

メンバー内からも猿助は戦力外通知を受けてますから。ため息を漏らした茨木童子は猿助の横を素通りした。

「アンタめんどくさいから後回しにするわ」
存在自体がめんどくさい。

そして、茨木童子が立ったのはしゃがみ込んで震えるポチの前だった。

「こつちの可愛い子犬ちゃんから頂こうかしら、おほほ」

鉤爪をナイフとフォークのように鳴らし、茨木童子は艶やかに舌舐めづりをした。

ポチは震えたまま逃げようとしめない。

焦った猿助が駆けた。

「ポチ！」

叫んだときには遅かった。

振り下ろされる鉤爪。

とつさにポチが身を守ろうとして出した自らの腕が鮮血を吹いた。腕を押さえて泣きじゃくるポチ。

「痛いよお、痛いよお、うえ〜ん！」

「次はどこを切り刻んであげようかしら？」

迫り来る茨木童子。やはりポチは動けずにいる。

猿助は茨木童子の背中に飛びかかった。

「てめえよくもポチを！」

「キーキーうるさいわよっ！」

鉤爪が猿助の頬を引っ掻いた。

思わず痛みで猿助は茨木童子の背中から落ちて、頬を押さえながら床を転がり回った。

すすり泣く声。

肩をしゃくり上げながら震えるポチの背中。

今まで役立たずだった晴明がやっと復帰した。

「……僕が落ち込んでいた間に……なんだこれは!？」

激しい邪気が宙を泣き叫びながら飛び交っていた。

驚きを隠せない茨木童子も襲い来る黒い風を鉤爪で追い払っていた。

「なんなのよこれ!」

恐ろしい黒い風。

鼓膜を振るわず咆吼があちこちから聞こえた。

威嚇するような狗の鳴き声。

黒い影を背負いながらポチがゆらりと立ち上がった。

「……許さないんだから」

さらに黒い風が強く吹き荒れた。

「……許さない」

邪気を口元に浮かべ振り向いたポチの体から、大量の黒い風が吹き出した。

荒れ狂う黒い風。

晴明が叫ぶ。

「逃げる狗神だ!」

咆吼で世界が震え上がり、黒い風が茨木童子に襲いかかった。

形のない敵を相手に鉤爪を振るうが、逆に茨木童子の体はかまいたちに切られたように、いや、それよりも無惨な傷。鋭い牙で噛み千切られ八つ裂きにされる。

全身から血を噴いた茨木童子は後退した。

「覚えてなさい!」

キリキリと叫び声をあげて茨木童子は逃亡した。

すーっとポチの全身から力が抜け、ゆっくりと床に崩れ落ちた。

瞬きもせずすべてを見ていた猿助は、床に尻餅をついて股間からチビらせていた。

「あがつ、ああつ……あれ……なananだよあれっ!」

すでに黒い風は消えている。

晴明はびつしより汗を掻いて床に這い蹲った腰が抜けていた。

「オサルくん、ちよつと話があるんだけど？」

「な、なんだよ!？」

「あれは狗神と言って、とても強力な呪術なんだ。狗神というのはね、術者がちよつとムツとしただけでも、相手を八つ裂きにする恐ろしいものなんだ。わかるよね、これから絶対に彼を怒らせたらダメだからな、命がないぞ？」

「お、おう!？」

猿助はコクコクとうなずいた。

酒吞童子編 5

呉葉を連れた雉丸が宿屋に戻ってきた。

さつそく呉葉は病室に入り桃の容態を診ようとしたが、その前にまずは猿助の前に立った。

「まずはキミからよ。いち、にの、さん！」

と、同時に呉葉は猿助の頬に張られていた絆創膏を剥がした。

「いてっ！」

「はい、痛いの痛いの飛んでいけーっ！」

呉葉は猿助の傷に檜扇を翳した。すると鉤爪で抉られた傷がパツと消えた。

次に呉葉は同じ部屋で寝ているポチの容体を診た。

腕に巻かれていた包帯を取り、また同じように檜扇を翳した。

「痛いの痛いの飛んでいけーっ！」

するとポチの腕にあった鉤爪の傷も消えてしまった。けれど、まだポチは目を覚まさない。

呉葉は心配を拭う笑みを浮かべた。

「この子はちよつと疲れて眠っているだけだから大丈夫。しばらくすれば目を覚ますわ」

最後に残されたのは桃だった。

すでに桃の傷は鈴鹿が完治させている。問題は覚めぬ眠り。

呉葉は桃の傍らに腰を下ろし、やはり檜扇を翳した。つま先から頭の先まで、ゆっくりと檜扇を動かした。

桃は目覚めない。

すでに呉葉の能力は猿助とポチで実証されている。その力を持つとしても目覚めない。

呉葉は少しも険しい顔を見せず、穏やかな表情で桃の手を握った。「とても冷たいわね。まるで死んでいるよう」

昨晚までは苦しそうな顔をして大量の汗を掻いていた桃だったが？

ずっと看病をしていたかぐやが説明する。

「今朝方くらいから急に体温が下がりはじめた。それだけじゃないの、見て、なんだか年取ったように見えない？」

桃の目尻や口元に見える皺。呉葉の握る手もカサカサでやせ細っている。一〇も二〇も年老いたように見える。

そんな年老いた桃を見て一番ショックだったのは猿助だった。

「姉貴のナイスボディが失われるなんて、オレは絶対にイヤだぜ！あの爆乳も少し縮み垂れはじめてしまっている。

元から白銀の髪は桃だが、今はそれがただの白髪にしか見えない。呉葉は結論を出したようにうなずいた。

「あなたたちにどう説明するべきか、生命の源が断たれているというのかしら。全身を巡る血管のようなものが、切断されていると言えはわかるかしら？」

だから急速に年老いているというのか？

尋ねたいのはそれを治療する方法だ。

雉丸は真摯な瞳で呉葉を見据えた。

「どうすればいいのですか？」

「そうね、未来の花嫁さんだものね、必ず助けなくていけないわ。その言葉に聞き捨てならない一匹が即座に反応した。

「未来の花嫁って何だよ！？」

猿助が噛みついた。

すぐに雉丸が猿助の口を驚つかみにした。

「話がややこしくなるから黙ってる。母上、それでどうすれば桃さんを治せるのですか？」

「生命の源を注入すれば治るのだけど……難しいわね。それは死者蘇生のようなもの、たしか不老長寿を研究している仙人がいると聞いたことがあるけれど、その人ならもしかして。名前はたしか……

…ハゲ仙人？」

「ハゲ仙人とはコレのことでしょうか？」

その声は鈴鹿のものだった。

鈴鹿はハゲ頭の仙人の首根っこを掴んで前に突きだした。

「ヤッホー、おぬしら元気にしとったか？」

ハゲ仙人じゃなくて亀仙人だった。

猿助はどつと疲れたようにため息を吐いた。

「こいつ……生きてたのかよ、しぶといな」

殴る蹴るの拳げ句、滝壺に落とされて死んだと思われた亀仙人。

図太い生命力で見事復活していた。

亀仙人は誇らしげに笑って懐から何かを取り出した。

「わしは毎日これを食べてるので、精力旺盛若いもんには負けはせん！」

それは桃だった。瑞々しくとても美味そうだ。

でも、だからその桃がどーしたんだって話だった。

しかし、この桃はただの桃ではないのだ！

亀仙人は桃を天高く掲げた。

「これはわしが人生のすべてを投げ打って開発しておる不老長寿の桃（失敗作）じゃ！」

失敗作かよっ！

期待が一気に谷底に落とされた気分だ。

亀仙人はしみじみと語りはじめた。

「あれは熱い夏の日のことじゃったか。海辺でガキンちよに苛められてる亀を助けてやったんだが……」

撃鉄を起こす音がして、雉丸のリボルバーの銃口がハゲの眉間に突き付けられていた。

「長くなるなら結論から言え」

「まあまあそう焦るな。話を割愛すると、唯一の成功作の不老長寿の桃を作ったわしは、それを食おうと川で洗っておいたら、なんたる不幸か桃を川に流してしまつて、探せど探せど見つからず、わしは首を吊つて死のうとまで考えたのじゃが……」

猿助までもクナイを握つてハゲに突き刺そうとしていた。

「てめえの身の上話はいいんだよ、姉貴を治せるの治せないのか言

えよ！」

「失敗作といえど、これはわしが作ったものじゃぞ。たちどころに精力旺盛になるわい！」

「それだけ聞けば結構です。」

グサつとクナイがハゲに刺さった。

「ぎゃあああつ！」

頭からピューピュー血を噴きながら亀仙人は転げ回った。でも、すぐに呉葉が『痛い痛い飛んでいけーっ！』と治してしまった。さつそく桃の皮を剥き、食べやすく一口に切ると、かぐやが桃の口に運んだ。

口の中に落とされた桃は、蕩けてるように喉の底に落ちていった。微かに桃の脛が痙攣した。

張りを戻して弾む爆乳。

仁王立ちする引き締まった美脚。

脂の乗った尻に食い込むふんどしTバック！

桃は両手を天井高く伸ばした。

「ふわぁ〜よく寝た」

首をポキポキツと鳴らして桃はしばらく動きを止めた。

見知らぬ女が一人。

「誰だてめえ！」

「雉丸の母です」

もう一人の見知る女。

「てめえがなんで!？」

「妾が貴女をお助けしたと言っても過言ではございませんのよ」

呉葉と鈴鹿とご対面。

桃は鈴鹿に殴りかかろうとしたが、それを必死になって雉丸と猿助が止めた。

そんなこともありつつ、暴力沙汰にならずに示談交渉で一段落した。

そして、話は茨木童子に及び、桃は豪傑に笑った。

「その喧嘩、買ってやるうじやないか！」
こうして桃たちの次の目的地が決まった。
いざ、酒吞童子の棲む大江山へ！

酒吞童子編 6

鉄の城門の前で黒いふんどし鬼が門番をしていた。

「なんだお前たち、酒吞童子さまの城にノコノコやってくるとは良い度胸だな」

口元を布で隠す爆乳ベリーダンサーが前に出るのを制止させて、横にいたマジシャンハットの男が眼鏡を直しながら口を開いた。

「私たちは旅芸人です。道に迷ってここにたどり着いてしまったのです」

雉丸の声だった。

バニーガールの格好をした不機嫌そうなかぐやもいる。となると、ベリーダンサーは桃だろう。

扮装した三人。あとは荷車に積まれた大きな葛籠が二つあった。

鬼は桃の体を舐め回すように視姦した。

「女とガキは召使いとして生かしてやろう。だが、男はここで血祭りにあげてくれる！」

緊迫した空気が流れ、雉丸はリボルバーを隠しているマジシャンハットに手をかける寸前だった。

だが、ここに新たな鬼が現れ状況は一変した。

「お待ち！」

紅梅のきながしを着た茨木童子だった。

「旅芸人なんておもしろそうだわあん。とりあえず通して酒吞童子さまにご意見を伺いましょう」

こうして桃たちは城の中へ案内されることになった。

中は城と言ってもとは洞窟だったらしく、要塞という表現のほうが正しいかもしれない。

トラ耳の鬼たちの他に、若い人間の娘たちの姿も数多く見受けられた。おそらく無理矢理ここに連れ来られ、働かされているのだろう。

廊下を先に進むにつれて、生臭い風、甘い女の香、そして酒の臭いが漂ってきた。

茨木童子の案内で通された部屋。

その部屋の奥に立て膝をついて座っている褐色の上半身裸の鬼。片手には酒壺、両脇には若い娘、首にも娘が抱きつき、肌と肌をすり合わせていた。

それが一目で酒呑童子だと知れた。

引き締まった肉体。鼻梁の下で笑う形の良い口から覗く八重歯。

そして、女を虜にする鋭い眼で酒呑童子は桃たちを見た。

「何者だ？」

その声を聞いたとたん、周りにいた女たちは体を痺れさせ、目をとろんとさせてしまった。

茨木童子が恭しく頭を下げて答える。

「道に迷った旅芸人だそうですね。酒呑童子さまがお喜びになると思っ、ここまで通して参りました」

「なかなかおもしろい格好をした者たちだな、酒の肴にちょうど良い。おい、オレ様に何か芸を披露しろ。おもしろければその男も生かしてここに置いてやろう」

では、さつそく。

雉丸は用意した輪に火を点け、桃はかぐやの首根っこを掴んで酒呑童子に軽く会釈をした。

「これからとっておきの芸をご覧にいれましょう。今からのこのバニーちゃんが見事、燃えさかる火の輪をくぐれたら拍手喝采、くぐれなかったときはご愛敬」

この展開にデジャブを感じたかぐやが叫ぶ。

「ちよつと、まさか投げる気じゃ!？」

「うおりゃーっ!」

かぐやロケット発射!

「ぎゃあああっ!」

放たれたかぐやは火の輪にグングン近づき……燃えた。

見事に火の輪にぶつかつたかぐやのウサ耳に火が付いて、顔面を蒼白にしながら床に転げ回つた。

「熱っ熱っ熱っ！」

すぐさま雉丸がバケツの水をかけて消火終了。

びしょ濡れになつて力尽きているかぐやを見て、酒吞童子は床を叩いて大喜びをした。

「あははははっ、なかなかおもしろいぞ。他にももつとあんだろ、どんどん見せる」

続きましては息絶え絶えのかぐやを板に磔にして、雉丸がダーツの矢を構えた。それもまとめて八本、指に挟んだ。

桃だけでなく、雉丸までそんなことするなんて……。

「己ら我を殺す気かボケツ！」

かぐやが威勢よく叫んだ次の瞬間には青ざめていた。

ビュン、ビュン、ビュン……！

連続して放たれたダーツはかぐやの股の下から耳の横、ギリギリのところ突き刺さつた。

そして、最後に桃が一本のダーツを構えていた。

「アタイも一本投げようかね」

「アンタは投げるなボケツ！」

ツバを飛ばしながらかぐやは叫んだ。だが、口で止めたくらいじゃ止まらない。だつて桃だから。

野球の投球フォームから、剛速ダーツが投げられた！

ズゴオオオツ！

明らかに風を切るダーツの音が違う。

「ぎゃあああつ！」

ガシツ！

な、なんとかぐやは歯でダーツを受け止めた！

すぐにかぐやはダーツを吐き捨てた。

「ペツ……マジで殺そうとしたやつがなクソババア！」

とても芸とは思えない迫真の演技(?)だ。

それを見て酒呑童子は腹を抱えて大笑いした。

「あはは、あはははははっ、愉快愉快。てめえら最高におもしれーな、オレ様の城で飼ってやろう！」

好感度も上げられ相手の信用を得たところで、雉丸は葛籠の中から酒壺をいくつも取りだして見せた。

「これは都でも評判の酒です、どうぞお受け取りください」

酒と聞いて酒呑童子はさらに機嫌をよくした。

「なかなか気が利くじゃねーか。よーし、宴だ宴の準備をしろ！」
さっそく宴会の準備がされ、人間の女たちが次々と料理を運んできた。

仕事をしていた鬼も次々と姿を現し、宴は華やかに行われた。

酒を浴びるように呑む鬼どもは臭い息を吐きながら上機嫌だが、お酌をしながら抱き寄せられる人間の娘たちは悲しげ表情を一様に浮かべている。

今回はただ鬼どもをぶっ倒せばいいというものではない。取られえられている人間の娘たちも無事に救出しなければならなかった。そのため、いつものように桃が大暴れしては娘たちが危ない。

酒呑童子は桃を近くに呼び抱き寄せた。

「オレ様が見てきた中でもおめえが一番好い体してやがる。その布を取って素顔を見せてくれねーか？」

「見たいなら自分で取ってみな」

眼が笑ってない。いつボロが出てもおかしくない。

自分を前にしても強気な桃に酒呑童子は八重歯を覗かせ嬉しそうに笑った。

「気が強そうだな、そういう女好きだぜ」

酒呑童子は桃を押し倒して襲ってきた。

しかし、桃は瞬時に足で酒呑童子の腹を蹴り上げて投げた。

宙を舞った酒呑童子の姿を見て、部下の鬼どもは息を呑んで一瞬にして場が凍り付いた。

腹心の茨木童子が鉤爪を抜いて桃に飛びかかろうとした。

だ。
。

「待て！」

酒呑童子の一喝で茨木童子は身をすくめた。

腹を押さえながらゆっくりと立ち上がる酒呑童子。

「その女に手を出したら八つ裂きにするぞ。その女はオレ様の妻にするよと決めた」

その言葉を聞いた茨木童子は憎悪に満ちた顔をして桃を睨みつけた。だが、鉤爪をそっとしまつて、奥の席に消えていった。

桃は酒呑童子を力強い眼で見据えた。

「ほう、アタイを妻にしたいなら、力づくでどうぞ」

「あはははっ、やはり好い女だ。今すぐに力づくでやってやってもいいが、今は酒を楽しもう。そのあとでじっくり相手をしてやるう」
こうして危機は一つ去つた。あのまま桃が暴れ出してしまつたら、すべて計画は水の泡だ。

酒はどんどん進み、見覚えのある黄色いふんどしの巨漢が、男らしい舞を披露した。

それが鬼イエローだと気づいた雉丸は、すぐにシルクハットを深くかぶつたが、桃は堂々と鬼イエローの横に出た。

桃は物干し竿を手に取り、物干し竿を地面に突き刺しポール見立て、ポールダンスを披露した。

その艶やかな肉体を駆使した桃の激しい踊りに、鬼は一斉に歓声をあげて鬼イエローのことは大バッシング。

桃は手を滑らせたフリをして、物干し竿で鬼イエローの股間を激しく強打した。

「あら、ごめんよ」

泡を吐いて鬼イエローは気絶した。さらに歓声があがった。

楽しそつに桃の踊りを見ている酒呑童子に酒を持った雉丸が近づいた。

「男の酌で申し訳ありませんが、ぜひお近づきの印に一杯どうぞ」
「ありがたくいただきます」

大皿に注がれた酒を酒呑童子は一気に飲み干した。

雉丸はさらに酒を勧めながら尋ねる。

「酒呑童子さまの盗賊団は鬼の中でもっとも残虐で、多くの人間を殺しているとお聞きしましたが？」

「ん？ 失敗するな、てめえらのことは気に入った。変な気さえ起こさなきゃ殺したりしねーさ」

「人間がお嫌いですか？」

「大っ嫌いだな。ここに居る若い娘は別だがな」

酒呑童子は脇に抱えている人間の娘を抱き寄せた。

さらに雉丸は酒を注いだ。

「どうしてそんなに人間がお嫌い？」

「もっと若いころに裏切られたからか……いや、裏切るもなにも奴らは最初っからオレ様のことを殴んだ眼で見てやがった。人間つーのは鬼を見ればすぐに逃げるか殺そうとしてくる、奴らは鬼が怖いのだ」

「それは鬼が人間を殺すからではありませんか？」

「それは違うな、もしも鬼が手を出さなければ……現に先に手を出したのは人間のほうだって話だぜ、遠い遠い今じゃ鬼の誰もが覚えてねえ昔の話だけだよ。人間は鬼を恐れてる、それは鬼が自分たちよりも優れた存在だからさ。力も度胸も、人間の持つてねえ技術だって鬼はたくさん持つてるんだぜ、多くはとうの昔に失われちゃったらしいけどな」

饒舌にしゃべる酒呑童子は、今度は雉丸に酒を勧め、さらに話を続ける。

「知ってるか人間？ オレ様たち鬼の祖先は遠い遠い空の向こうから降って来たんだと。まるでおとぎ話みてえな話だけだよ、浪漫があっつていいじゃねえか。オレ様もいつかは空の上に行って、天界のやつらにご挨拶でもしてみてえーもんだぜ」

そう言って酒呑童子は笑った。

宴は何時間もの間続き、鬼どもの中にその場で眠りこける姿がち

らほら見えはじめた。

やがて酒呑童子も呑み疲れたのか奥の部屋に姿を消してしまった。
宴は不気味にまで静かに終わりを迎えた。

酒呑童子編 7

桃は辺りを見回した。

「鬼どもはみんなおねんしたかい？」

起きている鬼は誰一人いない。

すでにシルクハットを脱ぎ捨てている雉丸は、葛籠を開けて合図をした。

「サル出てこい」

さらに他の葛籠の開けた。

「ポチ、出ておいで大丈夫だよ」

態度が違いすぎ。

猿助が勢いよく葛籠から飛び出した。

「つたく、どんだけ閉じこめて置くんだよ！」

続いてポチがあくびをしながら出てきた。

「ふわあゝ、もう朝あ？」

茨木童子に顔を見られている二人はずっと葛籠の中に身を潜めていたのだ。

鬼どもはまったく起きる様子を見せない。桃はためしに近くで横たわってる鬼のケツを蹴っ飛ばしたが、やはり起きる様子はなかった。

「ハゲ仙人にもらった毒酒が効いたみたいだね」

ここに来る前、桃たちは亀仙人から必勝アイテムを授かっていた。その名も“神使鬼毒酒”と言い、鬼には毒となるが、人間には無害の酒だった。

その酒を受け取った桃は信用してなかったが、成果はこの通り鬼どもはすっかり毒牙にかかった。

「サルとポチ、雉丸はさつさと娘たちを全員連れて逃げな」

桃が命じると猿助が愚痴をこぼした。

「せっかく我慢して隠れてたのに、出番はこれだけかよ」

「文句言ってんじゃないよ、娘たちを助ける一番美味しい役所じゃないか」

「言われて見れば、ウキキ」

猿助は鼻の下を伸ばした。単純だ。

さつそく猿助とポチは娘たちを連れて逃げる手はずをはじめたが、雉丸だけは。

「俺は桃さんと一緒に残ります。酒吞童子との決着を最後まで見届けます」

こうして二手に分かれ別行動を取るようになった。

桃と雉丸は酒吞童子が消えた奥の部屋に足を踏み入れた。

横になっっている酒吞童子。毒が効いているはずだが、二人が部屋に踏み込んだ瞬間、俊敏に飛び上がって鋸刀を抜いた。

「おめえら……クソ……躰が痺れて動かかねえ」

鋸刀を杖代わりに酒吞童子は片膝を地面についた。

物干し竿を背中から抜く桃。

「さすがは最凶の鬼、毒を盛られても目を覚ますとはねえ」

「毒だと……おめえら！」

酒吞童子は痺れる躰に鞭打って凜と立ち上がった。

瞬時に桃たちを敵と判断して酒吞童子が斬りかかって来た。

鋸刀と物干し竿が激しくぶつかり合う。

力と力のせめぎ合い。どちらも一步も引かず微動だにしない。

酒吞童子の片手が柄から離れ、瞬時に桃の口元を隠していた布を剥ぎ取った。

その一瞬、物干し竿の力が勝り振り下ろされたが、すでに酒吞童子は布を持ったまま飛び退いていた。

酒吞童子は布の臭いを嗅ぐとすぐに投げ捨てた。

「やっぱり好い女だったな。まだ名前を聞いてなかったか？」

「ジパンゲーの絶世の美女 桃ねーちゃんとはアタイのこった！」

「お前が噂の女か。聞くよりもずっと美人だぜ！」

鋸刀が力任せに薙ぎ払われた。

物干し竿がそれを受けた。

「そつちこそいい男だよ、鬼にしとくのはもつたいない！」

こちらも力任せに物干し竿を振り下ろした。

負けじと鋸刀が受けた。

「約束は覚えてるか、力づくで妻にするって、なっ！」

轟々と風を斬る鋸刀。

「おう、やれるもんならやってみな！」

大地を割る物干し竿。

二人の気迫を阻むことは誰もできない。雉丸が銃を抜くことも躊躇われた。

地面を蹴り、宙を舞い、豪快に武器を振るう。

戦いながら二人は移動して、自然と酒呑童子の部屋を出て、宴会が行われた大部屋にやってきた。

ここで酒呑童子は愕然とする。

家来の鬼が全滅している。

「情け容赦ない……おめえらを信じていたのに、この仕打ちか！」

鬼とてこのような卑怯な真似はしねえぞ！」

「てめえのやって来たことを棚に上げてんじゃねえよ！」

桃は言い返した。

さらに雉丸も静かに言葉を吐く。

「時には無力な女子供まで手にかけて、若く美しい娘は連れ帰り……。腹違いとはいえ、これが俺の弟か、さらに俺はこの世に絶望した」

この言葉に眼を剥いたのは酒呑童子のみならず、桃までも戦う手を休めてしまった。

腹違いの弟？

それは桃よりも酒呑童子のほうが衝撃だったかもしれない。

「どついつこつた？」

尋ねる酒呑童子に雉丸は深く息を吐きながら答える。

「そうかお前は聞かされていないのか。俺も八面大王の息子だ」

しかし、雉丸の姿はどこからどう見ても人間。

鬼の中には変化の術に長けているものもいるが？

ここまで打ち明けたら、さらに話さなくてはいけないことがある。雉丸は桃に顔を向けた。

「桃さん、俺たちがはじめて逢ったときのこと覚えてますか？」

「どうだったかねえ」

「重傷を負った俺を助けてくれたのは桃さんでした。あのとき俺は正体がバレて“人間”に追われていたんです」

同じ父を持つと聞いても簡単に納得できる酒吞童子ではなかった。「おめえには耳も尻尾もねえ、変化の術もそうそう長く化けるもんでもねえだろ。どこが親父の息子なんだよ？」

「八面大王は変化の術に長けていますが、見た目以外は母の血を強く引いたらしく変化の才能は皆無でした。できてもやはり長く化けるものじゃないでしょう。俺の母は人間です、つまり俺は酒吞童子とは違って半妖でした」

「だから耳も尻尾もねえのか？」

「見た目以外はと前置きしたハズです。俺はちゃんとトラ耳と尻尾を持って生まれてきましたよ。だから耳と尾は自ら引き千切りました。しかし、一カ所だけどうにもならない場所が……この眼鏡って伊達だったんですよ、過去の自分を隠すための変装とでもいうんでしょうかね。そして……」

雉丸は眼鏡を胸のポケットにしまい、さらに眼球に指を当てて黒いコンタクトレンズを外した。

「眼の色だけを変えることができませんでした」

黄色く輝く瞳。その瞳は鋭い鬼そのもの。同じ鬼ならばなおのこと、それが鬼の眼だとわかるだろう。

どちらでもない存在はどちらの仲間にも入れてもらえない。

雉丸は鬼を捨てたかった。

鬼の子と知って桃はどう思うか、雉丸はゆっくりと桃に顔を向けた。

「桃さん、酒吞童子を倒したあとに俺も倒しますか？」

「あんたべつに財宝とか貯め込んでないだろう？」

「あはは、そうですね」

それだけで十分だった。これからも何も変わらず雉丸は桃についていく。

雉丸はリボルバーを抜いて銃口を酒呑童子に向けた。

その行為に酒呑童子は八重歯を覗かせ笑った。

「弟を殺すのか？」

「その点は鬼の血を引く外道だからな」

その口調には棘がある。先ほどまでの説明は酒呑童子ではなく、桃に聞かせるためのもの。今の言葉は完全に酒呑童子へ向けられた言葉だった。

桃はリボルバーの前に出た。

「でも半分は人間だろう。こいつの相手はアタイがするよ、妻になるって約束もあるしね」

「桃さん……」

桃と酒呑童子が退治する。それを見守る雉丸。

そして、第四の影が現れた。

「ならその銃使いの相手はアタクシがしようかしらあん？」

鉤爪を鳴らす茨木童子。

さすがは酒呑童子の腹心、毒に完全に屈することなく復活したのだ。

さらに五人目の声が響き渡った。

「己らさつきから叫んでるの聞こえんのかいポケツ！」

磔にされたまま、喉を枯らしているかぐやだった。

どうやら何時間もの間、ずっとそのまま放置されていたらしい。

しかも、本人いわく、叫んで助けを呼んでいたらしい。哀れだ。

でも、やっぱり放置プレイ。

雉丸の銃弾を鉤爪で弾き返す運動能力を見せる茨木童子。

桃の物干し竿を八重歯を覗かせ笑いながら受ける酒呑童子。

どちらの鬼も手強い。

熾烈な激戦が続く。

茨木童子のかわした流れ弾が酒呑童子に飛んだ。

「酒呑童子さま！」

「案ずるな！」

キン！

金属音を鳴り響かせながら鋸刀の平で銃弾を受けた。

銃弾に気を取られていた酒呑童子にすかさず物干し竿が振られた。物干し竿を腹に喰らって後方に大きく飛んだ酒呑童子。腹の肉が少し抉れていた。

「ただの竹竿じゃねえな」

「気合いが違うのさ」

桃の物干し竿を扱えば、それは強靱な武器となる。だが、やはり物干し竿。刃であれば今の一撃で酒呑童子は真っ二つになっていたはず。

「どうして竹槍なんかで戦ってる？」

当然の質問を酒呑童子は投げかけた。

「竹槍じゃなくてウチから持ってきた物干し竿だよ」

「あははっ、物干し竿なんかに負けたら末代までの恥だな」

「仕方ないだろう、先端恐怖症だから刃物が扱えないんだよ！」

意外な弱点発覚だ！

酒呑童子にも弱点はないのだろうか？

代わりに雉丸は茨木童子の弱点を見いだしていた。それは酒呑童子の足を引つ張ることになるかもしれない。

酒呑童子が桃に仕掛けた瞬間、その背中に雉丸は銃弾を放った。

すぐさま茨木童子は酒呑童子の前に立って銃弾を自ら受けた。

「くっ……外道め」

銃弾は茨木童子の手に握られていた。

大きく穴の開いた手のひら。銃弾はその先の甲を覆う鉤爪の一部の金属で止まっていた。

茨木童子は命を投げ打って酒呑童子を庇う。

ならば。

茨木童子は桃に向かって走り出した。

「毒には毒よっ！」

桃を庇おうと雉丸が駆ける。

「桃さん！」

ショットガンで鉤爪を受けた。だが、すぐに茨木童子は天井高く飛翔し、背後から現れた酒呑童子が鋸刀を薙ぎ払った。

すぐに後ろに飛んだ雉丸は桃に受け止められながら、ショットガンを空中の茨木童子に向かって放った。

血を口から噴く茨木童子。その腹を貫通した弾丸が天井を穿つ。

地に落ちる茨木童子を酒呑童子が受け止めた。

同じように雉丸を受け止めている桃。

「大丈夫かい雉丸？」

「半分鬼ですから、生命力には自信が……俺はいいですから酒呑童子を……」

雉丸の腹は見るも無惨に引き裂かれていた。

桃は雉丸を床に寝かせて物干し竿を力強く握った。

「うおおおっ！」

天高い位置から物干し竿が振り下ろされた。

酒呑童子は茨木童子を抱きかかえたまま鋸刀で受けた。

しかし、刹那 鋸刀が折れた。

間を置かず酒呑童子は鋸刀を捨てて、茨木童子を肩に担いで逃げ出した。

「逃げるなんて男の恥だが、仲間の命には代えられないんでな！」

疾風のごとく逃げ去る酒呑童子たち。床に倒れる雉丸は無言でその背中を指差した。桃は深く頷き雉丸を置いて酒呑童子たちを追った。

そして、もう一人残されたどっかの誰かさんが叫ぶ。

「だからかぐやを放置すんなポケット！」

虚しく木霊した。

酒呑童子編 8

城内を飛び出し、険しい崖道を逃げる影を追う桃。すでに空は夕暮れから夜に移り変わるうとしていた。

東の空から徐々に闇が覆いはじめる。

酒呑童子たちの他に前方にいくつかの影が見えた。

猿助、ポチ、色取り取りのふんどしの鬼たち。

その真横を見向きもせず酒呑童子たちが駆け抜け、猿助たちは啞然とした。

さらにその後から桃がやってくる。

「てめえら、なんでまだここにいんのさ！」

すぐ言わないと殺される緊迫感。

猿助は早口で三秒以内にまとめた。

「ねーちゃんたちは逃がせたけど、こいつらが俺らの邪魔して！」
赤、青、緑、黒……黄色が欠員。未だに全員がそろったところを見たことがない。

紅一点の桃が物干し竿を烈風のごとく振りしました。

鬼レンジャーたちが宙にぶっ飛ばされた。ついでに猿助とポチまで飛んだ。

「なんでオレまでーっ！」

「うわあ〜ん、高いの怖いよお」

今はそれどころではないので桃は急いで酒呑童子たちを追った。

そして、ついに断崖絶壁で桃は酒呑童子たちを追い詰めた。

地平線の彼方では陽が沈もうとしている。

酒呑童子は茨木童子を地面に下ろし、丸腰のまま仁王立ちした。

「武器を持たねえオレ様とやるか？」

「武器ならてめえの拳があるだろう？」

「そりゃそうだ」

八重歯を覗かせ桃に立ち向かおうとする酒呑童子の足に茨木童子

が抱きついた。

「お待ちください、アタクシが戦います」

穴の開いた腹を押さえながら茨木童子が立ち上がった。その眼は鋭く闘志は消えていない。しかし、躰がよろめいた。

足のもつれた茨木童子を酒呑童子が抱きかかえた。

その様子を見ていた桃は言う。

「なんなら二人で掛かっておいで」

酒呑童子は首を横に振った。

「妻にするって約束がまだあんだろ。二人ががりて倒しても意味がねえ」

そう言って、酒呑童子は抱きかかえている茨木童子の手から鉤爪を奪った。

「お前の魂を借りるぜ」

「……酒呑童子さま」

茨木童子にはもう戦う余力は残っていない。

どちらも陽が沈む前に決着をつける気だった。

漲る闘志。

この一撃にすべてを込める。

先に仕掛けるのは誰か？

戦いの合図は何か？

対峙する猛者は互いに笑った。

「ウオオオオオッ！！」

怒号は大地を震わせ、その声は風に乗ってどこまでも鳴り響いた。

一時、刻は忘却された。

その刻を戻したのは茨木童子が呑んだ息の音。

刹那 酒呑童子は八重歯を覗かせ笑った。

「オレ様の負けだ」

その腹を貫いている長く伸びた竹。

滴る血が竹を握る桃の手まで伝わった。

憎悪に支配された茨木童子が地を這い蹲ってでも桃に襲いかかる

うとした。

「殺してやる！」

しかし、涼しげな酒呑童子の声が風に乗る。

「やめておけ、陽が沈む。オレ様の命も消えようか……」

「卑怯な卑怯な……酒呑童子さまが万全であればキサマなどに！」

「そういうな茨木童子。勝負は時の運、ただ運が悪かっただけのこと……これは返すぞ！」

歯を食いしばりながら酒呑童子は物干し竿を抜き、大きく後ろによろめいた。

勝ったというのに、桃は悔しそうに酒呑童子を睨みつけていた。

「どうして手を抜いたんだい！」

「あはははっ、妻にしたい女を傷つける奴がいるか」

八重歯を覗かせながら酒呑童子はさらによろめき、そのまま崖に足を踏み外した。

「酒呑童子さま！」

茨木童子が叫んだ瞬間、酒呑童子はまるで自ら身を投げたように背中から谷底に呑み込まれた。

すぐに茨木童子も酒呑童子を追って身を投げて消えた。

暗い暗い谷の底。

桃は背を丸めて底を眺めたが、何も見ることはできなかった。

軽く舌を打ち桃は天を見上げた。

「まったく後味が悪ったらありゃしないよ」

陽は落ちた。

スペースかぐや編 1

酒吞童子がやられたという噂はジパング各地を巡り、しばらくの間は怪物も身を潜めていた。だが、今は逆に温羅や酒吞童子の二強がいなくなり、その座を巡って怪物どもは前にも増して活発に暴れている。

そんな世の中、桃は今日も呑気に昼寝をしていた。

猿助が桃の体を揺さぶった。

「姉貴、そろそろ怪物どもをドドーンと退治に行こうぜ、なあ？」

「うっさいねえ、行きたきゃあんた一人で行きやいだらう？」

酒吞童子を倒したあとから、桃はずっとこんな調子で宿から一歩も出ていない。簡単にいうとヒツキーだった。

怪物退治で集めた蓄えならいくらでもある。この生活を続けようと思えばいつまでも続けられてしまう。別に遊んで暮らしても大丈夫くらい財宝を蓄え込んでいる。

桃がいる部屋を出て猿助は隣の部屋に移動した。

その部屋には雉丸、ポチ、かぐや、いつもの面々が揃っている。

雉丸が猿助に尋ねる。

「桃さんの様子はどうだった？」

「いつもと同じ。あのままじゃブタになっちまうぞ」

雉丸にハグハグされているポチが驚いた顔をした。

「人間って怠けるとブタに変身しちゃうの!？」

見事に全員聞き流した。

桃に何があったのか誰にもわからない。聞いてもめんどくさそうに答えてくれない。

ただわかるのは、酒吞童子を倒してから、ずっとあの調子ということだ。

かぐやが何かひらめいて手を叩いた。

「きつとアレは恋だわ!」

「それはみんなの後押ししなくてはいけませんわね！」

と、声をあげながら部屋に飛び込んできたのは鈴鹿だった。

鈴鹿は部屋に入って来るなり猿助に抱きついて頬をスリスリ。

「ダーリンの失恋の痛手は妾が癒やして差し上げますわ」

「失恋なんかしてねーよ！」

ムキになつて猿助は怒った。

ラブラブハートのカップルが二組。

雉丸は酒呑童子の一軒以来、なぜかポチにたいする溺愛っぷりが目に見えて激しくなった。

一人取り残されているかぐやはぼーっと窓の外を眺め……眺め……瞳孔を開いた。

「何アレっ！」

窓の外に広がる火の海。

京の都が華やかに滅亡の危機にあつた。

鈴鹿がポンと手を叩いて思い出した。

「あ、そういうえば、そのことでここに駆けつけたのでしたわ。酒呑童子が倒されたことを知った父親の八面大王が、八岐大蛇に変化して京の都に攻め入ってきましたの！」

早く言えよっ！

すぐに立ち上がった雉丸を心配そうな瞳でポチが覗き込んだ。

「兄さま、まだ無理しちゃダメだよお」

「大丈夫だよ、もうだいぶ傷も癒えたから」

酒呑童子の鋸刀でやられた傷がまだ尾を引いていたのだ。

シヨットガンを背負って準備をはじめる雉丸を鈴鹿が見つめた。

「怪我かご病気をなされておりますの？ だったら妾に申しつけてくださればよかったのに、ダーリンのお友達ならいくらでも治して差し上げますのに」

「やむを得ない状況でなければ鬼の手は借りない。俺が先に行く、サルは桃さんと呼んでこい」

準備を整えた雉丸は駆け足で部屋を出て行った。

すぐに猿助も隣の部屋に駆け込んだ。

「姉貴！ 起きろつてば、恐怖の大王が都に攻めて来たんだぜ！」

「アタイには関係ないね」

「関係ないんだろ、ここでいつぶつ潰されるかわかんないだろ！」

「そんなときゃそんなとき。そのときになつたら考えるとするよ。ふあ

あゝ、これからまた一眠りすんだから邪魔すんじゃないよ」

「クソツ、勝手にしやがれ！」

猿助は部屋の扉を力任せに閉めて外に出た。

部屋の外ではポチとかぐやが待っていた。

ポチは心配そうな瞳をしている。

「姉御さんどうだったのお？」

「あんなの桃の姉貴なんかじゃねーよ、付いてこられても足手まといにんるだけだ。ほらっ行くぞ！」

猿助はポチとかぐやの袖を掴んで無理矢理歩きはじめた。

かぐやは足を踏ん張って抵抗する。

「なんでかぐやまで行かなきゃなんなのよ！」

でも結局、引きずられて行った。

スペースかぐや編2

すでに都中から陰陽師や武士まで、戦える者なら誰でも集められ、八岐大蛇との攻防戦を繰り広げていた。

先陣を切っているのは安倍晴明だ。

「とにかく近づいては危険だ、遠くから矢を放て！」

整列する弓矢隊から一斉に矢が放たれた。

しかし、矢はすべて堅い鱗に弾かれ地に落ちた。まるで爪楊枝ほどの攻撃力もない。

晴明は使役している式神を呼び出した。

「出でよ前鬼後鬼！」

すると頭に角を生やした二人の少女が現れた。双子のようで見分けるのは難しい。

晴明が前鬼後鬼に命じる。

「八岐大蛇の進撃を防ぐんだ。最低でも帝様の元に近づけてはならぬ！」

前鬼後鬼は顔を見合わせ互いに抱き合った。

「いやあ〜ん、あんな大怪物となんて戦えないですう」

「戦っても負けちゃうもんねえ、わたしたち」

うんうんと前鬼後鬼は示し合わせた。

役立たずだ！

だからと言って前鬼後鬼を責めることはできない。相手が悪すぎるのだ。

八つの頭と尾を持ち、背中には苔や草木が生えている蛇龍。その背は都のどの建物よりも高く、尾は川のように長く先がどこにあるのかわからないほどだ。

その巨体で歩くこと自体ですでに凶器となる。

雉丸は鞭のように撓る尾の一本を駆け登っていた。

木々が生えた背はまるで山そのもの。登山道に迷い込んでしまっ

たような錯覚に陥る。

一本の頭まで登り詰めた雉丸は大声をあげた。

「八面大王、俺が誰だかわかるか！」

すると地鳴りのような声が返ってきた。

『誰が我の名を呼ぶのは？』

「貴様の不肖の息子だ。呉葉の子だと言えばわかるか！」

『ウオオオオン！』

突然、八岐大蛇は首を大きく振り乱し、振り飛ばされまいと雉丸はしがみつく。

遠くから誰かの叫ぶ声が聞こえた。

「暴れるなよ蛇野郎！」

八つある別の頭に乗っていた猿助だった。

さらに別の頭にはポチが乗っていた。

「うわあ〜ん怖いよお、高いの怖い、揺れるの怖い〜」

さらにさらに別の首にはかくやが必死にしがみついていた。

「てかあんたらなんで別の首に乗ってんのよ。他人の体の上ではぐれるなんて聞いたことないわボケッ！」

さらにさらにさらに鈴鹿もいた。

「ダーリン、すぐにそちらへ参ります！」

大通連に乗った鈴鹿は宙を飛び、もつとも移動効率がよかった。

で、ついでにもう一人。

「ぼ、僕を人質に取ったつもりか、この卑怯者めっ！」

晴明が巨大な歯に着物を挟まれて宙ぶらりんだった。

嗚呼、無力だ。

人間というのはなんてちっばけなものなのだろう……大怪獣に勝てるかボケッ！

もうダメだ、世界の終わり世紀末だ。

八岐大蛇は口から炎まで吐きやがってくれています。

都は死の劫火に焼かれようとしていた。

この世にも恐ろしい怪物に対抗する術はあるのか！？

陰陽師や武士たちの間を縫って紫の着物を着た女が前に出た。

「嗚呼、なんと嘆かわしいことじゃ。それでも我が息子かえ？」

「ママ!？」

叫んだのは清明だった。

樟葉は臆することなく八岐大蛇に向かい、体から金色のミサイルを発射した。

「黄金飛翔破！」

九つの誘導ミサイルは次々と八岐大蛇の首を追撃して、残りの一発はカンチヨーを決めた!

『ウオオオオン!』

狂ったように暴れ狂う八岐大蛇。甚大な被害が出て状況は悪化した。

そして、さらに状況を悪化させる出来事が起きた。

樟葉が身をよじらせたかと思うと、いきなり金色の狐に姿を変えて巨大化しはじめたのだ。

八岐大蛇よりは小さいが、そのサイズは見上げて首が痛くなるほど。金色の狐には尾が九尾あった。ジパングでも三本の指に数えられる妖魔　九尾の狐だ。

しかも、その尻尾を振るもんだから建物が壊れる壊れる。

それを見た清明は他人の振りを決めこんでいる。

八岐大蛇VS九尾の狐

人智を越えた怪獣大戦争がはじまるうとしていた。

先に仕掛けたのは八岐大蛇だ。

燃えさかる火炎を口から吐き出した。

すぐに九尾の狐が自慢の尻尾で応戦する。

『竜巻旋風尾殺!』

クルクル回る九尾がまるで扇風機のように風を起こし、炎を瞬間に消し去ってしまった。と、同時に強風で建物が吹き飛ばされた。かくやが清明に向かって叫ぶ。

「あんたのママは必殺技の名前言わないと技使えないわけ! デカ

イ口で叫ばれると頭にガンガンくるんだけど！」

巨大化した分、声も巨大に鳴り響く。

怪獣同士がぶつかり合っている中でも、ちつぽけな存在たちは頑張っていた。

大通連で空を飛ぶ鈴鹿の背中に抱きついていている猿助。

「落ちる落ちる！」

「もっと体を密着させてお掴まりくださいまし！」

ジェットコースターのように宙を飛ぶ鈴鹿の運転。それもすべて襲い来る八岐大蛇の頭をかわすため。

巨大な存在を前にたとえ無力と思えても、何かできることが必ずあるはず。

小通連が八岐大蛇の眼を狙って飛んだ。

しかし、巨体の割りに細やかな動きでかわされてしまう。

猿助が懐から何かを取り出して投げた。

「くらえ、忍法コシヨウ爆弾！」

投げられたコシヨウ爆弾は見事に八岐大蛇の眼を潰した。

コシヨウの痛みで一本の首が激しく暴れ回る。そして、しがみついていたかぐやが……落ちた。

「ぎゃあああつ！」

さよならかぐや！

雉丸はシヨットガンを巨大な眼球に撃ち込んだ。

再び首を激しく揺らして暴れ回る八岐大蛇。

たとえ鱗は堅くとも、こうやって眼球を一つずつ潰せば勝機があるかもしれない。

そして、ポチは。。。

「わあ〜ん、ここどこお!？」

八岐大蛇の背中で迷子になっていた。

さらに晴明は食道を登っている最中だった。

「このまま胃に落ちてたまるかあ〜っ！」

どうやらいつの間にか食われていたらしい。

他の者は八岐大蛇と九尾の狐の戦いを白い顔しながら見守ること
しかなかった。

嗚呼、都が二匹の大怪獣に壊される。

スペースかぐや編3

桃が昼寝をしている部屋にかぐやが飛び込んで来た。

「起きなさいよ！」

その声にも反応せず、寝返りを打ってかぐやに背を向けた。

「起きなさいってば！」

かぐやは桃の上に馬乗りなって、自分のほうに無理矢理体を向かせた。

「起きろクソババア！」

ちよつと桃の目尻がピクツと反応したが、それ以上のアクションはなかった。

「起きないと胸揉むからね！」

そう言つてかぐやは桃の胸をグチヨグチヨにこねくり回しはじめた。

さすがにこれには桃も声を荒げた。

「やめっ、やめろ！」

「やっぱり起きてるじゃないのよ！」

「人が気持ちよく寝てんのに何の真似だい！」

「外で何が起きてるか、窓の外をよーく見てみなさいよ！」

「めんどくさいねえ」

桃はかぐやを放り投げて再びふて寝をしてしまった。

床に尻餅をついたかぐやは、耳の先までピンと伸ばして、紅い眼をさらに真っ赤にした。

「クソババア！」

怒りを露わにしたかぐやは再び桃を自分に向かせ、大きく手を振り上げて強烈なビンタを放った。

その衝撃は桃の口からツバが飛ぶほどで、唇の端から血がにじみ出していた。

ついに桃はかぐやの胸倉を掴んで起き上がった。

「てめえ、下僕に分際でご主人様に手え上げるとは良い度胸じゃないか！」

「度胸だけならババアなんかよりありますよーだ！」

あつかんべーをするかぐやに、さらに桃は怒りをぶつける。

「その舌引っこ抜いてやるうか！」

「何ですか弱い者イジメですか？」

「下僕に躰を教え込むだけさ！」

「もう別にかぐやは下僕でもなんでもいいけど、仲間が死にそうになりながら戦ってるのに、クソババアは呑気に昼寝だなんて良いご身分なこと。ポチなんかとつくに死んじゃってるんじゃないかなあ」

一瞬、胸倉を掴む桃の手が震えるほどに力を込められたが、それはすぐにスーツと抜けてしまった。

桃はかぐやを突き放し、壁にゆっくりともたれ掛かった。

うつむいたまま桃は静かに口を開く。

「やり合ってる相手は強いのかい？」

「都が全滅させられるくらい」

「で、アタイの力が必要ってわけかい？」

「別にい腑抜けババアの力は必要ないけどー」

桃がニヤツと笑った。

「おうおう腑抜けなんてどこにいるんだい。アンタの目の前にいるのはジパンゲーのぜっ」

「絶世の美女の桃ねーちゃんでしょ。はい、さっさと行くよー！」

言葉を途中で奪われ、しかも腕をグイグイ引っ張られて桃は部屋の外に出された。

かぐやに引きずられるまま宿屋を出て、住人たちが逃げまどい、家財道具を運び出している中、桃は怪獣大決戦の現場までやってきた。

「で、どっちを倒せばいいんだい？」

桃は二匹の大怪獣は見比べた。

「あえて言うなら、両方？」

かぐやの答えはきつと間違つてない！

暴れ回った拳げ句、次々と都を破壊していく二匹。どっちも敵にしか見えない。

大通連に乗った鈴鹿と猿助が桃の元に降りてきた。

桃を見た猿助は大喜びだ。

「姉貴、やつぱり来てくれたんだな！」

「まあね、大取は最後に出たほうがカツコイイだろう？」

見事、桃は華々しい大取を飾れることになるのか！

しかし、たとえ桃といえど、人智を超えた大怪獣に打つ手はあるのか？

さらにここで鈴鹿から残念なお知らせがあります。

「八岐大蛇は不老不死にも似た生命力を持っており、いくら傷ついても再生するばかり。先ほどからいくつか眼を潰したのですが、今ではもう回復しておりますわ」

以上、残念なお知らせでした！

嗚呼、こりやダメだ。どう考えても絶望的だ。こうなったらみんなで九尾の狐を応援するしかないかもしれない。

でも、九尾の狐が勝つても、都は廃墟になつてるけどね！

万が一、九尾の狐が負けたらもつと最悪だ。

嗚呼、人間とはいかに無力なのだろうか。

だがしかし！！

桃はまったくどーして自信満々。辞書の辞書に敗北の文字はなし！
屈伸、背伸び、準備体操を終えた桃は鈴鹿に眼を向けた。

「おい、あんたの刀を一本貸しな」

「イヤです」

即答。

「グダグダ言つてねえーで貸せ。何でもできるアタイだが、空だけは飛べないんでね。あんたの刀を貸せつつつてんだよ」

頼まれた鈴鹿はすぐに答えず、隣にいた猿助の顔を覗き込んだ。

すると猿助がうんと頷いたので、仕方なく桃に小通連を差し出した。

「大事な刀ですので、無事に返してくださいまし」

「ありがとよ。でも、できればちゃんと鞘に入れて貸してくれないかい？」

「どうしてですか？」

「先端恐怖症だからに決まってるだろう！」

「………………。鞘は…………どこにいつちやっただんでしょう、戦いの最中に落としちゃったのかしら、てへっ」

軽い嫌がらせだった。勝手に恋のライバルに認定されているせいだ。

鈴鹿から刃剥き出しの小通連を受け取った桃。若干だが、顔に汗が流れた。

「先端恐怖症なんて嘘に決まってるだろう。ちゃちゃっとやっつけて帰ってくりやいんだよ！」

威勢よく桃は小通連に乗って空を飛んだ。

九尾の狐の相手に忙しい八岐大蛇は首の一本で桃の相手をしようとした。

「甘く見られたもんだねえ…………うおりゃッ！」

襲い来る首を容易くも物干し竿で一刀両断。

落ちた。

誰もがまさかと口を開けたまま固まった。

巨大な八岐大蛇の首が、たかが竹の棒で切断されたのだ。

おそらく誰よりも驚いたのは八岐大蛇だろう。その証拠に九尾の狐を差し置いて、残り首七つで桃に襲いかかったのだ。

物干し竿が旋風を起こし桃が乱舞する。

縦横無尽に暴れ狂う長い首が次々と落とされる。あまりな豪快さに桃こそ鬼神ではないかと畏れを抱いた。

そして、ついに残る首は一つ。

最後に残った首が天に向かって吼えた。

雷声は空気に衝撃波を奔らせ、信じられないことが起きた。

落としたはずの首が新たに生えて来るではないか!?

危機と思われる状況下に置いても桃は楽しんでた。

「なんだいなんだい、アタイと根性比べでもしようってのかい！」
復活すれば、その度に斬る。

どちらが先にバテるか、桃にとって根性比べに他ならないのだ。

八岐大蛇の敵は桃だけではない。

「黄金千手観音！」

九尾の狐が尻尾で連続ビンタ！

なんかやってる動作が“竜巻旋風尾殺”と変わらない。

八岐大蛇の頭に乗っていた雉丸が桃に向かって叫ぶ。

「首を落としたあと、傷口を焼いてしまえば再生できないはずす

！」

「おうよ、首を落とすのはアタイに任せな。火は誰か任せた！」

任されたのは九尾の狐だった。

『ならば妾の狐火で焼いて進ぜよう』

そうと決まれば桃は斬って斬って斬りまくる。

八岐大蛇の首が輪切りに下ろされる。あまり食べても美味しくな

さそうだ。

すぐに九尾の狐が炎を繰り出した。

「九連紅蓮華！」

落とした首は八つ。飛んだ炎は九つ。

残りの炎は八岐大蛇の背中の草木に燃え移った。山火事だ！

山中で迷子になっているポチ。

「うわあゝん、山が燃えだしたよお！」

必死だった。

全身を燃え上がらせ豪華に包まれた八岐大蛇。

暴れ狂っていたのも一時、すぐに身動き一つせず、当たりは炎の

だけが鳴り響いた。

やったか？

誰もそう思っただけで歓喜の声をあげようとした瞬間、それは悲鳴へと変わった。

それは脱皮するように、黒い燃えかすの殻を破って次々と長い首が天に昇った。

復活した八岐大蛇は玉の肌。お肌ツヤツヤで前よりも素肌美人！
なんてこつたい！

全身を焼かれてもなお復活する八岐大蛇。

長く伸びた尾が鞭のように撓りながら桃に襲いかかってきた。

それはまるで川と人間が戦うよう。

桃は渾身の力を込めて物干し竿を振り下ろした。

「なっ！？」

物干し竿が音を立てて折れた。

桃が“気合い”で負けたのか！？

そのまま桃は川のように長い尾に強打されて遙か後方までぶっ飛び、瓦礫の下敷きになって姿を消してしまった。

まさか桃の物干し竿が折れる日が来ようとは、それは魂が折れたも同じ。

万策尽きたかのように思えた。

そのとき！

ひとときわ目立つ真つ赤なバイクで乗り付けた着物の女。

その女はフルフェイスのマスクを脱ぎ捨て、風に艶やかな髪を靡かせながらその姿を露わにした。

「みなさん、いつも金ちゃんがお世話になっております。母の呉葉です」

雉丸のママだった。

なぜか急に八岐大蛇が凍ったように動きを止めてしまった。

呉葉は臆することなく八岐大蛇に近づいていった。

「あなたダメでしょ」。別れた夫とはいえ、この事態は見過ごすわけにはいかないわ」

と、妖しく光る包丁を握りしめながら言った。

キラリと光る包丁を見て呉葉がハッと息を呑んだ。

「あらやだ、料理の最中だったからそのまま包丁を持ってきてしま

「たわ」

武器じゃないんかい！

すでに八岐大蛇は後ずさりをはじめていた。

呉葉が一步進むごとに、八岐大蛇が一步下がる。

そして、八岐大蛇逃走！

八岐大蛇が背を向けるために回転した瞬間、何十軒もの建物が一気に倒壊し、さらに尻尾の一本が呉葉に不可抗力で飛んできた。

「危ない母上！」

誰が叫んだのか、刹那　桃ですら斬れなかった尾が両断されていた。

そこに佇む呉葉の姿。その手に握るは万能包丁（ステンレス製）。万能だからって何でも斬れるわけがない！

それをやってのけた呉葉……おそるべし。

何事もなかったような柔和な笑みで呉葉はひとこと。

「あの人ったらシャイなんだから」

そ、それが理由で八岐大蛇は退散したんですか！？

マジですかっ！！

スペースかぐや編 4

何はともあれ、八岐大蛇はいなくなつた。

その後に残つたのは半壊した京の都。華々しい姿とはかけ離れた瓦礫の山だつた。

鈴鹿や陰陽師たちの喚んだ雨雲によつてもたらされた雨で、都が炎の海に沈むことは免れたが、やっぱりそれでもヒドイ有様だ。

八岐大蛇の燃えかすの中から烏帽子がびよんと出て、晴明が飛び出した。

「ぶはーっ！ 死ぬかと思つた」

うわっ、すっげー役立たず。

「ママからもらつた 火鼠の皮衣 を下に着てなかつたら燃え死んでた」

ぶっっちゃけ役に立ってないんだから死んでも……。

雉丸は震えるポチを抱きかかえて歩いていた。

「大丈夫だつたかいポチ？」

「怖かつたよお」

「もう心配しらないよ、俺がそばにいるから」

猿助は瓦礫の下敷きになつた桃を探していた。

「姉貴どこだよ返事してくれよ！」

瓦礫の山を掘り進み、そこから出ていた手を引っ張つて、桃の体を釣り上げた。

反動で猿助は桃の下敷きになつて、爆乳に顔を埋めた。

いつもだつたらここで怒りの鉄拳とかが飛んできそうなのだが……。

桃は酷く落ち込んでいた。

「アタイの物干し竿が……物干し竿が……これからどうやって洗濯物を干したらいいんだい！」

そこかっ！

桃は決意を固めたようにビシツと立ち上がった。

「こうなったら！」

「こうなったら？」

「喰ってやる！」

なにを？

桃は地面に落ちていている八岐大蛇の尾に向かって行って、尾っぽの先にいきなりかぶりついた。生食！？

「物干し竿の敵だよ！」

ガキツ！

桃の歯が痺れた。何か堅いものを噛んでしまった。さすが物干し竿を折った尾。

不思議な顔をしながら桃はその尾を調べはじめた。

すると、なんと尾の中からズルズルと骨が出てきたではないか：

…つて当たり前だろ！

その骨の長さは物干し竿に匹敵するほどで、白く美しいそれはまるで鋭い剣のようであった。

桃はその骨を持ってこう言った。

「よし決めた。今日からこれを物干し竿の代わりにするよ！」

その桃の一連の行動を見ていた猿助は啞然とした。

「姉貴……骨を武器にするって、原始人じゃないんだからよお」

「アタイを原始人なんかと一緒にしないでおくれ。ようするにこれが骨じゃなくて、立派な武器として認められればいいんだろっ、だつたら相応しい名前をつければいい話じゃないか？」

「……そういう問題なんスか？」

「あんたのクナイを貸しな」

わけもわからないまま猿助は桃にクナイを貸した。

すると桃はクナイで骨に文字を刻みはじめた。

「今日は雨も降っていることだし……天叢雲剣つてのでどうだい？」

「どうつて言われても……」

「剣つて名前を彫ったんだから、今からこれは剣さ。カッコイイだ

るっ?」

桃は天叢雲剣を構えて見せた。たしかに様になっている。でも、そーゆー問題なのか?

桃の新しい武器も見つかり、こちらも一段落。

その頃、かぐやは灰の中で光輝く宝玉を掘り起こしていた。

「これは…… 竜の頸の玉」

かぐやがその宝玉を手を取った瞬間、辺りは雷光が奔ったように眩い閃光に包まれた。

誰もが何が起こったのかとかぐやのほうを見るが、光で眼が潰されて何も見ることができない。

「ふふふっ、おーほほほほほっ!」

光の中から聞こえた高らかな笑い声。

桃にも勝るとも劣らないシルエツトが描き出された。

黒く艶やかな髪は地に着くほど長く、小さな服から張り出した爆乳、明らかに丈の合っていない着物から伸びた美脚、その付け根はパンツ丸見え状態で、小さなパンツがかなり食い込んでしまっている。

紅い瞳が世界を見据えた。

「長かった…… 嗚呼、長かった…… ついにかぐやは記憶を取り戻したわ!」

そこにいたのはナイスボディの美女に姿を変えたかぐやだった。

服は幼女のままだから、なんだから肌の露出がスゴイことになっていた。

かぐやは桃に視線を向けた。

「よくも今まで雑に扱ってくれたわね。積みり積もった復讐の念を…… ああっ」

いきなりかぐやが貧血でも起こしたように地面に手をついてしまった。

「はあはあ…… ダメだ…… エネルギーが足りない」

はつきり言っって何が何だかわからない。

いきなり美女に大変身をしたかぐや。
そして独りで勝手に弱ってるかぐや。
何がしたいの？

顔を上げたかぐやの視線の先に猿助が移った。

「そうだ……サルがいたわ」

かぐやは地面を滑るように走り瞬時に猿助を拉致した。

そして、猿助の顔を自分の胸に押しつけた！？

燃え上がる煩惱。

「うおおお 最高だぜ！」

パフパフ地獄に囚われた猿助の活力がグングン急上昇した。

妖しく笑うかぐや。

「このエネルギーすべてにただくわ」

かぐやが猿助の唇を奪った！？

次の瞬間、猿助の体から青い炎のようなオーラが抜け出て、それがすべてかぐやへと吸収だれてしまった。

このオーラはすべて猿助の生命の源だ。かぐやは生命体のエネルギーを喰らっているのだ。

猿助の体が指先から萎れていくのが見えた。

しかし、ナイスボディに抱かれている猿助は新たなエネルギーをどんどん生産する。枯れて咲き、枯れては咲きの繰り返し。

かぐやのエネルギーがどんどん膨れあがっていく。

何が何だかわからないが、桃はとにかく止めなくては思い、新たな武器の試し切りを行った。

「喰らえかぐやあッ！」

いくつかの間接に分かれた天叢雲剣は竹のように撓った。

突如かぐやの周りに発生したバリア。

天叢雲剣は弾かれ、桃も大きく吹き飛ばされた。

しかし、桃はあきらめない。

「まだまだ！」

再び振るわれた天叢雲剣。バリアにぶつかりそこで止まった。

震える桃の腕。力が込められているのがわかる。

「うおおおりやあああつ！」

バリアが硝子片のように弾け飛び、天叢雲剣がかぐやの頭上から振り下ろされる。

「くっ！」

かぐやは片手で天叢雲剣を受けた。その手から真っ赤な血が滴り落ちた。

だが、かぐやは月のように微笑んでいた。

天叢雲剣を押し返すかぐや。その手に傷はもうない。抱かれた猿助の顔はゲツソリやせ細ってた。

猿助からエネジーを吸い続けている限り、かぐやは無敵なのだ。

だったら猿助を倒せばいいじゃん？

迷わず桃は猿助に攻撃を仕掛けた。

ひよとかぐやは猿助を抱きかかえながらその攻撃をかわした。

「見たサル？ あなたのご主人様は、あなたの命なんてミジンコに命ほども思っていないのよ。あんなクソババアのところにはいないでかぐやと一緒に来る？」

爆乳に顔を埋めながら猿助はうんうんとうなずいた。

ダメだ猿助は完全に魔性の虜になっている。

それに激怒したのは桃だけではない。嫉妬の炎を燃やす鈴鹿もだ。

「行け小通連、大通連！」

宙を飛ぶ妖刀がかぐやを串刺しにせんとする。

かぐやは笑いながらそれを自ら喰らった。

小通連がかぐやの手のひらを貫通した。だが、すぐに小通連は又ルリと血ごと抜け落ち、その傷を再生してしまった、

さらにゲツソリする猿助。そろそろひなびた仙人の域に達しはじめた。

「ダーリン！」

悲痛な声をあげる鈴鹿。かぐやを攻撃することは猿助に危害を及ぼすことになるのだ。ただし、猿助本人は至福の顔をしているが。

すぐにポチを抱えた雉丸もやっきた。

「なにがあつたんだ？」

「あれかぐやたんじやないのぉ、たくさん牛乳飲んで大きくなつたんだねえ！」

牛乳の代わりに猿助のエネルギーをグビグビ飲んでます。

かぐやは首からぶら下げていた“鍵”を天に翳した。

「早く迎えに来いやコンチキショー！」

すると、どこからともなく未確認飛行物体が現れた。

円盤形のもの乗り物はかぐやの上空で止まると、地面に向かって光の柱を発射した。

桃たちが唾然とする中、光の柱に吸い上げられてかぐやが天に昇っていく。

「サルはエネルギーポットとしてもらっていくから！」

UFOに乗り込もうとするかぐやを鈴鹿が大通連に乗って追った。

「ダーリンを返して！」

だが、UFOから発射されたビームが鈴鹿に直撃した。

小通連でかるうじて防ぐが、鈴鹿は硝煙の中から地面に向かって落ちていった。

かぐやと猿助を乗せたUFOが飛び去る。

ワープ航法をしながら宙に消えたミステリー。

超常現象スペシャル、京の都に突如現れた未確認飛行物体！

朝廷は宇宙人の関与を否定。

さらわれた被害者は未だ消息不明。

そんな感じで瓦版の見出しを飾るのだろう。

でも、ふと現実に戻って辺りを見回してみると……怪獣大戦争の爪痕が。

嗚呼、瓦礫の山。

ぶつちやけかぐやとか猿助のことより、目先の復興が先だった。

スペースかぐや編 5

漆黒の夜空に浮かぶ二つの月。

一つは白く淡い光で地上を照らし、もう一つは紅く妖しい光で地上を恐怖で覆う。

紅い月の名はラビットスター。宇宙海賊スペースかぐやの巨大宇宙船だ。

今宵も空から舞い降りたうさ耳美女軍団が、選りすぐりのイケメンばかりをさらって天に昇っていく。

スペースかぐやの目的は私情を挟んで桃の首を取ること。ついでにジパング全土のみならず、全世界を植民地にすること。そして、奴隷のうさ耳カチューシャ着用の義務化。

奴隷はエネルギープラントとして、かぐやたちにエネルギーを供給する。スペースかぐやは生命体からエネルギーを吸って糧としているのだ。それはまさに吸血鬼のような存在。

それゆえに、宇宙海賊スペースかぐやの美女軍団は宇宙吸血姫と呼ばれているのだ。

人間狩りのために地上に降り立ったときが迎え撃つチャンス。だが、ひとたび天に昇ってしまえば手が出せない。

夜空の下、屋根の上で寝ころんでいる桃。

「あなたの妖刀である紅い月まで行けないのかい？」

もちろん尋ねられたのは鈴鹿だ。

「できるもなら妾がとづくにやっておりますわ。嗚呼、ダーリンが心配で今宵も眠れるか……」

あれから猿助がどうなったのかわからない。もしかしたら干からびたカスが、宇宙空間に投げ捨てられているかも知れない。

超科学で攻めてくるスペースかぐやの進撃はすさまじい。ジパングが乗っ取られるのは時間の問題だろう。

でも、相手はあの星々の向こう。

雉丸に膝枕されていたポチが星空を指差した。

「あつ流れ星！」

キラキラと尾を引きながら消えた流れ星。願い事を唱える時間もなかった。

雉丸が難しい顔をして、急に瞳を見開いて口を開いた。

「そうだ、かぐやが乗って来た乗り物はどうなったんだ？」

「そういえばそんなものがあつたようななかつたような。」

あれはたしか……どうなったんだっけか？

急に鈴鹿がビクツと背筋を振るわせた。

「きやつ！」

振り向くとそこには第三のお月様……じゃなくってハゲ頭。

「ふおふおふお、わしの出番のようじゃな」

亀仙人が鈴鹿のケツを撫で撫でしながら登場。

そして、いきなり鈴鹿にピンタされて屋根の下に転げ落ちた。

さよならエロ仙人！

いや……いつも通りしぶとく生きていた。

虫の息で屋根を這い上がってくる亀仙人。

止めを刺そうと鈴鹿は蹴り落とそうとしたが。

「トラ柄のパンティーが見えとるぞ」

「きやつ！」

鈴鹿は袴を押さえて後ろに下がった。桃だつたら構わず蹴っていただろう。

命拾いをした亀仙人は鼻血を垂らしながら、本人はカツコよく決めたつもりで地上を指差した。

「あれを見よ！」

ここにいた全員であれを見ると、そこにはかぐやが乗ってきた竹形飛翔体があつた。

あの村からわざわざここまで運んできたということとは？

「わしの天才的な頭脳で修理したぞい。あの星の船に乗れば紅い月まで行くことができる……ような気がする」

自信ないんかいっ！

桃が力強く立った。

「おもしろそうじゃないか。あのお空の向こうに行けるなんて、ジパングの絶世の美女に相応しい人類初の偉業だねえ」

失敗したら行き先はあの世だが。

桃が行くと決めたら彼らもついて行く。

「俺は桃さんの行くところならどこまでも」

「ボクも行く行くう。お星様がキラキラで楽しそお！」

二人の他にやはり鈴鹿も決意を固めていた。

「もちろん妾も同行させていただきますわ」

あの宙へ羽ばたく仲間が揃った。

桃はひよいと軽い身のこなして屋根から飛び降りた。

「てめえら、アタイの足手まといになるんじゃないよ！」

こうしていつに桃はジパングを飛び出し、舞台は広大な宇宙の海へ！

が、その前に。

「本当に動くのかいこれ！」

ギユウギユウ詰めめの 星の船 内部。もともと一人用だったらしく、大人三人と子供一人のアトラクションではない。なかり苦しい状態だった。

外にいる亀仙人から無線機で指示が出される。

《その赤いボタンを押すんじゃ》

赤いボタン何かどこにあるんだ？

ギユウギユウ詰めめで体を動かせる状態にない。

桃が叫ぶ。

「誰だ今アタイのケツ触ったのは！」

ノーリアクション。きつと不可抗力だが、誰も名乗り出る気配はない。出たからここで惨劇が起こる。

一番小柄なポチが体の間を縫って赤いボタンを見つけた。

「あつたよ、ボクが押しちゃっていい？」

瞳をキラキラに輝かせて押す気満々。

桃がゴーを出す。

「押せ、さっさと押せーっ！」

「はあ〜い」

ポチツとな。

轟々と駆動音を響かせながら 星の船 が揺れた。

バランスを崩した雉丸の顔面が爆乳にダイビング！

「……………」

慌てて雉丸は顔を離れた反動で後頭部を壁に強打。

嗚呼、猿助がいないばかりに、いつの役回りが雉丸に……不幸だ。

「てめえ、さつきケツ触つたのも雉丸だな！」

「ち、違います信じてください！」

暴れようとする桃だが、ギユウギユウの状態では手も足も出せなかった。

星の船 がまた激しく揺れた。

スピーカーから亀仙人の声が響く。

《おお、飛んだぞ！》

ジェット噴射しながら 星の船 が天に昇っていく。

かろうじて桃も丸い窓から外の気色が見れた。

「都がもうあんな遠くだ」

すっかり雉丸への怒りも覚めていた。

ポチもはしやぎながら窓の外を眺めている。

「わあ〜い、飛んだ飛んだあ」

「あのお、妾はぜんぜん見えないのですが？」

ギユウギユウ詰めなので仕方ありません！

あの夜空に浮かぶ紅い満月に 星の船 は還っていく。

しかし、それに乗るは桃たち一行。

果たして桃たちはスペースかくやに打ち勝つことができるのか！

むしろ、無事に着くことができるのかっ!？

スペースかぐや編 6

桃たちを乗せた 星の船 は自動操縦でラビットスターに到着し、
運良く味方の船と認識されて格納庫まで無事に到着した。

が、 星の船 のハッチが開いた瞬間、バツタリ警備兵と鉢
合わせ。しかも二人組。

白いプロテクトスーツとフルフェイスヘルメット、頭からはうさ
耳がぴよんと出ている。手に持っているビームライフルの銃口がこ
つちを向いていた。

桃は天叢雲剣を抜こうとしたが、どっかに引っかけたまま抜け
物干し竿のときと同じ弱点だ。

いち早く外に飛び出したのは大通連と小通連だった。

小通連がビームライフルを斬り、大通連が警備兵に峰打ちを喰ら
わせた。連続して倒れた二人の警備兵。

他の警備兵がいるような物音が聞こえる。

桃たちは急いで気を失っている警備兵を引きずり物陰に隠れた。

桃と鈴鹿は示し合わせたように互いを見つめ頷き、男二人に『あ
つちを向いてろ』と明後日を指差すサインを送った。

すぐに桃と鈴鹿は警備兵の防具を脱がして自分たちに着せた。

着替え終わった桃は胸を押さえた。

「サイズが合っていない」

女性のボディラインが完璧に再現されているプロテクトスーツ。

堅い素材でできているために個別に寸法を測って配布されている物
つぽい。

「妾もサイズが……貧乳で悪かったですわね」

桃とは別の意味でサイズが合っていないかった。

プロテクトスーツに着替えた二人。あとはヘルメットをかぶるだ
けだが、ここで重大な問題が発生。

うさ耳がない！

なんてことは心配ご無用。出発の際に亀仙人がうさ耳カチューシヤを授けてくれていた。しかもなぜか四つ。それはつまり雉丸とポチに女装を……。

雉丸が桃にロープを手渡す。

「これで二人を縛っておきましょう」

下着姿の警備兵を縛り上げた。しかも亀甲縛り。

さらに警備兵が各一個ずつ持っていた手錠で雉丸とポチを拘束した。

これで準備は整った。

鈴鹿は無線機を手にしてスイッチを入れた。

「緊急事態、侵入者が現れました。侵入者は桃とその下僕二名、合わせて三名と思われます。すでに下僕二名を拘束しました。……ええっと、桃は食堂のほうに逃走中 以上」

これで警備の多くは食堂のほうに回されるハズだ。目的地が食堂近くだったら最悪だけだな！

雉丸とポチは背中にビームライフルを突き付けられ、囚われて護送されているフリをした。

が、ここで緊急事態が発生。道がわかんねえ！

ラビットスターを地上から見たとき二つ目の月に見えたとおり、その大きさは計り知れないほど大きいのだ。見に迷ったが最後だ。

雉丸とポチを連れてウロチョロ。何人かの兵士と出会ったが、ご苦労様と軽く会釈を交わしただけ。

だつて訊けない！

『道がわからないんですけどお』なんて尋ねてボクが出たら、このラビットスターにいる吸血姫美女軍団に総攻撃される。さすがの桃でも相手しきれないであろう。

だからと言って、このまま人質を連行したままフラフラしていても疑われる。

すでに兵士たちから少しづつ変な目で見られはじめていた。

鈴鹿は全身から変な汗が噴き出していた。本当はこのままヘルメ

ツトを脱ぎ捨てて、新鮮の空気を思う存分吸いたかった。

フラフラを続けていると、いつに兵士の一人に声をかけられてしまった。

「どうしたの？」

優しい女の声だった。

桃は『お前が言えよ』的な感じで鈴鹿の脇腹を小突いた。

「ええつと、あのお……恥ずかしながら道に迷ってしまったて」

正直だった。困ったときは正直に言う、大事なことです。

「あはは、さつきから人質を連れたままフラフラしてるからどうしたのかと。私も道に迷うのよねえ」

よかつた相手が天然で！

鈴鹿は幸運に感謝しながら、兵士に頭を下げた。

「道案内お願いします。かぐや様のところまで連れてくるように言われています」

「ええ、いいわよ。あのカートに乗って行きましょう」

怖いくらいラッキーだ。

広いラビットスターをカートに乗って移動することになった。

カートは自動操縦らしく、目的地を入力すればそれでオツケだ。これに乗れば道に迷うことなんて……。

道に迷ったらカートで移動すればいい。それをしなかった桃たちは疑われ当然だったが、よかつた疑い深い兵士じゃなくて！

いとも簡単にかぐやのいる操舵室まで来てしまった。

宇宙空間を見渡せる半球型の大きく透明な窓。コンピューター前に座る美人オペレーター。そして、船の舵にも似た操縦桿を握る十二単の影。

海賊帽を被ったかぐやが振り替えた。というか十二単に海賊帽って……斬新な。しかもよく見ると着物の柄はドクロマークだ。

ここまで案内してくれた心優しい兵士がかぐやに敬礼した。

「侵入者をここまで連行してまいりました！」

桃と鈴鹿もマネして敬礼した。

でも、敬礼したときにうさ耳をびよんぴよんと曲げる動作ができない！

大丈夫だった。そんなところなど見過ごされたようだ。

かぐやがゆつくりと、十二単をズルズル引きずりながら、ものすつごく動きずらそうに、さらに辛そうな顔をして近づいてきた。

「ハアハア……少し動くだけで息が切れる」

着なきやいいんじゃん！

汗を拭ったかぐやは雉丸とポチに目を向けた。

「久しぶりお二人さん」

「かぐやたんお久あ！」

元気に無邪気に挨拶を返すポチ。拳を握った桃の手を鈴鹿が必死になって押さえた。

雉丸は眼鏡の奥から鋭い目つきでかぐやを睨んだ。

「俺たちをどうするつもりだ？」

「うーん、かぐやのペットにしちやおうかなあ……サルみたいに」
物陰から黒いプロテクトスーツに全身を包み、フルフェイスの顔の部分が……猿のお面だった。どう考えてもサルだ、そうだサルだ、猿助に間違いない！

シューゴーという呼吸音を響かせながら、厳かな雰囲気ですい男はマントを靡かせ近づいてくる。がに股で。しかも顔は猿面だし。

雉丸が黒い男に問いかけた。

「猿助なのか？」

「よお雉丸久しぶり！」

気軽な感じで黒い男　猿助は手をヒラヒラ振って見せた。

ポチは瞳をキラキラさせた。

「サルたんのコスプレかつこいいい！」

「そうだろ、オレも気に入ってるんだ。このマントとか悪役っぽくてカッコイイだろ？」

猿面以外はな！

まさに猿面以外は悪役そのもの。それも下っ端ではなく上から数

えて三番目以内に入るくらい。

雉丸は軽蔑を込めて猿助を睨んだ。

「桃さんを裏切って敵側についたか？」

「だってよお、ここは飯も旨いし、周りは美人のねーちゃんばっかみんなオレに優しくしてくれるから、まるで極楽浄土みたいなんだから？」

完全に陥落されていた。

かぐやは猿助を抱き寄せて爆乳でハグハグした。

「今やサルは桃じゃなくてかぐやの下僕なの。かぐや専用のエネルギーポットでもあるんだからね」

身も心も下僕だ。

桃はブチ切れる寸前で手に持っていた天叢雲剣を薙ぎ払う寸前だった。

かぐやがその天叢雲剣に気づいた。

「それってたしか桃の武器じゃないの、どうしたの？」

すかさず鈴鹿がフォロー。

「桃が落とした物を押収しました！」

「ふ〜ん、ドジね……あのクソババア」

限界だった。

「誰がクソババアだってえ〜、その口を針と糸で縫いつけてやるのか！」

ヘルメットを投げ捨てた桃が周りに構わず天叢雲剣を振り回した。こうなってしまうては仕方ない。

鈴鹿はすぐに雉丸とポチの手錠を外し、雉丸は鈴鹿に預けていたショットガンを受け取り、入ってきた扉に何発も撃ち込んだ。

火花を散らしながら電子ロックの扉がショットした。これで誰も中に入って来られない。外に出る方法はあとで考えればいい。

驚いたかぐやは動こうとするが……十二単が重すぎて動けない。オペレーターと数人の兵士たちがビームライフルを構えた。

発射されたビームをすべて弾き返す天叢雲剣。

雉丸が撃つたりリボルバーも兵士たちの手にヒットして、ビームライフルを床に落とされた。

そして、ポチは物陰に隠れながら両手で握った拳を胸の前。

「ファイト」

言葉で応援。

ついにかぐやが十二単を脱ぎ捨てた。

「こんなの着てられるかポケット！」

官能的なラインを描くボディスーツに身を包んだかぐや。武器は

丸腰だった。

「しまった！？」

かぐや逃走！

奥の部屋に逃げるかぐやを桃が追う。

「ここはてめえらに任せたよ、アタイはかぐやを追う！」

そう言い残して桃は姿を消した。

一方、鈴鹿は猿助と対峙していた。

「ダーリン……その格好はダサッ！」

「どこかダサイんだよ、言ってみろよ！」

「サルのお面はダサイですわね。あとはまったく問題ないと思いますわ」

「このお面がチャームポイントで小さい子供にもウケるんだろ！」

「やめてくださいまし、最近の子供を甘く見るような発言は。最近の子供はもつと大人ですわ」

なんだこの言い争い。どうでもいいような感じがするぞ。

しかし、この言い争いは熾烈な戦いの序曲に過ぎなかった。

鈴鹿VS猿助が今まさにゴングを打った！

スペースかぐや編 7

大通連と小通連が宙を舞う。

「桃に惚れていたと思ったら、今度はかぐやでございませうか。どうして妾ではダメなのですか？」

その眼差しはどこか哀しげ。

お面で隠された猿助の表情を読み取ることはできない。

「別にオレの勝手だろ」

「勝手ではございませぬ、貴方様は妾の婚約者なのですのよ」

「そんなの勝手に決めてんじゃねーよボクケ！」

「妾のことは遊びだったのですわね！」

「遊びは男の甲斐性だって言うじゃねえか。なにが悪いんだよバカ！」

「ひ、ひどいですわ……」

涙ぐみ顔を押しさえる鈴鹿。

ちよっぴり言い過ぎちゃったかなあ、と猿助が近づこうとした瞬間、顔の横を大通連がかすめた。

思わず凍り付く猿助。

鈴鹿がゆっくりと顔を上げた。その表情は般若の相。

「夫を躡けるのは妻の勤めですわね」

妖刀が鬼気を放ちながら猿助に襲いかかる。

「ぎゃっ、オレを殺す気か！」

「瀕死重傷を負っても大通連と小通連の妖力で治して差し上げますわ！」

自在に宙を飛ぶ二振りの妖刀。

さらに鈴鹿は二枚の鉄扇を持ち優雅に舞い踊った。

鈴鹿の連続攻撃に尻尾を巻いて逃げまどった。

「この野郎、そっちがその気ならこっちだって容赦しねえぞ！」

猿助は光の粒子で構成されたソード ビームセイバーを抜いた。

大通連と小通連が連続して飛んでくる。

踊るような剣舞で猿助が妖刀の連撃を防ぐ。あり得ない……猿助が強い!?

「見たかオレの剣捌き！ このビームセイバーは自動運動機能付きなのだ、ウキキキ！」

お前の能力じゃないんかいつ！

ビームセイバーの操り人形状態。滅茶苦茶な格好で猿助はビームセイバーを使っているが、見事に鈴鹿の攻撃を防いでいるのだからスゴイ。自動運動機能が。

だが、所詮は一本の剣。

大通連、小通連、鉄扇鉄扇、ついでに回し蹴りのコンボ攻撃！

鈴鹿の蹴りがヒットして猿助がぶっ飛んだ。その隙に鈴鹿はプロテクトスーツを脱ぎ捨てた。

「動きづらくて仕方ありませんわ！」

トラ柄の下着姿を惜しげもなく披露して、出血大サービスだ！

猿助のお面の下からダラダラ血が流れていた。蹴られた衝撃のほうでだよ！

「そ、そんな格好をしてオレを誘惑するつもりかよ！」

「動きづらいから脱いただけですわ！」

「水着だと思えばエロくななんかねーんだからな、お前貧乳だしな！」

「貧乳で悪うございましたわね！」

眼を光らせた鈴鹿が踏む込もうとしたとき、その前に立ちふさがった美女三人衆。

ハイレグ水着の網タイツ、胸は鈴鹿よりも遥かにデカイ。

「我らはかぐや様のインペリアルガード 三人官女！」

「かぐや様の命でサルをお守りいたします！」

「覚悟しなさいトラ女！」

三人官女の攻撃フォーメーションは アタック！

同時多発的な三方向からの攻撃だ。

しかも三人官女の武器は二刀流のビームセイバー。合わせて六撃

の攻撃は敵の逃亡を許さない。

二振りの妖刀、そして二枚の鉄扇を持ってしても防ぎきれない。鈴鹿の背と腹が焼け斬れ血が滲んだ。あと僅かかわすのが遅れていたら、重傷を負わされていたに違いない。

額の汗を手の甲で拭う鈴鹿。その汗は冷ややかだった。

通常であれば一対三でも鈴鹿には勝てる自信があった。だが、この戦いの相手は一なのだ。寸分狂わず攻めてくるコンビネーションは、六本の手を持った一だった。

息の揃っていない三人など容易い、だが目の前の美女たちは……。

再び三人官女が攻めてくる。

先ほどよりも速い！

ビームセイバーを受けた鉄扇が宙を舞った。

「しまった！」

一つの防御が崩されたことによって、全ての防御が総崩れになる。鮮血が紅い眼の三人官女たちの白い顔に飛び散った。

全身から血を噴きながら飛び退いた鈴鹿御前。

斬られれば強烈な痛みが奔る。だが、二振りの妖刀がある限り負けはしない。

鈴鹿の周りを回る妖刀が淡い光で傷を癒してくれる。

持久戦に持ち込めば鈴鹿にも勝機がある。斬られた傷を癒しつつ、相手の体力が尽きるのを待つ。

しかし、鈴鹿の心に闇を落とす言いしれぬ不安。

全てを脱ぎ払い無心の覚悟で鈴鹿はこちらから攻撃を仕掛けた。

斬られても死さえしなければ癒やせばいい。

二振りの妖刀と二枚の鉄扇、全てを一人に向かって振るった。他の二人に斬られる覚悟だ。

速いつ！？

鈴鹿の攻撃は一人を仕留めるところか空振りに終わり、六撃の刃が鈴鹿の全身を切り裂いた。

すでに床は血の海に沈んだ。

斬られたブラジャーの肩紐を押さえながら鈴鹿は息を切らした。

「どうして……なぜ強く、より速く……」

そして、鈴鹿の体は鉛のように重く、疲労が全身を押しつぶしそ
うだった。

鈴鹿はハツとした。

「エナジードレイン!？」

その言葉を聞いて三人官女たちは薄ら笑いを浮かべた。

「今頃気づいたようね」

「ちよつと気づくのが遅いんじゃないかしら」

「さすが辺境の惑星の住人ね」

三人官女たちは鈴鹿に攻撃を仕掛けると同時に、エナジーを少し
ずつ吸い取っていたのだ。

これでは持久戦に持ち込まれたほうが不利。

三人官女は勝ちを確信した。

「片手でブラ押さえながらどうやって戦うのかしら?」

「きつとおっぱいポロリするのが怖いのよ」

「だって貧乳だから恥ずかしくて見せられないのよね!」

三人官女は大きな口を開けて笑った。

鈴鹿は唇を噛みしめながら策を練った。

「ちよつとタイム!」

叫んだ鈴鹿が物陰に隠れた。

すぐに三人官女が物陰に飛び込もうとした。それを防ぐ二振りの
妖刀。しかし、時間稼ぎにしかならない。

弾かれた大通連は天井に刺さり、小通連は床に突き刺さった。

「……止めよ!」

三人官女が声を揃えて鈴鹿の体を串刺しに!

できなかつた。

ビームセイバーを受けたのはプロテクトスーツだった。物陰に隠
れた鈴鹿は素早くプロテクトスーツに着替えていたのだ。しかもへ
ルメットまで完全装備。

「黒い三連星、破れたようですわね！」

敵の防具を持って敵の武器を防ぐ。

慌てた様子の三人官女がコンビネーションもバラバラで鈴鹿を叩きまくる。

だが、ノーダメージ！

「痛くもかゆくもないですわね。これなら動きづらさを我慢して着ていればよかったですわ」

ここかあ鈴鹿の反撃がはじまった。

大通連小通連のコンビネーション攻撃！

さらに鉄扇による乱舞。

三人官女の水着を切り裂きながら、次々と見る影もないボコボコにしていく。特に鈴鹿を笑ったこの顔を重点的に！

最後に残った三人官女が蜂に刺されたみたいな顔面をして、尻を床につけながらズルズル後退した。

「ちよつとタイム、こつちにもタイム使わせなさいよ。私もプロテクトスーツを着るから！」

「貴女たちは妾がタイムと言ったにもかかわらず、襲いかかって来ましたが？」

ドガツ、バキッ、グエエッ！

見るも無惨な光景すぎて自主規制が……。

強敵だった三人官女を倒し、鈴鹿は猿助の姿を探した。

「ダ……ダーリン!?」

鈴鹿の目に飛び込んだできた異様な光景。

フォークを片手に握ったまま、猿助はミートソーススパゲティに顔をつっ込んでいた。しかも、死んだように微動だにしない。

「大丈夫ですごさいますかダーリン！」

急いで鈴鹿は駆け寄り、ミートソースから猿助の顔を上げた。

……猿のお面被ったままじゃん！

これでどうやってスパゲティを食べようとしていたのか？

微かにシューゴォーという呼吸音が聞こえた。

無我夢中で鈴鹿は猿助のヘルメットとお面を投げ捨てた。

「嗚呼、なんてこと……」

静かに自分のヘルメットも脱ぎ捨てながら、鈴鹿は瞳から一筋の涙を零した。

そこにあつたのは変わり果てた猿助の姿。

体中の水分 いや、精力を吸い尽くされて枯れ果てた猿助の姿。それはまるで干からびたワカメ、キノコ、ミミズか……とにかく、見る影もない皺だらけの顔がそこにはあつた。

「す……ずか……」

グローブを嵌めた猿助の手が伸ばされ、鈴鹿はそのグローブを取って枯れた手を握った。

まるでその手や指は枯れ枝のようだった。温かいぬくもりもなく、ただ冷たく哀しいだけ。

「ダーリン死なないでくださいまし！」

「……最期は……桃の姉貴に……パフパフ……」

ガクツと猿助の首から力が抜けた。

「ダーリン！」

鈴鹿は人生ではじめて慟哭した。

皺だらけの顔に落ちて消える大粒の涙。

枯れてしまった猿助の口の蕾に、鈴鹿は自らの瑞々しい朱色の蕾を重ね合わせた。

交わされた口づけ。

緩やかに鈴鹿は顔を離した。

「妾の口づけでは目をお覚ましにならないのですね」

再び鈴鹿の瞳から涙がこぼれ落ちた。

短くも長い時間。

静かな刻の中で猿助は鈴鹿の胸に抱かれ……。

「ぐうぐがあゝ……」

いびきを掻いていた。

さらに。

「パフパフ……パフパフ……」

鼻の下を伸ばしていた。
最悪だ。

「この浮気者っ！」

鈴鹿の強烈な怒りの鉄拳が猿助の顔面にめり込んだ。

今度こそあの世に逝ったかな猿助

死相を浮かべて気絶した猿助を鈴鹿が背負った。

「んもお、ジパングに帰ったら温泉に突っ込んでやりますわ！」
乾燥椎茸扱いだった。

スペースかぐや編 8

雉丸は周りの敵を一掃したあと、猿助のことは鈴鹿に任せ、ポチと共に通気口に進入した。

迷路のように入り組んだ通気口を抜け、先に廊下へ降りた雉丸がポチを抱きかかえて通気口から出した。

けたたましいサイレンが鳴っている。今頃、血眼になって兵士たちが駆け回っているに違いない。

雉丸とポチは先を急いだ。

金属の廊下に響き渡る足音。二人分、三人分、四人分……雉丸とポチ以外の足音も響いてくる。

立ち止まって身構えている暇はない。

さつそく前方から敵に影が駆け寄ってきた。

しかし、その姿は……？

雉丸は首を傾げた。

「誰だったか……それよりもなぜここにいる？」

色取り取りのふんどし姿。

赤フンのレッド参上！

「我ら鬼道戦隊鬼レンジャー改め、かぐや護衛隊の五人囃子だ！」

レッドの左右に並ぶブルーとイエロー。

さらに雉丸とポチの背後にはグリーンとブラック。

一本道の廊下で挟み撃ちされてしまった。

雉丸はショットガンをバットのよう握った。

「弾がもつたいない」

はい、瞬殺。

ポコポコにされた鬼の山を踏んづけて雉丸とポチは先を急いだ。

どうしてfondシレンジャーがここにいたのか語られずまま。まあ、別にたいした理由なんてないだろうけど。

雉丸とオマケのポチの目的は、脱出ルートの確保とその他重要任

務。

向かう先はエンジンルームだった。

途中でカートを奪い大通路を爆走する。運転席に乗ってるのはポチだったりして！

「ボ、ボク運転できないよぉ〜！」

「大丈夫だよポチ、自動運転モードがあるから」

「でもそうやって自動運転に切り替えるの？」

「さあ？」

さわやか笑顔の雉丸。

恐怖に顔を歪ませたポチ。

「わぁ〜ん！」

結局ポチがハンドルを握るハメになった。

大勢の兵士たちがビームライフルを構えて並んでいる。

次から次へと土砂降りの雨のようにビームが飛んでくる。

「わぁ〜ん怖いよぉ〜！」

ビームコーティングされたフロントガラスに弾かれるビーム。貫かないとわかってても怖い。

「わぁ〜ん！」

叫びながらも華麗なハンドル捌き。そのまま兵士の列に突っ込んだ。

寸前で兵士たちの列は左右に分かれ、その光景はモーゼの海割り状態。壮観なまでに兵士たちがぶっ飛び退いてくれる。

危機に迫られて道を開けてしまった兵士たちだが、すぐに体勢を立て直してカートのバックにビームを乱射する。

再び土砂降りのようなビームが飛んでくる。

雉丸はカートに積まれていた武器を手を取った。どうやらバズーカ砲のような形をしているが？

スコープを覗き照準をオートセット。

使ったことがなくなっただって、使ってみればわかります。

はい、発射！

青白い稲妻のような光線が暴れ回り、次から次へと兵士たちが感電していった。

シューっつと煙を上げる黒コゲの山。
凄まじい殲滅力だった。

カートは兵士たちの海を越えたが、その先に待ち受けていたのは巨大ロボットだった。

二足歩行の人型機体、紅く光る一つ目、頭にはエネルギーを受信するウサミミ。これはまさしくスペースかくやの主力戦闘機体ラビエエだ。

ラビエエはラビバズーカを構えたが、室内で撃つと大変なことになるのでやめて、ラビマシンガンも危ないし、巨大なトマホークを構えた。

あんなトマホークでぶっ叩かれたらカートは真つ二つだ。

雉丸はスコープを覗き引き金を引いた。

稲妻光線発射！

あっさりとラビエエの持っていた盾で防がれた。

こうなったらアレしかない！

雉丸は声を張り上げる。

「ポチ、細い路に逃げ込んで！」

だって戦う必要なんてありません！

別にアレがラスボスってわけでもないし、雉丸たちの目的は別にある。ここで時間を取られる必要なんてナッシング！

ハンドルを切るポチ。カートの後ろからは巨大な足音を立ててラビエエが追っかけてくる。

このまま逃げ切ることはできるのか！？

ドスン！

隕石でも落ちたみたいなの衝撃でカートが浮かび上がった。

雉丸が後ろを確認するとラビエエが倒れていた。その背中から伸びているエネルギーコード。予備バッテリーに充電中だったのだ。

雉丸はだんだんと自分たちの心配より、宇宙海賊団スペースかく

やの心配をしはじめた。

この宇宙海賊はこんなことでやって行けるのだろうか。

持っている技術力はスゴイが、それを使っている吸血姫美女軍団のマヌケさが……。

カートは起き上がれないザビエエを尻目に、どこまでも走り続けた。

「ブレーキどこおー！」

だってブレーキのかけ方がわからないから。

スペースかぐや編9

操舵室から隣の部屋、かぐやが逃げ込んだ先はトイレだった。
基本女子トイレしかないラビットスター内。

トイレは当然のように全て個室。

桃がトイレに飛び込んだとき、とある個室に飛び込んだかぐやの横顔を見えた。

すぐに桃はプロテクトスーツを脱いで、その個室の前に立った。

「便所になんか隠れてねえーで、さっさと出てきな！」

ゴンゴンゴン！

桃はドアを殴るようにノックした。

すると返事が返ってくる。

「入ってまーす」

「知ってるっーの！」

ゴンゴンゴンゴンッ！

さっきよりも激しく叩いた。

「入ってまーす」

「だから知ってるっーの！」

ドンガンゴン！

殴る蹴るした。

「入ってまーす」

「てめえいい加減にしるよ！」

ドゴオーン！

桃は思いつきりドアを蹴破った。

「……………」

呆然とする桃。

「逃げられた!？」

個室の中はもぬけの殻。

ノック音に反応する音声再生機がトイレのフタの上に置かれてい

た。

「どこ行つた？」

トイレには“故障中”の張り紙。水を流すレバーには“触れるな危険”の張り紙。

……怪しい。

桃は躊躇せずには触れると危険なレバーを下げた。

すると本来なら水が流れるハズが、代わりにトイレの脇にあった隠し扉が開いた。ここからかぐやは逃げたに違いない。

狭い入り口から続く先も狭い路だった。人ひとりが通るのでやつとだ。天叢雲剣がちょー邪魔。

長く続く一本道を抜けると、そこは大きな球体状の部屋だった。

球は網柄の床で半分に仕切られ、床の一部を切り抜いた部屋の中。中央には、漆黒に輝く巨大な球体が自転していた。

かぐやは部屋の向こうでドアを引いたり押ししたりしていた。

「マスターキーどこで落としたんだろう。お願いだから開いて、早くしないとクソババアが来ちゃう！」

かぐやの背後に忍び寄る鬼気。

「クソババアって誰のことだい？」

ハツとしてかぐやが振り向くと、そこにはやっぱり桃がいた。

「もう来たの早すぎっ！」

「あんたの言つてたカギってコレのことかねえ？」

桃は黄金の鍵を指先で摘みながら、ユラユラ揺らして見せた。

「あつ、返してかぐやのカギ！」

「そんなに大事なカギなら、どうしてさっきの隠し通路なんか落としたんだい。ドジな子だねえ」

「かぐやドジじゃないし、不可抗力だし。そのカギがないと困るんだから返して！」

「具体的にどんな風に困るんだい？」

「たとえばこの扉が開かないとか、ラビットスターが発進できないとか……って何言わすんじゃボケッ！」

それだけ聞けば十分。

「絶対返してやんねえーよ」

意地悪に桃は笑った。

この黄金の鍵はかぐやがジパングに落ちてきたときから首に提げていた物。記憶を失っていてもずっと肌身離さずお風呂のときも持ち歩いてきた。無意識にもこれが大事な物だと認識していたのだ。

かぐやがジパングで記憶喪失になっている最中、この大事な黄金の鍵がなかったために、ラビットスターに残された部下は大変苦労したらしい。

なんとしても黄金の鍵を取り返さなければならぬ！

「早く返して！」

「返して欲しけりゃ力づくで奪ってみな！」

「……仕方ない」

かぐやは呟いた。

そして、かぐやは謎の小壺を取り出した。

「これが何だかわかる？」

「茶色い壺だろう？」

「中身を聞いているに決まってるじゃん！」

「そんなの知るわけないだろう」

「この中にはラビットスターのスーパーメインコンピューター“ウサツピー”が弾き出した、あなたの弱点が入っているのよおっ！」
「なにいい！」

桃は劇画チックな顔で驚いて見せた。かなりのオーバーリアクション。

が、すぐに気を取り直した。

「アタイに弱点なんかあるわけないだろう。そんなもんがあるなら見せてもらいたいねえ」

強気な態度。本当に弱点がないのかもしれない。

だったら小壺の中に入っているモノは？

「ウサツピーが導き出した答えに間違いなし。なんで弱点なのか

までは計算できなかつたけど、使ってみればわかること！」

かぐやが小壺のふたを開けて中から取り出したのは 梅干し！

これさえあれば白米何倍でも行けちゃうぜ。ジパングを代表する
国民食だ。

生唾を呑んだ桃の顔色が明らかに変わった。

ゆっくりと桃が後ずさりをしていく。

桃が、あの桃が怯えている！

何の変哲もない梅干しにどんな恐怖が詰まっているというのだ！？

さっそくかぐやは梅干しを一つ手に取り、剛速球！

「喰らえクソババア！」

「そんなもん喰えるかクソガキ！」

桃は天叢雲剣で梅干しを打ち返した。

「クソババア、食べ物に粗末にすんなよボケツ！」

「てめえが投げてんだろ！」

「避けるババアが悪いんだろボケツ！」

結論、梅干しは投げてても打ってもいけません。

そんなことなどお構いなしにかぐやが梅干しを連続で投げる。

「喰らえ梅干し乱れ打ち！」

「乱れ打つのこつちだよ！」

投げてきた梅干しをすべて打ち返した。

互いに息を切らせるかぐやと桃。

かぐやは新たな梅干しを取ろうと小壺に手を突っ込むが……ない
！？

相手の反応を見て桃は凶悪な笑みを浮かべた。

「もう終わりかい？ 残念だったねえ……」

ギロリ！

桃の眼で睨まれかぐやはすくみ上がった。

ここから桃の反撃がはじまる。

と、思いきや。

かぐやは地面に落ちている梅干しを拾って投げた！

「喰らえババア！」

「うわっ！」

不意を突かれた桃はらしかれぬ情けない声をあげてしゃがみ込んだ。
だ。

本気で梅干しが怖いのだ。

チャンスを見いだしたかぐやがしゃがんだ桃に梅干しを投げつける。
る。

「梅干しが怖いだなんて笑っちゃうんだから！」

「やめーっ！」

顔を防いだ桃の手に梅干しが当たった。

眼を丸くしてかぐやはその一部始終を見た。

叫ぶ桃。

「ああああっ！」

その手が見る見るうちに萎れていく。まるで老婆のような枯れた手。
手。

かぐやはピンとひらめいた。

「梅干しアレルギー！？」

「違うわっ！」

アレルギーではないにしても、あれほどまでに桃が梅干しを畏れる理由がわかった。単純な好き嫌いではなく、何らかの理由で人体に害を及ぼすのだ。

そうとわかればかぐやは床に落ちている梅干しを拾って投げけるま
で！

梅干しを拾おうと伸ばしたかぐやの手が止まる。

「揺れた？」

それは震度一にも満たないごく僅かな揺れ。

しかし、巨大なラビットスターが振動したということは、どこかで大きな爆発があったのかもしれない。

すぐにかぐやはうさ耳をそばだてた。

「……なに……もっと強く念を送って……」

突然の独り言。

かぐやが危ない人になってしまった!?

一時休戦してでも桃はツツコミを入れずにはいられなかった。

「何独り言言ってるんだい、気でも狂ったかい?」

「ちよつと静かにして、仲間とテレパシーで交信してるんだから!」

「テレパシーなんか使えるのかい!？」

「かぐやの種族が体得できる高位の……って静かにしてよ!」

かぐやは仲間との交信に集中した。

「なにになに……格納庫が破壊され……脱出ポッドも全滅……って、

マジでーっ!？」

なんだか救急事態が起こっているらしかった。

急に真剣な顔をするかぐや。

「あなたと遊んでる場合じゃないみたい。あなたの仲間のせいです
ペースかぐやは滅茶苦茶よ」

「アタイの下僕たちが悪さでもしたのかい?」

「まずはご主人様から責任取ってよね!」

かぐやの手が梅干しの伸びた!

「させるか!」

桃が天叢雲剣を振った。

鋭い骨の塊がかぐやに直撃する寸前、彼女は苦い顔して桃を指差した。

「ラビットビーム!」

なんとかかぐやの耳からビームが出た!

両耳から出たビームは螺旋を巻いて一本になり、天叢雲剣を弾き返した。

驚いて口を開ける桃。

「まともに戦えるんじゃないか?」

「これもかぐやの種族が体得できる技のひとつなの。できれば使いたくなかったけど」

「他にはどんなことができるんだい?」

「喰らえ梅干し……と見せかけてエネルギードレイン！」

かぐやは桃の腕を掴んで精気を吸い取った。
すぐに腕を振り払って桃は飛び退いた。

「それがそうかい？」

「ええ、これは初歩中の初歩。かぐやの種族なら誰でもできる技」

「とっておきはないのかい？」

わざわざ挑発する桃。

その挑発にかぐやは乗った。

「見せてあげるわ、究極の脱兎をね！」

脱兎　つまり逃げ足だった。

かぐやの姿が残像を残して一瞬にして消えた。

辺りを見回す桃。

音もせず、姿も見えず。

「喰らえラビットビーム！」

横から飛んできたビームを桃は爆乳を揺らしながらバク転しながらかわした。

着地してすかさず天叢雲剣を薙ぎ払った。

手応えはない。

「こつちだよクソババア！」

振り向くと大量の梅干しが飛んできた。

慌てて桃は高く跳躍した。

「クソッ、姿を見せやがれ！」

「ラビットジャップ！」

背後に迫る気配。

「ラビットビーム&梅干し！」

「させるかっ！」

大きく円を描いて横に振られた天叢雲剣。

かぐやのバリアが発動した。それでも押さえきれない。

空圧に押されたようにかぐやは後方の壁に激しく叩きつけられ、
地面に落下してうつぶせになった。

華麗に着地した桃の爆乳が上下した。

「もうダウンかい？」

「……梅干し」

かぐやはうつぶせになりながら桃の胸を指差した。

「……ッ!？」

驚いて桃は自分の胸の谷間に挟まれていた梅干しを払った。だが、すでに時遅し、胸が当事者比較一五〇パーセントくらい下に落ちていた。

あの張りのあった美しい乳が、垂れパイになってしまったああああ。

あまりのショックに桃は床に四つんばいになった。

「ジパングーの絶世の美女が……」

心が折れそうだった。

むしろこんな醜態を晒すくらいなら自分で追ってやりたかった。

勝ち誇った高笑いをするかぐや。

「あほほほほっ、かぐやのナイスなボディにひれ伏すがいい!」

今やナイスボディの代名詞はグラマラス美女かぐやのモノになってしまったのか!

が、かぐやは何か違和感を感じた。

なんだから目線が急に低くなってしまったような。

「きやあああっ!」

可愛らし声で叫んだかぐやの体が幼女になっていた。

「しまった、エナジーを使いすぎた!」

だからラビットビームなどの技を出すことに渋っていたのだ。

かぐやも桃と同じポーズで落ち込んだ。

そのとき、隠し通路から猿助を背負った鈴鹿が現れた。

「大丈夫ですか桃さん!」

ダメだった。まだ落ち込んでいる。

さらに扉が轟音を立てながら破壊され、カートが部屋の中に入った。

雉丸が部屋の真ん中にある球体を指差した。

「ポチここがエンジンルームだよ……桃さん？」

そこには落ち込んだ桃がいた。

ちなみにポチはやっとカートが止まって放心状態。目を見開いたままブルブルしている。

鈴鹿の背中に乗っていた猿助が自らの意志で床に降り、ヨボヨボの体を震わせながらフルフル桃に近づいていった。

「姉貴の……パフパフ……」

夢遊病者状態だった。

すっかり爺さんの顔になってしまった猿助が桃に手を伸ばす。

「ももお〜」

まるでスローモーションのように、猿助の手が猿助の手が……。

「むねえ〜けつう〜ももお〜」

プルプル震える猿助の手が桃に触れようとした瞬間。

「どこ触ろうとしてんだい！」

爆乳を激しく揺らしながら怒りの鉄拳が決まった！

バチコーン！

鼻血を噴きながらぶっ飛ぶ猿助。

美脚を伸ばして仁王立ちする桃の見事な尻に食い込むフンドシT
バック。

そして、張り裂けんばかりの垂れてない爆乳！

いつの間にか桃は精気を取り戻していた。

ついでにぶっ飛ばされた猿助はそのまま部屋の中心にある巨大な
球体と衝突。

かぐやは連続瞬き世界記録に挑戦して、部屋中に響き渡る大声が
あげた。

「なんてことしてくれたのよポケット！！」

刹那、球体が大爆発を起こした。

煙が渦巻く室内にスピーカーから合成音が響いた。

「アトー〇秒デラびっとすたーノ全機能ヲ停止シマス 5、4、

3……」

煙の中から笑い声が聞こえた。

「あははは、終わった」

それはかぐやの笑い声だった。

さらに続けて桃の声がした。

「終わってないっつーの。これからたっぷりお尻ペンペンしてあげるよ!!」

「ちよ……」

「下僕の分際でアタイに逆らうじゃないよ!!」

ドガツ、バキツ、ベギツ、ボキツ!

そのあとに聞こえたかぐやの悲鳴にこの場にいた誰もが耳を塞いだのだった。

終幕

青い星へ向かう一隻の 星の船。

その内部。

「誰だアタイのケツ触ったのは……サルてめえだな！」

「オレじゃねーよ！ だったとしてもこれじゃ不可抗力だろ！」

前にも増してギユウギユウ詰めだった。

なぜかSMグッツで拘束されている幼女がひとり。

「これでかぐやのこと人質に取ったつもり！」

かぐやだった。

桃はかろうじて動いた足の裏でかぐやの顔面を踏んづけた。

「うっさいんだよ、人質じゃなくてアタイのげぼく。まだわか
つちやいないようだねえ」

桃は足の裏でかぐやの顔面をグリグリした。猿助の臭そうな足じ
やなくって本当によかった。

鈴鹿は猿助を後ろから抱きしめながら乗っていた。

「ダーリン、ジパングに帰ったらすぐに挙式をしましょうね」

「しねーよ！」

「そうですね、その前に両親への挨拶が先ですわね」

「それもしねーよ！」

相変わらずの二人だった。

ポチを抱いていた雉丸が丸い窓の外を指差した。

「ほら、見えてきたよ」

「すっごーい、青い宝石みたーい」

もうすぐ故郷に帰れる。

かぐや以外はね！

一同に感慨に耽っていると、スピーカーから通信が聞こえた。

《清明だけと聞こえる…… ったく何度呼びかけても出ないんだから

……》

「聞こえてるよ」

ちよっぴりドスの効いた声で桃が返した。

《えっ……聞こえての!? え〜と、そのだな、ずっと通信が繋がらなくて……そのお》

「もう全部終わったよ、これからジパングに帰るところさ」

《ふおおおおっ、わしの活躍があつてこそその偉業じゃな!》

亀仙人が通信に割り込んできた　　が。

《すっ込んでよエロ仙人!》

スピーカーの向こうからドンという撲殺音が聞こえ、何事もなかったように再び清明の声が聞こえた。

《すまない、ちよっと邪魔が入った……まだ生きてたのかハゲ!》
ドタバタ取っ組み合いでもするような音が聞こえてくる。

手が離せない様子の誰かと誰かの代わりに女性の声が聞こえてきた。

《やつほー金ちゃん、元気してる〜?》

呉葉だった。

《こっちはなんだか大変なことになってるのよ!》

《雉丸のお母さん僕に代わってください》

少し息を切らした清明が話しはじめた。

《実はジパングは大変なことになってるんだ。魔女つ娘大魔導士温羅が復活して海底鬼岩城を造ったり、酒吞童子と茨木童子が生きているという噂が各地か飛び込んでくるし、他にも大嶽丸という鬼が失恋の痛手で暴れ回ってるとか》

さらにもう一つ清明は付け加えた。

「これはわたくし事で恐縮なんだけど、ウチのママがジパング征服に乗り出しちゃったりして」

あの大怪獣九尾の狐か。

なんだかジパングが大変なことになっているのはわかった。

話を聞き終えた桃は楽しそうに微笑んでいた。

「ジパングーの絶世の美女、この桃ねーちゃんの出番のようだね。」

てめえら、今すぐ怪物どもを退治に行くよ!」

こうして桃の漫遊記はまだまだ続くのだった。

ここがかぐやがボソツと呟く。

「無事に着陸できたらいいいけどね」

「……………」

一同沈黙。

猿助が叫ぶ。

「オレは若いねーちゃんとの思い出を忘れるなんてイヤだーっ!」

こうして桃たち一行を乗せた 星の船 は流れ星となった。

死ななきゃまた逢おうぜ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9809d/>

新説御伽草子桃ねーちゃん

2010年10月8日13時31分発行